

若き獅子

池波正太郎

講談社文庫



若き獅子

池波正太郎



講談社文庫

若き獅子

池波正太郎

講談社

目次

「忠臣蔵」　七
奇人・北斎　三五
若き獅子　五一
悲運の英雄　七五
壮烈なる孤忠　一二五
新選組敗走記　一四一
明治元年の逆賊　一六三
解説　尾崎秀樹　一九六

若き獅子

「忠臣蔵」

(一)

江戸城内松の廊下で、浅野長矩が吉良上野介へ刃傷に及んだのは、元禄十四年三月十四日の午前十一時頃であった。

この、あまりにも有名な刃傷事件の原因については、芝居、映画、小説などにも定型が出来てしまっている。

賄賂を厭う浅野内匠頭の清廉潔白な性格と老獪にして利欲の強い吉良上野介の対立！

結局、勅使饗応指南役たる上野介が、内匠頭の進物の過少なのを怒ってさんざんに恥をかかせるということになっている。

映画などでは、勅使院使饗応の数日、吉良に煮湯を呑ませられては憤懣やるかたなく、帰邸して心たのしまぬ内匠頭を奥方がなぐさめる。

「殿。なにごとも、ご堪忍あそばされまして……」

万感を眼にこめて、酒をすすめながら内匠頭をなぐさめる奥方。

「よい、わかっておる」

愛妻家の内匠頭は、奥方のやさしい慰撫に、じっと憤懣をこらえるのである。

このシチエーションがないと、刃傷後、ただちに切腹させられ、家も断絶という内匠頭の悲劇は、もう一つ盛り上らない。

しかし、どうも内匠頭夫妻は、このような琴瑟(きんしつ)あい和すという間柄ではなかったらしい。

内匠頭が男色を好んだということは、今や隠れもない事実になっているし、当時は、鈴木重八という十六歳になる児小姓をもっぱら寵愛していたようである。

だから、奥方阿久里との間に子はない。

側妾との間に生れた子もない。

浅野家の父祖は、清和天皇から出て、美濃の土岐氏から別れ、信長、秀吉、家康と三代の覇権に仕え、浅野長晟(ながあきら)の代に安芸広島四十二万石を食んだ。これが浅野の本家である。

この分家が、内匠頭の播州赤穂の浅野家であり、奥方阿久里の生家、備後三次(みよし)の浅野家ということになる。

赤穂浅野家の藩祖は長重。はじめは常陸真壁五万石の城主であったが、その子長直の代に、播州赤穂へ転封。五万三千石を領した。

この長直の孫が内匠頭である。

長直は名君であり、赤穂築城、新田開発、塩田奨励など大いに治績をあげ、豪快に人材を登用した。このときに堀部弥兵衛などが浪人から召抱えられているのだ。

経済政策なども派手なやり方であったようだし、万事にコセコセしない、まだ戦国大名の行き方が残存していた長直の治政だったが、内匠頭の代になると、ガラリと変ったようである。

内匠頭の父長友は藩主たること僅かに五年で、すぐに内匠頭が九歳で家督を継いだのである。かくて藩主たること二十七年、内匠頭は吉良上野に刃傷、赤穂転封以来五十七年にして浅野家を潰してしまった。

刃傷の原因は、これといってハッキリしたものが残されていないのが本当である。殿中におけるいくつかの刃傷事件のいずれもが、納得のいくような理由と実態がわかってはいないのである。

水戸の漢学者で、万巻の書を読みつくしたという小宮山綏介（やすけ）の説によると、内匠頭は万事に勘定高く、吉良への礼物の金高にもいちいち細かく指図をした上に、饗応役をつとめる上の費用を大いに削減したということになっている。

つまり、世の中がこういう風潮を帯びてきたことはたしかで、大名も武士も、刀より算盤が大

切。何ごとも金の世の中であるという流行思想、それが、大名、武家の新しい行き方であるという考え方を内匠頭みずから率先して行なったということなのである。

しかし、内匠頭のは物を惜しんで蓄財を増やすという消極的なやり方であったようだ。

金の世の中なら、万事に金がかかる。

去年は十のもので勅使饗応をまかなったとすれば、物価高の時世に今年はもっとかかっても不思議はないのに、浅野家ではケチケチと畳のへりまでも安物で間に合わせようとする。指南役の吉良にしてみれば、当然おもしろくはなかったろう……と、こういう見方をしている。

むろん、赤穂びいきは、この説を反動的なものとして一笑に附している。

しかし、どう考えても私は浅野内匠頭という大名を立派な男だったとは思えないし、その上、どこか異常な性格、体質の持主であったように思えてならない。

内匠頭の男色については、奥方阿久里の生家があった備後三次に、今でも阿久里の結婚は非常に不幸なものであったという説が残っている。

阿久里のみか、内匠頭は他の女にも実子を生ませてはいない。まずノーマルな性情の持主ではなかったといえるし、それに吝嗇(りんしょく)で民百姓から搾りとることばかりしか考えていない大野九郎兵衛などの家老をもっぱら重用し、人材である大石内蔵助をつとめて遠ざけていた内匠頭である。

大石は昼行灯などといわれているが、登用しないのだから力の振いようがないのは当り前の話だ。

こういう内匠頭なのだが、また別に、珍らしい性質をもっていたようだ。

当時、加賀百万石の名君とよばれた前田綱紀の夜話に、こんなことが書いてある。

江戸市中の要地を大名達が火消しを受持っていたのだが、このほかに、火事が起った場合、臨時に大名火消しの加勢が大名達に下ることがよくあったという。これを「奉書火消」とよんだ。

――其時分、浅野内匠頭、たびたび奉書火消に御出で候。名子なる火消の上手にて、毎度消しとめ申さるるにつき、内匠頭御出で候えば、諸人、もはや火事鎮まり申すべき由、申し候……

と、夜話は記している。

延宝二年二月一日に、赤坂一帯が火事となったときのことだ。

このときも、内匠頭に奉書火消しの命が下った。

こうなると、内匠頭はもう別人のようになる。

「急げ、急げ！」

素早く火事装束に身を固め、馬に飛び乗り、采配を振ってみずから指揮に当り、颯爽として陣頭に立つ。決して家来まかせにはしない。火事ときけば居ても立ってもいられなくなる。公儀から火消しの命が下らなくとも、どこのどんな小さな火事でも飛び出して火消しをやりたい、それがもう好きで好きでたまらないのだ。

このときも内匠頭は陣頭に立ち、芸州侯の屋敷が炎に包まれるとみるや、水際立った指揮ぶりでたちまちに長屋の屋根をこわし、梁を切り落し、それでも火が止まらぬと見るや、すかさず長屋を引き崩して、見事に火を止めてしまった。

すると、今度は、屋敷内の物置のようなところへ飛火し燃えはじめた。

「つづけ！　余につづけ！」

こうなると少しも火を恐れない内匠頭である。いきなり、その火の中へまっさきに飛び込んで行くのだ。

殿様が率先して飛び込むのだから、家来達も黙っているわけにはいかない。先を争って火の中へ駈け込み、燃えかかる家屋を必死で引きこわして火を止めたという。

――かようの儀、大体の者の成りがたき事の由にて、ことの外御感じ候。いかさま常体の人にては之なく候……と、夜話は語っている。

とにかく、消防ということについては異常な関心をもっていたらしい。

むろん、それは当時の大名の心がけとして立派なものであるが、自分の屋敷へ火がついたのでもないのに、みずから飛び出して行き、しかも勇敢に火中へ駈け入るのだから、大いに珍重するに足る殿様だったといえよう。

こういうわけで、平常も消防訓練にはうるさい。

消防演習は浅野家の名物で、内匠頭はこのとき薙刀（なぎなた）をかいこみ号令をかけたという。

夜話に――長刀を抜身にて御持ち、少しも臆れ申す体も候えば手討にも致さるべき体に候……とあるのがそれだ。

自分の号令を家来が間違えたりすると、手討ちにもしかねない有様だったのである。

ひまがあると家来を集め、江戸や赤穂の領国の地図をひろげて、消防の研究をやる。それがまたツボにはまっているばかりではなく、実際の消防の知識や指揮の見事さなど家来達も舌を巻いたということだ。

人間とは、まことに不思議なものであると、私はつくづく思う。

消防についてはこれだけの見識と実力がある殿様が、理由もわからぬ喧嘩で刃傷をし、しかも、相手の命すら奪えずに五万何千石の家をつぶし、何百人の家来達を路頭に迷わせ、自分も切腹をする、というバカバカしいことをやってのけるのである。

私は、当日の刃傷が内匠頭にも家来達にも全く予期し得なかった激発だと思う。

吉良に苦しめられていたとか、前々から内匠頭が怒りを抱いていたという記録が全く赤穂浪士の側に残存していないからだ。

無頼漢どもの殺傷沙汰に、いわゆるガンをつけたから殺ったのだというのがよくある。気に入らぬ眼つきでこっちを見たから、それがシャクにさわってやっつけたというのだ。

ごろつきどもと大名とは比較になるまいが、しかし、人間は、そんなつまらぬことでも撲り合ったり殺し合ったりするものなのである。

浅野と吉良の刃傷が何の原因であったか知れたものではないのだ。

内匠頭長矩という殿様は、前にのべたように、かなり奇矯な性格があったように思われる。精神の活動と肉体の働きとのバランスがいつもギクシャクとして調子がととのうことなく、それに並外れたカンシャクもちだったことはあまりにも有名だ。

刃傷の当日は、どんよりとした曇り日で、そのうっとうしい天候が、内匠頭のカンシャクを知らず知らず不快感から暴発にまでもっていったのだという説もある。

案外、こういうことに重大な原因がひそんでいるものかも知れない。人間というものの言動が、まことにあっけない素因から思ってもみない方向に展開してゆく事実はいくらもある。

このように書いてくると、内匠頭のみに素因があって吉良上野介は気の毒な犠牲者だというように見られるかも知れないが、上野介にもこういう話がある。

『玉話集』と題した津軽信政の言行録に、こんなことが書いてある。

信政が神田の屋敷にあった頃、あるとき吉良上野介を招き馳走をしたことがある。このときは旗本や御城坊主なども招ばれた宴席であったが、吉良は、次々に運ばれる料理には手をつけていたが、米飯が出されるとこれには一箸もつけない。

接待に当っていた津軽家の侍が、

「いかが遊ばされましたか？」

と訊くと、吉良は、

「料理は結構だが、飯は不味くて口に入り申さぬわ」

満座の中で、聞えよがしにズケズケと言い放ったという。

これを耳にはさんだ津軽家の御膳番をつとめていた大橋某が、

「人のところへ招ばれて来て、何ということをぬかすのだ。たとえ飯が不味くとも、うまいと言うて食べるのが人道というものだ。こうなっては、われらも殿様からお叱りを受けるは必定。場合によって腹切らねばならぬ。よしこの上は吉良上野介の頭を打ち割り、わしは腹切ってみしょう」

こう言って、席上へ飛び出そうとするのを、やっと朋輩が押し留めた。

津軽信政は、満座の中で吉良に毒づかれてもニコニコと笑っていて、むろん、家来たちをとがめようとはしなかったとある。

――上野介様には我儘なる御人の由、風聞ありしが、右も之あるにや……と玉話集は記している。

吉良の傲慢は、当時かなり評判のものだったということもわかる。

また、実子三郎を上杉の養子にさせ、ついに上杉十五万石の当主にさせてしまった政治力にもなみなみならぬ老獪さがうかがわれるし、吉良について不利な挿話は掃いて捨てるほど見出すこ

とが出来るのだ。

その反面に、三河の領国では名君との評判が高く、いまだに彼の領地だった三河幡豆郡では「忠臣蔵」の芝居が興行出来ないと言われている。

とにかく領民の愛慕を受けていたことは確かで、吉良もまた領国の治政には、

一、黄金堤の築造
二、寺島用水の開鑿
三、雑田川排水路の開鑿
四、富好新田の開墾
五、塩業の奨励

など大いに力をつくし、これは浅野びいきの史家も認めるところだ。もっとも「右のうち、一、二、三は後の世好事家が捏造したものらしいが、四と五は吉良の治績としてあげるべきものと思われる」などと注釈をつけてはいるが……。

このように、吉良上野介にも異なる二つの面が明らかなのである。この二面の性格をどういう眼でみて彼の人間をつくりあげ得るかといえば、それも、人さまざまに違ってくるのである。

主君内匠頭の仇を討った四十七士にもまた、四十七通りの異なる人間性があり、その人びとが

二つの面をもっているとすれば、九十四通りの複雑な性格がからみ合って主君の敵討ちをしているのである。

大石内蔵助のように、幕府の一方的な裁決を正そうとし、浅野家再興運動をつづけながら一方には同志の団結をかため、いよいよ再興の望みもはねつけられたとなって起ち上り、吉良の首を討って公儀の政道に痛烈な一矢をむくいようと考えたものもある。

片岡源五衛門など故内匠頭の愛寵に感じて行を共にしたものもある。

また武士の義理、つまり武士道の約束へまっしぐらに突き進んでいった堀部弥兵衛、安兵衛父子のごときもある。

当初の昂奮から同志に加わり、次第にその気力もおとろえ、こんなことをしても仕方がない、馬鹿々々しいと割り切って脱落したものもあり、逃げてしまいたいのだが卑怯者の汚名を着るのも厭なので、ずるずるとくっついてきたものもないとは言えない。

つまり人間性には、昔も今も変らないのであって、人それぞれにこの事件を好むところによって解釈してよいのだと私は思うが、いかがなものであろうか。

おそらく、大石内蔵助にとって、主君内匠頭の人間性はあまり好感がもてなかったものだったろうと思う。

「殿も、あのままでは仕方がない。何とか一国の藩主として恥かしくないような力をそなえていただきたいものだが……」

つねづね大石はそう思っていたに違いあるまい。

内匠頭は十七歳のころに一度勅使饗応役をつとめている。その経験がありながら二度目に失敗をしてしまった。それも、おそらくつまらぬ原因から家をつぶし、何百人という家来と家族を路頭に放り出すようなことを仕出かしてしまった。

「言わぬことではない。わしが江戸に出ていたら、こんなことはさせなかった」

おそらく大石は、内匠頭刃傷の報をきいて舌打ちをしたことだろうと思う。

だが、いくら悔んでも追いつかない。大石は主君からうとまれている、遠ざけられている。祖父長直の治政の後をついで、内匠頭が祖父に負けぬやり方で名君の世評を得ようと努力したことは、わかる。

どこの家でも、名君のあとを継いだものは骨が折れる。自分のものとなった領国と藩政に染み込んでいる祖父長直のおもかげを追放して、あくまでも自分のものにしたい、自分の思い通りの赤穂藩にしたいという焦りもあったろう。これは、どの大名の家にも起ることなのである。

そこで領主が替ると、内閣交替が行なわれる。旧勢力を消し、新勢力を自分のまわりに侍らせ、思うままにふるまいたいからだ。

内匠頭も、むろんこれを行なった。自分が向かい合っていて威圧を感ずるようなのは困る。内蔵助のような立派な男の前ではいくら殿様風を吹かしてみても通用しないのである。

必然、おべんちゃらのうまいのがとって替る。

何事も殿様のおっしゃることには「ごもっとも、ごもっとも……」とペコペコ頭ばかり下げ、その裏側ではたんまり甘い汁を吸おうという奴ばら。

大野九郎兵衛家老がそうであり、刃傷当時、江戸家老をつとめていた藤井又左衛門や安井彦右衛門のごとき重臣は、みなこの類であったらしい。それが揃いも揃って利欲主義の、ためこみ主義であったことは歴然としている。こういうのが気に入られていたのだから、内匠頭も非常な倹約好きであったのであろう。また内匠頭自身も贅沢なまねは余りしなかったようだ。

内蔵助は、おそらく主君への愛情からその恨みをはらすということだけで仇討ちをしたのではあるまい。名目はそれでよい、そのほうがよいのである。

機会あれば家を取潰し、浪人の数を増加させることばかりしている幕府の高等政策と、それにからむ幕閣の権力者たちの暗躍と利権。将軍の命令一つでたちまちに一藩の家来と家族は住むところ生きる道を失ってしまう。それも名目がきちんとたったものであればよいが、いささかも人の情というもののみられない、しかも、喧嘩両成敗の掟を破った裁決。

こういうものへの怒りを押さえ、なおも大石は、内匠頭弟の大学をもって、たとえ幾ばくでもよい、家の再興を……と願い出たのだ。この願いが聞きとどけられたら、内蔵助はおそらく吉良邸討入りは決行しなかったろう。

こうした苦悩の二年間にあって、内蔵助は放蕩三昧に暮した。討入りがきまってからは、金を息主税に与え、

「思うさま、この世の美酒と美女をたのしむがよい」と言っている。

敵をあざむく放蕩三昧などと言われているが、そんなつまらぬ解釈はあるまい。

苦悩の中にあって、思うさま遊び呆けることの出来た内蔵助の人間性こそ、私は「忠臣蔵」の物語の中でもっとも好きなものである。

それでいて、自分の主張、信念というものには、あくまでもこれを曲げずに貫ぬき通すという、巌のごとき性格。

それにしても、内匠頭のような殿様をもった内蔵助は不運であった。

昼行灯でもよい、暖かい赤穂の領国で、大石内蔵助は家族と共にむつみ合い、平凡な一生を送りたかったろうに……。

(二)

「忠臣蔵」を出せば大入りは確実だといわれた演劇映画の〝独参湯〟も近頃は効目が薄くなった

ようであるが……。

それでもまだ今年度も一、二の映画化が行なわれるようだし、むろん歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』の上演も何度かあることだろう。

華やかさと悲壮さに彩どられた起伏に富んだストーリイと、ラストには凄絶な討入りの殺陣がある忠臣蔵の物語は、つくる方にも見る方にも、まだ飽きがこないとみえる。

しかし、私は、先年T社とD社が製作した忠臣蔵を上映中の映画館の廊下での若い観客達の会話を再三耳にして、この〝独参湯〟も間もなく効力を失う運命にあることを感じた。

「第一、君、賄賂の出し惜しみをしてさ、トラブルを起してだよ、その上にさ、何百人もの家来も自分の領地も捨てて喧嘩を吹っかけるなんて、およそ意味ないな」

「つまりバカなんだ、内匠頭っていう大名は……」

「賄賂で政治が動くなんて、昔だって今だって常識だもんな。ケチだったんだな、内匠頭は——」

「しかもさ、それだけの犠牲を払ってだな、相手の吉良を殺せなかったってのは、よっぽど、だらしがねえ奴だったんだよな」

まあ、ざっとこんなような会話ではなかったかと思う。

吉良上野介という人物を、これ以上は憎たらしい奴にしたくても出来ないというところまで毒々しく塗り上げた芝居や映画を見ても、今の若い人達は、そういう見方をする。

現代人をナットクさせるためには、ますます吉良をあくどく、いよいよ内匠頭を清廉潔白に描くということより、忠臣蔵を見せる手段はないものであろうか——。

この辺で、史実的な忠臣蔵がつくられてもよいと思う。

吉良の立場に立って描くというのではなく存分に資料を駆使したリアリズム忠臣蔵が出てもよいと思うのだが——永年、国民性に溶け込んで愛されてきた物語を今更ブチこわし、みみっちい話に仕組んだところでどうにもなるまいとおっしゃる方も、まだ多勢いよう。ともかく、私にとって、浅野内匠頭という人物は、余り好きになれない。

刃傷当日の模様を見ても発作的な激発によるものだし、若いときには同じ吉良の指導によって同じ御馳走役をつとめていて、いわば経験者である。

汚職横行の世に得意な活躍ぶりをしめした吉良上野介も決して善良な老人ではないが、それにしても、あんなことで自分も死に、領国も家来も潰してしまったのは余りにも情けない。しかし、それでも武士の意地、見事に吉良を討ち果たしたのなら話は別だが……。

それに内匠頭は男色を好んで、奥方の阿久里との十余年にわたる結婚生活にも子が生れていない。奥方の実家である備後の国三次では、内匠頭との結婚が阿久里に非常な苦悩を与えたという話が、いくつも伝わっている。

ともかく性格的に異常な欠陥を持った人であったらしい。

大石内蔵助のような立派な家老を遠ざけ、藩政には大野九郎兵衛などを重く用い、領国の政治

もあまり良いものとは言えない。

内蔵助は殿様におべっかも使わなかったろうし、人間的に殿様より数段上等に出来ている。上等な家来を殿様が厭がるのは昔も今も同じだ。だから内蔵助にしても主君内匠頭個人には愛情をもってはいなかったろう。彼が四十余名を率いて起ったのは――喧嘩両成敗の掟がありながら、浅野には厳罰、吉良には何のとがめもなかった公儀政道を正すためという名目の下に、徳川幕府の政治のありかたへ、彼の怒りを叩きつけたものだ。

太平の世に、一国が潰れ、家中何百人が家族を抱えて路頭に迷うことは、いかに主君の不手際があったとはいえ、大きな社会問題である。

内匠頭が死に、浅野家が潰されるまでに、幕府が浅野家にとった態度は一片の情というもののない徹底的に冷酷なものであった上に、改易後に大石が懸命に運動し幕府へ嘆願した御家再興の望みをも、幕府は突き返してしまった。

浅野家は、有力な背景を持たぬ小藩だけに、将軍や老中に対しても有利な運動ができなかったようだ。

内蔵助が討入りを決意したのは、故内匠頭弟の大学をもって浅野家再興をするという望みが絶れたからである。もしも再興が許されていたら、討入りの決行はなかっただろう。

内匠頭刃傷から討入りまで、約二年の間に、こうした赤穂方の動きがあり、しかも内蔵助は慎重に事を運んできたので、討入りの当夜、元禄十五年十二月十四日（正確にいうと十五日の未明）には、吉良方としては、全く浪士の襲撃を予想してはいなかった。

前年に屋敷替えになった本所松坂町の屋敷の改築もまだ完成せず、上野介の老妻もまだ移り住んではいなかった。

当夜の闘いは、赤穂浪士の一方的な跳梁にまかすのみで、吉良方は全く手も足も出ず、従って、映画や芝居における派手な殺陣が展開されたのではない。

米沢十五万石の当主、上杉綱憲は吉良上野介の実子である。我子を有力な大名の養子にやり、自分の勢力を拡張するというような政治的な手腕は上野介の得意とするところだ。綱憲も実父の身が心配だから、いろいろと手をつくした。

上杉家から付人を出し、上野介の身辺を護らせたことはもちろんだ。この付人の一人で当夜の襲撃から生き残り、のちに上杉家へ戻ることができた山吉新八という人の語ったことを記したものが今も残っている。

これによって、討入り当夜の模様、実態を探ってみるのも面白いと思う。

山吉新八は、上杉藩士山吉兼定の三男である。

主君綱憲の命によって討入りの約一年ほど前に出府し、上野介の息左兵衛の近習として仕えていた。ちなみに給料は年七両であったという。

十二月十五日未明――赤穂浪士は吉良邸表裏の両門から押しかけ、「火事だ、火事だ」と連呼しつつ、門番を斬り殺して邸内に侵入した。

「火事だという声を聞き、わしは、はね起きて南書院の廊下へ出た。すると、小太鼓の音にまじって、曲者どもの叫び声が、屋敷内のあちらこちらから近寄って来る。そのとたんに、わしは、赤穂の浪人たちだなとわかった」と、後に新八は語っている。

おそらく山吉新八は長屋ではなく本屋に寝ていたものと思われる。

「ハッと思い、わしはな、あわてて大刀を取りに部屋へ引返そうと思ったが……もう間に合わなんだ……」

たちまちに、新八は浪士四名に取り囲まれた。

それでも部屋を出るとき、とっさに脇差を摑んできていたので、新八は素早く飛び退って抜刀した。

「何者だ？」

新八の叫びよりも早く、浪士たちは前後左右から整然たる攻撃をかけてきた。

夜の闇に包まれた狭い廊下での闘いでなかったら、新八はひとたまりもなく斬り倒されていたろう。

「脇差の方がかえって働きやすかったようだ。相手は何となく大刀を持て余している感じで、わしはその隙をみて、浪士の一人の肩先を斬ってやったら、いや、その浪士め、大ぎょうな悲鳴をあげおってな……」と、後に新八は語る。

傷を負ったその浪士を介抱しつつ、一人の浪士が闇の中を後退して行った。

新八は残る二人と闘い、遂に屋内から庭先へ斬り立てられていったが、ここで一人を池に蹴り込み、再び屋内へ飛び込んだところを待構えていた浪士の一撃を頬から唇にかけて、ざっくりと……。

「わしは倒れてな、気を失なったふりをしておった。すると、もう死んだと思うたのかして、何やらガヤガヤと言い合いながら浪士どもは駈け去ってしもうたので……わしは、急に、上野介様御親子のことが心配になり、血みどろになりながら、手さぐりでな、奥の間へ進んで行ったのだが……」

ここでまた新八は浪士二名に見つけられてしまったのだ。

ちょうど、左兵衛の居室に面した小廊下へ出たところで、新八はもう無我夢中で脇差を振い、けだもののように闘ったが、今度は右の肩から背中にかけて斬りつけられ、本当に昏倒してしまった。

この間——邸内にざわめくものは浪士たちの声のみで、刀と刀の打合う音などは殆んど聞えず、むろん侍女たちの逃げまどう悲鳴なども新八の耳には聞えなかったという。

上杉家から付人として吉良邸に派遣されていたものは十二人ほどだが、山吉新八ほど奮闘したものはいないといってよい。

あとは長屋に隠れて蒲団をかぶり震えているやつもいれば、いちはやく邸外へ逃げ出したものも多勢いる。

浪士に殺された吉良方は十五名。そのうちの大半は、茶坊主とか料理人とか門番のようなものだ。むろん自分から刃向っていったわけではあるまい。

負傷者は一番重傷の山吉新八をふくめて約二十人である。

吉良家の家老、左右田孫兵衛と斎藤宮内は長屋の壁を切り破って表へ飛び出し、同じ町内の唐笠屋三右衛門方へ逃げ隠れてしまった。こういうわけで、吉良方の抵抗は、まことに軽微なものであったようだ。

吉良邸は南北七十三間、東西三十四間余――二千五百五十坪という広さだが、それにしても表裏の門を閉めきり、前後四時間近くも浪士たちが働いていて、周囲の町家や屋敷でも、朝になるまでは、ほとんどこの討入り騒ぎに気づかなかったようだから、あまり派手な殺陣ではなかったようである。

それでも邸内には八十余人の家来、小者、女達がいた。このうち戦死が十五名、負傷が二十五人だから、五十人近いものが、逃げるか、息を殺して隠れていたかのどちらかだったということになる。

浪士の討入りを十五日の朝、まっさきに上杉の江戸屋敷へ注進したものは、吉良邸通り向うの豆腐屋であった。吉良邸出入りの者である。その注進の時刻は七刻半（午前五時頃）で、浪士達はまだ吉良邸から引揚げてはいない。

上杉綱憲は実父上野介の凶変におどろき、家臣の出動を命じたが、江戸家老の色部又七郎が、これを制した。

「今朝の変事によって討手を差向ければ、必ず赤穂浪人との争闘はまぬがれがたし。今この太平の御代に、江府に騒動をひき起すことは、御公儀に対し恐れ多し。兇徒は御公儀より不日成敗あること必定でござります……」

「むむ……」

綱憲は苦悶の形相も凄まじく——討たねば孝道すたり、討てば公を乱す。なれど遂に、出勢の士卒を止めたり……と記録にある。

上野介は、映画や芝居では屋外の炭小屋に潜んでいることになっているが、実は大台処（屋内）の片隅にある雑物部屋（物置）に隠れていたのである。

邸内を探しつくして、ようやくここまで来た浪士の大高源吾が、何気なく槍の石突で物置の戸を突き外すと、とたんに中から炭や薪を投げつけてきた。

源吾が合図の呼笛を吹くと、千馬三郎兵衛と茅野和助。つづいて間十次郎が駈けつけて来た。このとき、物置の闇を割って、中から吉良方の侍二人が斬って出た。大須賀治郎右衛門（三十歳）と須藤与一右衛門（五十歳）である。

大須賀を茅野と大高が倒し、須藤は千馬の半弓に射殺された。

叫び声を聞いて、どんどん浪士たちが駈け集まり、物置の周りを、びっしりと囲む。

「怪しいぞ！」

「つづけざまに矢を射込んでみろ」というものがいる。

千馬が再び半弓を引きしぼろうとしたときに、猛然と物置から躍り出した男がいる。これが清水一角の名で後に大衆の人気を得た上野介寵愛の用人、清水一学だ。

映画などでは——白の稽古着に鉢巻。勇ましく両刀を振って浪士達を悩ます美剣士の一角、いや一学だが、年齢は四十歳の中年男だ。一学も浪士たちの乱刃を浴びて殪されてしまった。

とにかく、最後まで上野介を護って離れなかったこの三人は勇者としての賞讃を受ける資格がある。この二人と山吉新八のしたことは、まことに立派なものである。

後に、新八は語る。

「わしも恐ろしかった。とっさに逃げようとも思い浮かんだものだ——その一瞬に、武士の恥ということが稲妻のごとくに頭の中にひらめいたので、わしは腹をすえ、わしの卑怯な心を、ぐっと押さえつけた。それは、ほんの一瞬の差で決まったことで、時と場合によっては、わしも逃げ

出してしまったかも知れぬ……」

どんな英雄豪傑にも胆力の一枚下は人並な弱さが渦を巻いているものではなかろうか——。

出撃する特攻隊員の中にも、堂々と胸を張って無心に戦いの中へ飛び込んでいける日があるかと思えば、歯の根が合わぬほどの恐怖に青ざめつつ出撃する日もあるということを、私は戦時中に、ある海軍航空基地のパイロットに聞いたことがある。

かくて——上野介は雑物部屋から引ずり出され、首をはねられてしまった。

この雑物部屋へ隠れるまでおよそ三時間余りも、上野介は三人の家来とともに暗い広い邸内の彼方此方を、おろおろと、必死になって逃げまわり、浪士たちの包囲を遂に破ることができず、表へ逃げることを断念して、台所の物置部屋へ潜んだ有様が目に浮かぶようだ。おそらく邸内の座敷で、廊下で、浪士たちとすれ違うようにして闇の中を逃げまどっていたのであろう。

翌朝——幕府から栗崎某という外科医が派遣され、吉良方負傷者の手当にあたった。栗崎医師の記録によると、二十余人の負傷者のうちの殆んどは（つまり山吉新八以外は——）命にかかわるような傷ではなかったとある。

とにかく、浪士たちの一方的な勝利であった。出血が激しく一時は死にかけた山吉新八だが幸運にも回復し、翌年二月には、上野介息の左兵衛義周に附添い、信州高島へ出発している。

浪士の討入りは、世上の人気を沸かせ、その評判は高まるばかりで、今度は幕府もあわてて、吉良家を取潰し、左兵衛を信州の配所へ押しこめてしまった。

前には何のとがめもなかった老人が、今度は何もしないのに殺され、その上に家を潰され遺子までが罪を受けたという、幕府の政治の矛盾にも呆れる。

そして幕府は、宝永七年になって、内匠頭弟大学を寄合旗本（五百石）に取立ててやっている。

こういう経緯を見てくると、権力者が行なう政治はいつの時代でも同じだ。

政治は如何なる形態によって行なわれようとも必ず権力がつきまとうし、権力には必ず汚職があり、汚職はまた必ず乱を呼ぶ。

そして権力者というものは絶えず世評を怖れ、いつどんなときにおいても人気者になっていたいものなのだ。

また、それが繰り返され後を断たないから種々な人間の個性やドラマが歴史をいろどることにもなるのだろう。

こうして山吉新八は、あくまでも上杉家付人としての役目を黙々と遂行した。

左兵衛義周が信州の配所で死ぬまで傍に仕え、元禄十七年一月二十日――左兵衛死去を見届けたのち、上杉の領国、米沢へ帰国した。浪士討入りのときより四年後のことである。

赤穂浪士の美名の蔭にあって、こういう人物がいたことは、実に愉快である。

山吉新八は世上の人気などを少しも気にすることなく、まるで悪党の見本のような謗(そし)りを受けて死んだ上野介のためにつくし、逆境に泣く遺子をなぐさめ守りつつ、使命の一切を堂々と果し終えた。

帰国した山吉新八を迎えた上杉家では、さすがに、この人物を放り捨ててはおかなかった。すなわち新八は百五十石三人扶持を賜わり、馬廻りに就任した。新八の子孫のうち、後年になって青森県知事をつとめた人もあったという。

奇人・北斎

痛快な人物というと、豪快な戦国大名や剣豪、軍人、侠客など、さまざまあろうが、私は、何よりも自分自身に対して痛快であった男のことを書いてみよう。

日本の画家で、世界的にその名と作品が大きく評価された人びとの中に、葛飾北斎の名を見逃すことは許されない。今から百年以前に異国へもたらされた北斎の木版画は、十九世紀後半におけるフランス絵画の飛躍的な発展に、深い影響を与え、貢献をしたといわれている。

江戸時代後半期の浮世絵師であり、日本風景版画の創始者とよんでもいい葛飾北斎は、宝暦十年（一七六〇）九月に、江戸本所割下水に生まれた。

北斎の父は、徳川幕府御用の鏡師で、中島伊勢という人であった。

母は――吉良上野介の付人で赤穂浪士討入りの際に斬死をした小林平八郎の孫にあたる人であったという。そのために、北斎は忠臣蔵の絵だけは、ついに一生描かなかったという伝説もあるが、これは間違いだ。

北斎の作品には忠臣蔵関係の絵がのこされているからだ。すなわち『仮名手本後日の文章』

『忠臣蔵役割狂歌』などの挿絵と共に、組物錦絵が数種のこっている。

一説に、北斎は、中島家へ養子に行ったもので、実家は川村某というのだとも言われているが、とにかくハッキリした出生の事実はわからない。

「おれは自分の生まれなぞ、気にもかからねぇ。どこから生まれたのでもいいし、それを知りてえとも思わねぇな……」

と、おそらく北斎は思っていたことだろう。彼は、ひたぶるに、わが画業だけに、すべてを投げこみ、他のものは一切念頭になかった——いや念頭にのぼるように心がけ、闘った。

鉄蔵とよばれた子供の頃から絵を描くことが好きでならなかった北斎は、当時の浮世絵の全盛期に生長しつつ、春信や春章の描いた美人画に魅せられ、十歳の頃には、父親に半紙をねだっては美人画の模写を、しきりにやっていたという。

父も母も鉄蔵が絵師になることを反対し、家業を継がせようとかかった。

これを振切りついに鉄蔵は家を飛び出した。これからは、たった一人で暮しをたててゆかねばならないので、彼はまず木版彫刻師の徒弟となった。これは後年の彼にとって重大な意味をもつ。絵師の描いた原画を彫刻し、これを紙に刷った場合に、原画がどのような効果をともなって紙に再現されるかという細かい技術を、すべて体得するに至ったからだ。

鉄蔵は十八歳の春に、ようやく当時、役者絵の第一人者といわれた勝川春章の内弟子となることが出来、春朗の号をあたえられた。

たちまちに、春朗の画才は頭角をあらわしはじめた。

書店からの注文も増え、画も好評であった。

若い春朗の鼻が高くなったのも、無理はないと思う。金が入るに従い、酒の味も女の味もおぼえた。春朗の得意満面に、師匠の春章は眉をひそめたが、温厚な人柄なので叱ることも余りしない。

「師匠の絵も、芸は細かいが、別だん大したものだとは思われないな。名前が売れているから大家で通っているだけのことだよ。あれくらいのものなら、私にだって描けるものね」

こんなことを、同僚の春栄に洩らすようになってきた。

これを耳にはさんだ兄弟子の春好が激怒した。

「恩になった師匠の悪口を言うなどとは、許しておけねぇ」

春好の怒りの底には、自分をどんどん追い越し、注文も多いおとうと弟子の才能への妬みも潜んでいただけに、もう我慢がならなかった。春好は或る時、春朗が両国の絵草紙店の求めに応じて描いた作品を見て、

「こりゃァ何だ。こんなものを描いて金をとるつもりなのか、てめぇは――笑わしちゃァいけねぇ。てめぇはいい気になっていやがるか知れねぇが、こんなものを金に替えるとは絵師の面よご

しだ、師匠の恥だ。いいかげんにしやがれ」

ピリピリと、その絵草紙屋のものがいる前で絵を引き裂き、春朗の顔へ叩きつけた。

このことが、春朗にとって重大な転機となった。

口惜しかったが、春好の怒りが爆発したのがキッカケとなって、春章一門の人びとが春朗をうとむさまも露骨になってきて、春章の門にも居たたまれなくなり、ついに春朗は飛び出してしまった。破門も同様である。

当時の絵師として羽振りもよかった勝川春章の下を離れた春朗には、書店も絵草紙屋もたちまちに冷めたい態度を見せた。

（おれの画がうまくって売れたのじゃァねえ。今までのおれの画は師匠のおかげで売れていたのだ）

師匠の下を離れて一足飛びに貧乏のどん底へ落ち込んだ春朗は、ここでハッキリとおのれの思いあがりをさとったといえよう。

（こうなれば、おれの絵がうまくなるよりほかに浮かび上る道はねぇのだ。石に噛りついてもうまい絵が描けるようにならなくてはいけねぇ）と、春朗は深く決心をした。

この決心が——金や名声や人気の誘惑を徹底的にはねつけ、ただ一心に、九十余歳の生涯を終るまで絵筆へしがみついて離れなかった後年の葛飾北斎を生むに至ったのである。

それからの北斎の人生は捨身であった。

唐辛子の行商をやったこともある。左官の土こねもやったし、八百屋もした。とにかく町の中へ飛び出し労働に従事しつつ、彼はたくましく勉強をした。そして、たくましく遊んだ。金が入ると絵筆、絵具を買い、残りはすべて女と酒にブチ込み、出来るかぎりうまいものを食った。生涯に二度も結婚しているが、常識的な家庭生活など、彼にはあったものではない。感能のおもむくままに行動し、その行動は、すべて彼の画業につながっているのである。

後年、彼が出版した『北斎漫画』に描かれた、さまざまな人物の姿態、さまざまな職業、さまざまな人生の情景を見よ。

彼が自由奔放に渡って来た人生の一コマ一コマが、すぐれた観察と技術によって物の見事に結晶している。

フランス印象派の巨匠ドガは、北斎の没後八年ほど後に、早くも『北斎漫画』を手に入れ、驚嘆している。

かの有名な『踊り子』や『裸婦』などの一連の作品や、その他のさまざまな環境と生活を背景にした人物を主題とするドガの絵画には、北斎の影響、というよりも、むしろ堂々と北斎に学んだともいうべき痕跡が歴然としている。

とにかく北斎は、日本画の各派をどんよくに研究して我が物にとり入れてしまい、オランダの

風景版画に暗示を受けてからは、風景画に没頭した。

その成果は、もっとも有名な、かの『富嶽三十六景』をもって世に知られている。

しかし、北斎は、晩年になって、たった一人の娘で、これも女流画家であったお栄に向かい、

「おれは百まで生きたいよ。そうすれば、いくらかましな絵描きになれるかも知れねぇな。富士山をもっと描きてぇ。『富嶽三十六景』のことを世間では賞めてくれるが……あれはまだまだ序の口だ。かんじんの富士山よりも、まわりの景色や、人物の組み合せ方で、絵をごまかしてしまっているのが多いのだ。おれは、もっと生きて、ほんとうの富士山を描いてみてぇよ」

と、こういったそうである。

このお栄という娘も、よくしたもので大変な女であった。金が入ると、父親の北斎と二人で、うまいものを食べ、酒を飲んでしまう。北斎は中年以後、酒をピタリと止めたが、お栄は好物であったし、北斎も娘の酒好きを叱ったりはしなかった。

北斎の晩年は、この娘と二人きりの暮しであった。江戸中の裏長屋を渡り歩き、生涯に九十七回も引っ越しをやったという北斎にくっついて歩き、気が向けば寝、気が向けば飲み、食い、父娘二人で紙と絵具に埋れながら、黙々として描いている。

女だが、着るものや化粧などには全く頓着しない。髪の毛はいつも無雑作ないぼじり巻にして、くわえ楊子をしたり、酸漿を噛みながら絵を描く。

「この住処にも、そろそろ飽きたな」

と北斎がいうと、お栄は黙って、さっさと荷造りをする。荷造りといっても別だん世帯道具があるわけではない。鍋や釜と、あとは絵道具ばかりだ。小さい車を北斎がひき、その後をふところ手をして酸漿をキュウキュウ鳴らしながら、お栄が従う。

北斎の名が、絵が、天下に鳴りひびいてからの生活がこれであり、北斎が死ぬまでこの暮しがつづいた。

ともかく父娘二人して、朝から晩まで腕がなまってくるまで描きに描く。腕も疲れ眼も疲れてくると、蕎麦をとって二椀ずつ食べるのが習慣になっていたという。

こういうお栄だが、一度は嫁に行った。南沢等明（みなみざわとうめい）という。これも絵師のところへだ。

――ところが亭主の等明が懸命に絵を描いている傍へ来て、お栄が「フフン」と笑う。

「何がおかしい」

「フフン」

「何だ、いえ」

「それでも絵を描いてるつもりなんですかねぇ」と、お栄は笑うのである。

亭主たるもの、これではおさまらない。憤然として離別を申し渡した。

「そうですか。じゃ左様なら」と、お栄は、さっさと父親のもとへ帰ってきた。お栄を見て、北

斎は悲しげにいったそうだ。

「やっぱり、ダメかい」

「せいせいしたよ、お父ッさん……」

「仕方がねぇなあ。よし、これからはもう嫁に行くな。おれの傍にくっついてろ」

「私も、その方がいい」

その頃には二度目の妻も死んでいたし、ほかの子供たちも或いは死に、或いは他家へ養子に行ってしまっている。奇妙な父娘の、変った生活が始まったわけだ。

北斎の絵はどれほどあるか数えきれない。

人物も美人画も、風景も武者絵も、小説の挿絵から花鳥画——いかなる題材も北斎は消化した。

十一代将軍家斉が、北斎の妙技を聞き、放鷹の途次に浅草伝法院へ寄って、北斎と谷文晁を召し出し、席画を描かせた。文晁はいうまでもなく当代一流の大家である。

文晁が描いたのち、北斎は携え来った籠の中から一羽の鶏を出し、その趾に朱の絵具を塗って紙の上を歩かせたのち、いきなり筆をとって藍色の絵具を刷き、

「立田川紅葉流るるの景」と言上し、将軍をよろこばせたという。

「これより北斎の名、四方に噪しく、画を請う者、踵を接して至り、笈を負い来り学ぶもの日に多し」と、虚心著『北斎伝』にある。

このことが本当にあったことかどうかはともかく、北斎が将軍という権力の前にも全く懼れることなき気魄をもっていたことだけは、わかると思う。

有名になってからは、大名が大金をもって画を買いに来たり、お抱え絵師にしようとしたりしたが、全く、うけつけず、相変らぬ貧乏暮しをつづけていた。

世間は、せっかくの出世を逃したり、金儲けを断わったりして変りものだといって呆れたが、北斎は、お栄にいった。

「そりゃァ、おれだって金もほしいし、出世もしたいと思わねぇことはないよ。けれどもなあ、おれというやつは、金が入り出世をすると、すぐに、いい御機嫌になり、この鼻がどんどん高くなっちゃう奴なんだ。若いときに師匠の門を追われたときの自分の浅ましさが、おれは身にこたえているようだ。おれは金が怖い。出世が怖い。手前の腕が落ちねぇように、おれは、つとめて金や出世を遠ざけているのだ」

画料をもって来ると、

「そこへ入れときな」

こういって、アゴで天井をさす。天井から笊がぶら下がっている。

その笊の中へ画料を放り込んでおけというのだ。むろん、その金高をあらためようともしない。

米屋や魚屋が勘定をとりに来ると、またアゴで笊を示して、

「いいだけ持って行きな」という。

奇人だと一言に片づけてしまえばそれまでだが、北斎にしてみれば、あくまでも自分の心の底に潜む怠惰と慢心とに闘いをいどんでいたのだ。

絶えず簡素な生活と、緊張した精神とを維持し、いつも一介の画学生としての精進を忘れないと決心していたのであろう。

老いた北斎とお栄の生活を『北斎伝』は、次のように記している。

「――みかん箱を少しく高く釘づけになして、中には日蓮の像を安置せり、火鉢の傍には佐倉炭、土産物の椀餅の籠、酢の皮など取り散らし、物置と掃きだめと一様なるが如し……」

あるとき、奥州津軽藩主、津軽越中守が、北斎に屏風を描かせようとして使者を出した。

何度使者が出むいて、大金を見せて頼んでも承知しない。

「おれの画は描きたいときに描きたいものを描くのだから、行きたくないときには行けない」というのである。

ついに使者の侍は、たまりかねて、刀を抜いて北斎を斬ろうとした。居合せたものがようやくなだめて帰したが、それから一年ほどたって、のこのこ津軽邸へ出かけて行き『野馬群遊図』を描いてきた。このときは、いくらすすめられても礼金はとらなかった。

年をとっても、よく旅をした。写生旅行は何よりの楽しみであったが、八十をすぎた頃、北斎は、お栄に、しみじみと洩らした。

「筆の動きが自由にならなくなってきたよ。これでは、とても一人前の絵描きにはなれねぇな。猫一匹も描けやァしねぇ」

こういったとき、北斎の眼からボロボロと涙があふれてきた。

十年前に名古屋へ旅行したときに患らった中風が、これからの北斎を苦しめたようだ。

貧乏生活の苦しみをみずからのぞみ、その苦しさに刺戟を求めて画道に精進したという見方もあるのだろうが、ことさらに北斎を、このようなデカダンスの鋳型に押しこめてしまうことはあるまい。もしそうだとしても、とうてい真似の出来ないことだ。

北斎だって厭ではなかったのだろうが、彼は、徹底的にこれを排除した。排除したことによって、世界的な業績をのこした以上、文句はいえない。

金と名誉を得ることも良いと思うが、北斎にとっては、それを得たときの自分が不安であり、怖かったのであろう。それを得てもなお悠然と立派な画を描きつづけて行けるかどうかに自信が持てなかったのであろう。

「金と出世をしたら、おれという人間はダメになるに決まっている」

と、お栄にもらした北斎の一面には非常に小心なところがある。

あの将軍や大名に対して少しも屈しなかった気骨の底には、絶えず自分の仕事に対する不安と

反省が渦巻いていたのだ。

こうした強さ弱さを合せ持ちながら、あれだけ自分の人生に向かって行く態度を崩さなかった北斎を、私は痛快だというのである。

真似てみたいと思うが、とても出来ない。

健康であった北斎も嘉永二年四月十八日に大往生をとげた。

浅草聖天町遍照院境内の仮寓に、娘お栄にみとられて、彼は死んだ。

医者が薬を出すと、

「おれは老病だから薬石の効はないよ」と言い、お栄には、

「あと十年生きたいよ。ほんとに今死ぬのはいやだ。あと十年やれば、もう少しましな絵描きになれるのになあ」

何度も何度も、こういった。

いよいよ息を引き取るときにも、

「あと十年、あと十年……」とつぶやき、更に、

「五年……五年でもいい。五年あれア、何とか一人前になれるのになあ」

死にのぞんで、たった一人の娘に訴えた言葉だ。ハッタリもなければ嘘もあるまい。

このおそるべき、自分の仕事への執念の凄まじさに圧倒される。

死ぬ三日ほど前に、北斎は、お栄の顔をまじまじと見て、

「お前、おれが死んだら、どうする？」と訊いた。

「さア、わからないな。凧の絵でも描いて食べて行くから心配しないでよござんすよ」

お栄がこう答えると、北斎は微笑して、

「お前も絵が描けるので、何とかやって行けるだろう」といい、辞世の句を示した。

「悲と魂で行く気さんじや夏の原」というのがそれだ。

オランダ人が百五十両も投じて故国へ持ち帰ったこともある北斎の絵は、異国の人びとの眼を瞠らせた。

北斎の木版画は、外国人の手によってヨーロッパへ運ばれた。

ドガばかりでなく、セザンヌやゴッホも『ホクサイ』の絵を愛し、北斎の絵から学んだ。

北斎の死後——娘お栄は飄然と家を出た。

以来、彼女が何処にどうして暮し、いつ死んだか、それも不明のようである。

彼女もまた痛快な女というべきか……。

若き獅子

武士の〔脱藩〕というのは、主家を捨てて出奔し、浪人となることだが、むろん重罪となる。たとえ一夜でも、主家のゆるしを得ずして我家を明ければ脱藩者と見なされるし、まかり間違えば、たちまち切腹であった。

封建時代において、大量の脱藩者が各藩に続出したのは何といっても幕末のころである。これは、三百年近くも威光を誇った徳川政権が崩壊し、勤王革命の名のもとに近代日本が第一歩を踏み出そうというすさまじい時代と、また一つには、将軍をはじめ大名たち……すなわち〔主家〕の権威が急激におとろえはじめたことによって生まれた現象であり、一種の流行でさえあった。

二百何十年もの〔鎖国〕が、諸外国の東洋進出によって破られ、米英をはじめとする外国勢力の威嚇的干渉によって、将軍をはじめ大小の〔主家〕は混乱と狼狽の極に達した。

いまのベトナム戦争どころではない。ベトナムとは違い、当時の日本は、すでに都市の密集した文化国家であり、国民は、人種的に統一されている。危機感は、それだけに大きかった。

この国難を切りぬけ、明治維新の成功の主力となったのは、いわゆる薩摩・長州・土州・肥後

の各藩だということになっているが、むろん、そんな大ざっぱな表現ではすまされない。

第二次大戦後の敗者・日本の、おどろくべき復活がそうであるように、幕末の国難を諸外国の驚嘆の視線をあびつつ乗りこえられたのは、やはり名も知れぬ一人一人の国民たちの、ふしぎといえばふしぎな国民性によるものだといわねばなるまい。このことをいい出せば、長くなりすぎるので、もうやめる。

さて……。

ふしぎといえば、長州藩に桂小五郎と並び称される高杉晋作の〔脱藩〕も、ふしぎなもので、彼は脱藩しては、のこのこと主家へ戻って行き、そのたびに罪を受け、そしてまた、たちまちにゆるされ、主家の信頼のもとにはたらきはじめる。

いかに幕末といえども、多くの脱藩者が主家に捕えられて斬られたり重罪に処せられたりした中で、晋作の場合は異例であり、また彼ほど〔主家〕が、たのみに思っていた〔勤王志士〕は、あまりあるまい。

彼の才能が、いかに卓抜したものであったかが知れよう。

高杉晋作は、天保十年に、長州・萩の城下の菊屋横丁で生まれた。現代から約百二十余年前のころである。

萩は、毛利家三十六万石の城下で、晋作の父・小忠太は斉広・敬親の二代の藩主につかえており、禄高は二百石というから、まずまず上流に属する家柄であるし、高杉家は藩祖以来の家臣で

もある。

晋作が生まれたとき、

「この子は、育つまい」

と、父親はいった。

難産でもあったが、いかにもひ弱そうな赤子であった。そのくせ泣声はすばらしく大きい。まだ祖母も生きていたし、高杉家にとっては一人きりの男子でもあったし、まるで、なめるように可愛いがられて育った。しかし、少年に達しても、依然、体軀はまずしい。

後年に「乗った人より馬のほうが、まるい顔をしている」と、いわれたほどの長い顔のくせに、頭は大きく、晋作は、よく、

「頭が重うてかなわん」

と、いったそうである。

しかも、女のような撫で肩だし、事実、よく病気もしたし、疱瘡をやったときにも死にかけたものだ。

だが、こういう体質でいて、学問は藩校〔明倫館〕の鬼才といわれるようになったし、しばらくすると剣術が好きになり、好きになったかと思うと、このほうでも群を抜いた。

十一歳の正月に、こんな話がある。

晋作が座敷の前で凧をあげていると、年始の客が来、あやまって凧を踏みつけ、破ってしまっ

た。

晋作は、この中年の藩士の前に立ちはだかり、いきなり、

「両手を突いて、あやまれ」

と、怒鳴った。

「凧なら、買ってつかわそう」

「いやだ。あやまれ」

いくら子供でも、態度がすごい。両手を細い腰にあてがい、傲然（ごうぜん）として、こちらをにらみつけている。さすがに、その藩士も、ムッとなり、

「勝手にせい」

行こうとすると、晋作は泥をつかみ、前へまわって、これを投げつけようとするのだ。

「待て。この羽織は、殿さまから拝領の品だぞ。見よ、御定紋がついとる。これを泥でよごしたなら、お前が、おとがめをうける」

叱りつけると、晋作は、せせら笑い、

「ふん。おればかりではない。そっちもおとがめをうける」

と、いった。これは当然である。それだけ藩士にも油断があったわけだから〔落度〕となるのだ。

「むう……」

藩士、つまった。
「あやまれ」
「むう……」
「早くあやまらんと、泥を投げるゾ」
仕方がなく、ついに大の男が十一の少年の前で土下座をやってしまったという。
これほどの激烈な性格を持っていて、そのくせ家柄も育ちもよく、文武の才能にめぐまれているという異常児の血は、おだやかな父母から受けついだものではない。
彼を必要とした〔時代〕が、彼を生んだとでもいうより仕方がないほど、この幕末から維新にかけて、ふしぎなほど諸方に適材適所の人物が生まれている。
西郷もそうだし大久保も然り。桂、坂本、と切りがない。暗殺が流行した時期には暗殺の名人も出て来る始末であった。
ともかく……。
こういう高杉晋作だから、常道の学問や教育に甘んじていられるわけがなかった。
明倫館では、先生たちの講義を居ねむりしながらきいていて、遊び半分に〔秀才〕の名をほしいままにしていたのだ。
彼が、彼にとって心から敬服出来た師を見出すまでは、その奔放無比な言動は藩中の〔もてあまし者〕となり、父母も、これには、いたく心をいためた。

やがて、晋作は吉田松陰という師にめぐり合う。

松陰は同じ長州藩の下級藩士（二十六石）の家に生まれ、貧苦の中に育ったが、五歳のとき、叔父・吉田大助の養子となり、六歳で叔父の家督をついだ。吉田家は、代々、兵学師範として、五十七石余をうけてきている。

松陰は、十歳になると、早くも明倫館へ出て来て、藩の子弟に教授をはじめたというから、いかに、その素質と努力が非常なものであったか知れよう。

のちに、吉田松陰は、ゆるしを得て萩を去り、九州、江戸をはじめ諸方を歴遊して見聞をひろめた。このころの松陰が、もっとも影響をうけた人物は、松代藩士・佐久間象山で、象山のスケールの大きい目でとらえられた強大な外国文明のおそるべき実状をつたえられるに及び、

「一日も、うかうかとすごすわけには行かぬ」

決意するところがあった。

ペリーのひきいるアメリカ艦隊の来航によって、

「国をひらいて外国を受けいれるか。または外国を追い払うか……」

いわゆる開国と攘夷のどちらかをえらばなくてはならなくなった幕府当局の、うろたえぶりを見た松陰は、一夜、象山の助力を得て、海外密航をはかり、捕えられて、長州へ送り返され、投獄された。

松陰が、例の〔松下村塾〕をひらき、藩の子弟たちの教育に熱中しはじめたのは、この後であ

るといえば、松陰もまた一種の〔脱藩者〕であるわけだ。

高杉晋作が、一日、松陰の講義をきいて驚嘆し、その門下生となったのは安政四年（一八五七）である。ときに晋作は十九歳。

以来、松陰と晋作の師弟は切っても切れぬ間柄となる。

おそらく、松陰との邂逅がなかったなら、後年の晋作は生まれなかったろう。脱藩者の吉田松陰が、のちの晋作の〔脱藩〕をよぶことになる。そしてまた松陰が、うまくアメリカへでも渡ってしまっていたら〔松下村塾〕も出来なかったろうし、この、ささやかな塾の教育によってあたためられ、やがて激しく排出された勤王革命のエネルギーも育つことはなかったろうと思われる。

高杉晋作が吉田松陰の門下となった安政四年から、勤王運動は全国に燃え上った。

三年前からこの年にかけて、幕府は、ついにアメリカやフランスとの和親条約に踏み切り、同時に京都朝廷を中心にした攘夷運動は激化した。

吉田松陰は、こういっている。

「……いずれは国をひらき、外国文明の実体にふれ、わが国の富国強兵の大策をたてねばならぬ……」

しかし、

「いま、それをすることは危険である。外国列強は力のないわが国を思うままにあやつり、ついに我国は彼らの駁するところとなってしまうであろう」

つまり、日本の国威が確立してから外国との交渉を行なうべきで、いま、幕府が彼らの威圧の前に弱腰のまま種々の条件をうけいれてしまっては大変なことになる、というのだ。

すでに清国（中国）ではアヘン戦争その他の動乱を契機として、イギリスをはじめ諸外国の侵略がほしいままに行なわれていたが、松陰にいわせると、

「日本が断固とした態度をしめせば、いまのところは、まだ海をこえて我国に戦争を仕かけるだけの余力は外国にない」

と、いうことであった。

ただし「今のところは……」である。日本の富国強兵は急ぎに急がねばならぬ。そのためには、徳川幕府のような……いまや政治力の分散した日和見的な政権に日本をまかせておくことは出来ぬ。

天皇を中心に、指導階級たる諸国大名が結集して新しい政体を生み出さねばならぬ。

この稿で、松下村塾における松陰の教育について、ふれているひまはない。

ともかく、こうした松陰の思想は、彼が教えるあらゆる書物の講義の中に脈を打ち、それはすべて〔実践〕の一事に結集されて、門人たちの心身に叩きこまれて行った。

晋作をはじめとして、久坂玄瑞、尾寺新之丞、増野徳民などの入門があり、塾は活気にみちあふれた。

晋作二十歳の安政五年――。

文学修行という名目で、藩から江戸遊学がゆるされた。

江戸で、晋作は大橋訥庵の塾へ出入りをしたり、昌平黌へ入ったりしたが、

「つまらん」

学問よりも、江戸藩邸で桂小五郎や久坂玄瑞、それに伊藤俊輔（博文）や山県小輔（有朋）などの青年たちと天下の形勢を論じることが多くなった。

だが、晋作は、どちらかといえば仲間外れのかたちであったらしい。

一同が議論に熱中する部屋の一隅で、むっつりと厭な顔つきをしながら鼻毛ばかりぬいていたという。

この年の四月に、あの井伊直弼が大老に就任して以来、幕閣は、にわかに強力化した。

井伊は、先ず対抗勢力の水戸斉昭一派を粉砕し、幕府の日米通商条約と、将軍家定の死による継嗣に、紀州家から家茂を迎え、水戸派が擁した一橋慶喜をしりぞけた。

井伊大老の、断固たる幕政統一によって、この危機を強引に乗り切ろうとする態度は、水戸派の憤激をよび、

「夷狄を追い払え」

「井伊を倒せ」

の叫びとなり、京都朝廷を擁して倒幕の旗をあげようという勤王志士たちの活動は、まさに猛然たるものに変ってきた。

井伊大老が、彼らを弾圧したのが、あの〔安政の大獄〕であった。

いわゆる〔勤王志士〕として第一陣に起ち上った英才たちは、この弾圧によって捕えられ、殪れた。

そして、この中に吉田松陰も入っていたのである。晋作も、はじめは、

「まさか……」

と思ったが、事実であった。思いあたることもある。それは松陰の倒幕計画で、

「薩摩藩の志士たちとはかり、江戸では井伊大老ほか幕閣の重臣たちを討ち、さらに京都で兵をあげよう」と、いうのだ。

松陰は、これを藩の重臣・周布政之助にはかり武器・弾薬の貸与を申し出たものである。むろん、周布はこれをゆるさなかった。

松陰の叫びは、江戸にいる高杉晋作たちにもとどいた。

「薩摩藩の一部のものがさわぎ出したからといって、たよりになるものではない。いまは幕府の威勢の強化を見て、諸藩も傍観の態度を見せているではないか。あまりにも先生は無謀すぎる」

桂小五郎たちともはかり、すぐに松陰のもとへ、

「このたびは、とどまってもらいたい」
と、手紙をやった。
松陰は、一読し、
「高杉たちは、ぬれ手で粟をつかむつもりか」
きめつけたという。
むろん、松陰は、この計画の決行だけで政権が一変するとは考えていない。ただ身を捨て決行する一事が〈呼び水〉となって天下をうごかすことを期待していた。
こういうわけで、幕府の弾圧は吉田松陰を逃がしはしなかった。
松陰は、安政六年七月に江戸へ護送され、十月に、頼三樹三郎、橋本左内と共に処刑された。
晋作の悲嘆は非常なものであったらしい。ことに、藩から帰国命令が下り、彼は、江戸の牢獄につながれている師と別れて帰国。そして彼が長州へつく間に、松陰は刑死してしまった。
獄中の師に対する晋作の奔命ぶりは非常なもので、差入れ、面会その他にはたらき、倦むことを知らなかった。それだけに、
「あのとき、おれは脱藩をしても江戸に残り、先生の死を見とどけるべきだった」
後年、酒に酔うと伊藤や山県に洩らしたという。

この調子で書いて行っては、とても限られた枚数にはめこめない。ざっと、その後の晋作についてのべておこう。

井伊大老が、ついに水戸浪士によって暗殺された万延元年（一八六〇）、晋作は、井上平右衛門のむすめ方と結婚をした。数え年でいうと新郎二十二歳、新婦十五歳である。

方女は貞淑な、かしこい女性で、子は生まれなかったが、夫婦仲はわるくなかった。

高杉晋作の活躍が始まるのは、このころからであって、藩庁も彼の才能をたのみ、明倫館舎長に任ぜられたのを皮切りに、同館教授、さらに殿さまの命をうけて世子・定広の小姓役となり、さらに〔番手〕として江戸勤務。二十四歳の春には藩主から海外視察の許可を得て、上海へわたり約二ヵ月を滞在し、外国勢力の圧迫にあえぐ清国の実状を見た。

「ぐずぐずしてはおられん」

と、彼の行動が積極的になったのは、これからである。

井伊の死によって、幕政は、再び混乱しはじめた。文久三年には将軍家茂が朝廷の機嫌うかがいに京都へやって来るという形勢になってしまったのである。

長州藩を主力とする勤王勢力は、京都に結集して活発にうごきはじめた。

晋作も京へよばれ〔学習院御用掛〕という役目に任ぜられた。いうまでもなく、これは朝廷と藩との交流に彼を必要としたからの任命であったろうが、

「ばかばかしい」

あっさりと、彼は辞退してしまった。辞退して、京都藩邸へも帰らず、酒と女におぼれこんだ。これ、一種の脱藩行為であったが、とがめるものは一人もいなかった。

いま、長州藩は〔禁裡守護〕の役目にもつき、皇居の警衛も支配している。まさに勤王運動の主力として長藩の士は肩で風を切って京の町を歩いていたのだ。

長州の対抗馬は薩摩藩で、これも新時代に乗り遅れまいとして、朝廷と幕府の間に立ち、さまざまな政策を打ち出してはイニシヤチブをとろうとするのだが、とても長州の勢力にはおよばぬ。

幕府も所司代や守護職、または新選組などという浪士隊を京へ送り込んで来て、長州の倒幕運動を阻止しようとする。

暗殺、謀略の渦巻く京の町で、

「つまらぬ」

と、晋作がいうのは、このことなのだ。

日本人同士が体面も見得も捨てて、この小さな島国を世界の風波の中へ押し出して行かねばならぬというときに、陰謀と暗殺をくり返して勢力の伸張をはかろうなどという革命前夜の、無駄な、子供じみた自分の藩のうごきが、

「つまらぬ」

のである。

こんな話がある。

京へ来た将軍が、勤王勢力の圧迫によって、賀茂神社へ〔攘夷祈願〕の行幸をする天皇に供奉をしたときのことだ。

これは、いま、外国と和親条約をむすんでいる徳川政権が勤王派のいう通りになって条約を破り、外国を追い払うことに同意した、ということに表向きはなるわけだが……。

このときの将軍家茂を見て、行列が通る沿道にいた高杉晋作が、

「征夷大将軍！」

絶叫したという。ひやかしたのではない。感激したのだ。

「少くとも、あの一瞬、天皇と将軍が行を共にして祈願されたという事実に、おれは感動したのだ」

と、のちに彼は語っている。

晋作の頭には、天皇も将軍も、長州も薩摩もなかった。

いま、日本を一丸として、これを引張って行く大きな力のみが欲しかったのである。

しかも、孝明天皇は、

「幕府も、いまは朝廷に対し何事にも腰をひくめておる。力を合せて国難を乗り切ろう」

と、もらされているし、京における幕府勢力を粉砕するためには放火も殺人もいとわぬという勤王志士たちのうごきには激怒しておられる。

それだけに、高杉晋作は苦悩せざるを得ない。長州藩の勤王運動だって、何も殿さまが命じているのではない。勤王派の政権が藩を牛耳っているだけのことなのだ。どこの藩でもそうだが、いまや、殿さま一人では自藩をおさめ切れないのだ。

晋作の、放蕩が激しくなったのも、この時期である。

高杉晋作が、一回目の〔脱藩〕をしたのは、文久四年（一八六四）一月のことだ。

これより先、長州藩は京都から追い払われている。

天皇が幕府や親幕諸藩とむすばれ、勤王派の過激な運動を排除された、といってもよい。

薩摩・会津の両藩は、この先頭に立った。武力を背景にした〔政変〕に長州はやぶれた。

しかも、攘夷の先がけとして、長藩は下関海峡を航行する米・仏・蘭の外国商船を砲撃しており、やがてアメリカ軍艦・ワイオミング号ほかフランスの二艦の報復をうけ、長藩の軍艦三隻は、たちまち沈没し、下関砲台は、さんざんに破壊された。

晋作が急遽、京から呼び戻されたのは、このときである。

彼が〔奇兵隊〕を編成したのも、このときで、身分の上下を問わず、自藩の侍から他国の脱藩者、さらに農民町民までをあつめてつくりあげたこの〔軍隊〕は、のちに、長州藩の強力きわまる戦力となったのだ。

さて……。

年が明けると、長州へ敗退した〔勤王運動〕は、京都奪回を目ざして燃え上って来る。

三条実美など七名の勤王派の公卿も京から追い払われ、これを迎えた長州藩では、奇兵・遊撃の二隊をもって戦力の基盤とし、一時も早く京都へ進発しようという気運が濃厚となった。

いうまでもなく殿さまは反対だし、周布政之助、桂小五郎などという長藩の指導者たちも、その〔不利〕をとなえて過激派を抑えようとするが抑えきれそうもない。

いまの京都では、幕府と手をむすんだ薩摩という大藩が立ちはだかっている。ろくな軍備もなしに進発したところで、痛手を重ねるばかりであった。

晋作が殿さまの命をうけて、三田尻に集結する部隊の進発をとどめようと山口を出たのは一月二十四日である。

進発隊長は、来島又兵衛という豪傑で、これが遊撃隊をひきいて京へ馳せのぼろうとしている。

晋作は約五時間に及んで熱弁をふるい、説得にかかったが、このときは駄目であった。

来島は、断然、承知をしない。

「承知をしなければ、山口へ帰れ」

というのが殿さまの命である。

だが、

「このまま、おめおめと帰れるものか」

落胆のあまり、晋作は、そのまま大坂へ走った。すなわち脱藩である。

「そもそも、高杉のすることは、以前から藩を、君公をないがしろにする言動が多い。捕えて死罪にせよ」

という声も起って来た。

一ヵ月後、晋作は京において藩主の使者を迎え、帰国し、そのまま投獄された。

この牢獄の中で、彼は黙々として読書につとめている。

この間に……。

ついに、長州軍は京都へ進発した。

進発反対の周布政之助などは過激派によって失脚させられた。京都における長州軍は、皇居を守る薩摩はじめ親幕派の諸藩兵と戦って敗退した。

〔蛤御門の変〕である。

吉田松陰が、晋作と共に、もっともその将来をたのしんでいた久坂玄瑞も、このとき戦死をした。来島又兵衛も殪れた。

またまた長州は敗退したばかりか〔朝敵〕の汚名までかぶってしまった。

幕府は〔長州討伐〕の令を下した。同時に、あの下関砲撃の始末をつけるため、英・米・仏・蘭の四国連合艦隊が長州へ迫った。

さんざんな羽目になったものだ。

「高杉を牢から出せ」

またも殿さまの命が下った。

晋作を藩の正使として、諸外国との和議をおこなわせようというのだ。これは、何とかやってのけた。

そして、また脱藩をしている。今度は九州へ逃げた。

幕府に対して弱腰になった藩庁に愛想をつかしたのである。そして今度は、この年の十二月に引返して来るや、奇兵・遊撃隊をひきいて下関を占領した。

へっぴり腰の藩を建て直そうというのだ。

完全な反乱軍なのである。

しかし、もう高杉は桂小五郎と共に、長州藩になくてはならぬ存在であり、翌慶応元年九月には〔海軍興隆用掛〕を命ぜられ、同二年になると〔海軍総督〕となった。

長州へ攻めて来た幕軍は、晋作の指揮する長州兵によって、さんざんに打ち破られた。

このころになると、高杉晋作は、土佐の坂本竜馬とも通じ、長州を討伐しようという幕府に対し、あくまでも戦う決意をかためている。

そして、そのころから、薩摩と長州は歩み寄りはじめたのだ。坂本竜馬の周旋によって、両藩は握手し、薩摩は幕府からの長州出兵命令を拒否した。

高杉晋作の病患が、急激にすすみはじめたのは、この年の秋ごろからだ。
そして、翌慶応三年四月十四日。晋作は、下関で死んだ。
病気は肺結核だ。
牢獄を出てから、まる三年は、文字通り東奔西走して、彼の生涯が、この三年間に凝結したかのように思われるほどにはたらきつづけた。
長州藩は維新において、もっとも多くの人材を失っている。
これは、長州が勤王革命の先鋒として悪戦苦闘を強いられた結果にほかならない。
晋作の女性関係も派手なものだが、もっとも有名なのは大坂屋の芸者・おうのであろう。
おうのは、容色にすぐれてもいないし、無智だが、底ぬけに気の善い女であったという。
肌の白い、むっちりとした肉づきの、この女を、晋作は身辺からはなさなかった。
桂小五郎が、
「あの女は、君に似つかわしい女ではない」
と、いったことがある。
すると晋作は、にやりとして、
「桂さん。食べても見ぬくせに、めったなことをいうものじゃァない」
大笑いしたそうである。
高杉の下関における遊びぶりは大変なもので、奇兵隊長として飛ぶ鳥を落す勢い、があったと

いう。

いつも義経袴に、ぶっさき羽織をつけ、絵日傘をかざして芸妓をしたがえ、下関の町を濶歩した。

重病となってからも、

「稲荷新地へ行こう」

と、いい出してきかない。稲荷新地は色町である。

無理に駕籠を呼ばせ、これへ乗せてもらったとたんに、

「あ……いかん」

晋作は、しんそこから情なさそうな顔つきになった。うごいたとたんに脱糞してしまったのだ。

「こうなっては、もう駄目だなあ」

ついに、あきらめたようである。

死を前にして、つきそっていた田中顕介に、

「もう、きまったようなものだ」

と、いう。

幕府が倒れて、新しい時代が日本に来ることが、きまった、というのである。

「その後は、どうなります？」

田中がきくと、晋作は、
「後のことまで知るものか」
と、こたえたが、彼の胸中には、さまざまな国づくりの計画がひそめられていたに違いない。
死の当日に、勤王尼僧として知られた野村望東尼（ぼうとうに）が見舞に来ると、晋作は、この心をゆるした異性の友へ、

おもしろきこともなき世をおもしろく

と書いて見せた。望東尼が、それにつづけて、

住みなすものは心なりけり

書いて返すと、これを見て、
「おもしろいなあ」
と、つぶやき、晋作は目をとじた。
それきり、彼の目は、もうひらかなかった。
晋作ときに二十九歳。満年齢で二十七歳余であった。

彼は、早熟であった。才能は少年時にすばらしく開花し、二十歳をすぎて老成し、だからこそ、死の前の三ヵ年の奮闘は、ことごとく的を射たのである。

晋作が死んだこの年の十一月に坂本竜馬が暗殺され、一ヵ月後には王政復古の大号令が発せられた。

悲運の英雄

(一)

慶応三年（一八六七）十月末。

京都に在る徳川十五代将軍・慶喜が、政権を朝廷へ返上し、将軍職を辞したという知らせが江戸へとどいた。

このとき、越後・長岡七万四千石・牧野駿河守の江戸藩邸にいた牧野家の郡奉行（兼）町奉行をつとめる河井継之助が、こういった。

「このたびのことは、いささか権道に出ずるものである」

権道とは……。

物事をおこなうに、あまり正しい手段とはいえぬが、最終の目的を正しい道へもってゆくための方便……とでもいったらよいか、そうした意味のことばである。

さらに、継之助は、

「こうなれば公（朝廷）武（徳川幕府）のいずれにも片よらず、人の道の義理に徹し、もってわが藩の無事をはからねばなりますまい」

と、江戸藩邸における重臣会議の席上で洩らした。

筆頭家老で、殿さまの牧野忠恭の一族でもある牧野図書が、

「その手段は？」

問うや、

「それは公と武の間を斡旋いたし、戦争をふせぐことのために、わが藩がはたらくことでありましょう」

継之助は、ためらうことなくこたえている。

「うむ」

牧野図書は、自分がかねてから継之助を引き立ててきているだけに、この若い重役の英発さに多大の信頼をよせている。

先代の殿さまで、いまは隠居している忠恭も、若い現藩主の牧野忠訓も、

「いまや天下の大勢は一変せんとしております。このときにあたり、手をこまぬいて大勢を傍観しておりますことは、まことに徳川家へ対し、永年の義理を欠くのみか、ひいては王臣としての道にもそむくことに相なりましょう。すみやかにいま、御上洛あそばされて公武の間を御斡旋な

さるべきかと存じます」

と進言する継之助に、

「いかにも」

と、うなずく。

だが、安田錦蔵・鵜殿団次郎などの上層の家臣が、

「すでに、長州・薩摩両藩を主軸とする勤王方は朝廷を意のごとくうごかし、とてもわれらの口をさしはさむ余地はあるまい。うかつにうごいては後に悔をのこすことにもなろうから……」

反対をした。

二派にわかれて、藩論はなかなかに定まらなかったが、ついに河井継之助の強引な主張が反対派を押しきり、約一ヵ月後の十一月下旬となって、牧野忠訓は、継之助ら六十余人をしたがえ、江戸藩邸を発して、先ず大坂へ向ったが……。

この一ヵ月の遅れを、のちに継之助はかえりみて、

「あのときのわが藩の出足の遅れは、悔んでも悔みたりぬ。大政奉還ときいた直後に、思いきって殿を上洛させることができたなら、おれには、いくらも仕様があったものを……」

と、妻女のすが子にもらしたという。

あながち、彼の広言ともいわれない。

それだけの智謀を、河井継之助は、充分すぎるほどにそなえていた男といえよう。

〔明治維新〕の舞台において、彼が長岡藩の家臣……しかも藩主の信頼もあつい重臣であったことは、この英才を以後の一年間に悲運の底へしずめることになる。

長岡藩・牧野家は、徳川家康以来の譜代大名であった。

代々の藩主が、たびたび幕府老中をつとめた家柄であるし、河井継之助のことばを待つまでもなく、徳川将軍家とは切っても切れぬ間柄である。

維新革命の推移については、ここにあらためてのべるまでもあるまい。

勤王派勢力の集結によって、最後のどたん場へ追いつめられた徳川政権が、将軍みずから、

「政権を皇室へ返上したい」

と申し出て、これを受け容れられたのであるから、二百数十年にわたる徳川の天下のもとに永い年月をけみしてきた諸大名の……ことに牧野家のような譜代大名の去就のむずかしさは、いうべくもない。

徳川慶喜は、このときまだ、京都・二条城にあったけれども、朝廷は、慶喜をのぞく実力派大名たちをあつめて〔新時代〕へのぞむ体制をととのえはじめてい、つぎつぎ手をうち、前将軍が世に存在することをゆるさぬというきびしさとなり、

「将軍位のみか、内大臣の位も返上せよ。また徳川家の領地もすべて朝廷へ返上すべし」

と、いうことになった。

これでは、徳川家に属する者たちが、食べはぐれることになる。

こういうわけで、徳川の臣をはじめ親幕大名たちの怒りが、いまや頂点に達しつつあった。ついに慶喜は、不測の変事が京都においてひき起されることをおそれ、突如、二条城を出て大坂城へ引きうつった。

このように最悪の状態になっていたけれども、河井継之助は、

「やれるだけは……」

気力をふるいおこし、藩主と共に大坂から京都へ入った。

これが十二月十九日で、二十二日には早くも彼は、藩主名代として朝廷の議定所へ出頭している。

継之助はこのとき、朝臣の長谷三位、辻少納言を説き、牧野駿河守の代人として、次のような建言書を朝廷へ奉呈している。

この建言書というものは、堂々と徳川家の立場を釈明し、幕府創成以来三百年にわたる天下平治の実績をのべ、

「……なれども嘉永以来、外国渡来、和戦の両儀より公武の御間柄にあらそいがおこり、姦雄その虚に乗じ、たくみに尊王の名を借り、浮浪の激徒どもは物事をふかく考えようともせずに狂暴のふるまいをもって乱を起し……」

と、維新革命の〔なりたち〕をきめつけ、朝廷と〔政権〕との関係を説き、これからも徳川氏を中心にして天下をおさめることが、もっとも平穏な処置であるとのべている。

なにしろ前将軍が京都に居たたまれず、大坂へ移るほど、京都は薩長を主力とした革命派の手中につかまれていたところへ、これだけの建言をしたのであるから、河井のみか牧野忠訓の決意もなみなみのものではなかったろう。

革命派の薩長……ことに長州側では、この建言書を見て、

「慶喜の一命は助けることが万一あっても、牧野忠訓と河井継之助の首を討たずにはおかぬ」

激怒ただならぬものがあったといわれる。

(二)

ここで、河井継之助についてのべておかねばなるまい。

継之助は、長岡藩・中堅藩士の家柄（百二十石）に生まれた。

父は河井代右衛門秋紀。

母は貞子といい、温厚な父とは対照的に厳格な気性の女で、継之助の妹・安子は、

「……兄は、もう幼ないころから、なかなかの腕白者で、親どもの申すことさえもきかぬほどで、遊びに出ても始終、負けぬ気で大きい者たちを相手に喧嘩をいたしまして、頭から着物から血だらけにして帰宅いたすこともめずらしくございませんでした。私などが、兄さまの頭に血が……などと、びっくりいたして申しましても、兄はどこ吹く風といったような顔つきでおるので

ございます。ともかく、兄の強情我慢というものは大変なもので……そのくせ、読書を好むことは非常なもので……兄は、毎々書物を汚すようでは一人前の男になれぬと申しておりましたが、他人から借用した書物を写し取るときなどは玉蔵院（藩の祈禱寺）へこもっていたしました」

と、のべているが、三十をこえるまでの継之助について、藩中の評判は、

「格別のことは無かったが、しかし、ずいぶんと強情な人物、するどい男という……」

ものであったと、三浦治部平がいいのこしている。この三浦は馬術師南役であって、少年の継之助に馬術の作法を教えかけると、継之助は、

「馬へ乗るに作法などは要り申さぬ。馬術は駆くることと止むことを知れば事足りるものでござる」

と、いい張り、いかに三浦が説得しようとしても頑としてきかぬ。

「……言動このごとくなれば、仕末におえぬ男なりと厄介視するに至れり」

と、物の本に記してある。

河井家は禄高の割合にくらべて、多少の財産もあり、継之助は二十六歳のとき、江戸に遊学している。

古賀茶渓の〔久敬舎〕へ入ったのだ。

茶渓は幕府の儒官であり、蕃書（外国の書物・文書）調書方の頭取をつとめていい、

「今日の兵備は火器のほかには何物もないし、今日の理財は貿易のほかには何物もない。四方を

海にかこまれたわが国は船を捨てては一歩もうごくことがならぬ。その理屈は小児の頭脳にもわかることなのに、学者たるものがこれを解せぬとは何事であるか。火器と貿易と船舶とは、まさに今日の急務である」

というのが持論である。

ペリー提督がアメリカ艦隊をひきい、日本へ開港をせまって、維新革命の前哨ともいうべき動乱期がはじまる前に、これだけのことをいったのであるから、古賀茶渓は只の学者ではない。

この〔久敬舎〕の書庫で、河井継之助は『李忠定公集』十二巻を手にするや、ほとんど寝食を忘れて読みふけったという。

李忠定公は中国・宋朝の武将であり政治家であって、金人侵入のときに、和護が国事をあやまることを強調し、主戦論を主張した一代の偉人である。

継之助は、李忠定公の経綸にふれて、

（これだ！）

と、胸にさけんだ。

例によって十二巻ことごとくを筆写したが、この書物が継之助の一生にあたえた影響は非常なものがあったといわれている。

筆写が終ると、継之助は、いったん長岡へ帰った。

すでに彼は、すが子という妻を得ているが子はない。

翌嘉永六年。
ペリーが四隻のアメリカ軍艦をひきいて相州・浦賀へ来航をした。
これより、開国か攘夷かの相剋によって、ゆるみかけていた幕府政治の土台が一度にゆらぎはじめる。
継之助は、まだ家をついでいなかったけれども、父からもらった所有地を二百両で売りはらい、これをもって人を浦賀へさしむけ、米艦入港の浦賀の様子を視察せしめたりしている。
この年。
「わが藩も、無能な重臣どもに政治をまかせておいては、いまにぬきさしならぬ悔いをのこすことになる」
と放言し、継之助は藩主に献言書をさし出したりしている。
ときの藩主は牧野忠雅であったが、
「ではひとつ、継之助にやらせてみようではないか」
意外なことに、評定方（兼）目付役の格をあたえて、継之助に新知三十石を給した。
かくて、二十七歳の彼は、はじめて藩政に参加することになったわけだが、重臣たちとの〔もめごと〕が絶えず、間もなく辞任してしまった。
安政二年。
藩主の養嗣子・牧野忠恭が越後へ帰城をした。

藩の儀式として、文武の道に秀でた藩士の技芸を新藩主に見せることがおこなわれていたが、河井継之助には、

「殿の御前において、経史の講義をいたすように」

との命が下った。

すると継之助は、

「冗談ではない」

笑いとばして、

「おれは他人に講釈をするために学問をしたのじゃあない。講釈させたいのなら講釈師にたのんだらよいのだ」

いかに藩庁がおどろき、あるいはおどし、あるいは説得したが、絶対に応じなかった。これでは藩庁の面目にもかかわるというので「では、病気ということにしておく」と、いえば、

「病人ではない者が、なぜ病気届を出すのだ」

いい張って、応じない。

ついに、藩庁から叱りつけられたけれども、この若殿さまの忠恭が藩主の座についてからは、継之助を重用すること、ひとかたではなかったようだ。

河井継之助が、父にかわって家督相続をし、外様吟味役についたのは三十一歳のときだ。

しかし彼は、ふたたび、

「江戸遊学をゆるしていただきたい」
と藩庁へねがい出て、ゆるされている。
藩庁では、
「河井のせがれには手がつけられぬ」
半ば、邪魔ものあつかいにしていたのであろう。

(二)

このころの河井継之助の逸話をのべたてていたら切りがあるまい。
才槌頭の、いかにも人を喰ったような顔つきで撮れている彼の写真が、いまものこされている。

安政から万延にかけての六年間は、幕府が大老・井伊直弼の独裁のかたちで、勤王革命の火の手を弾圧して、かつての威風のもとに天下の騒乱を取りしずめようとした、まさに〔歴史的〕な六年であったけれども、この間、継之助は家庭をよそに、西国から九州にまで足をのばし、見聞をひろめている。

哲人のごとく瞑想するかと思えば、遊里に流連してあくことを知らず、また読書に寝食を忘れるかとおもえば飄然として旅へ出る。強健な彼の肉体と思想とが何物かをもとめて猛烈に活動し

た時機であったのだろう。

長崎に滞在していたころ、継之助は妻の兄の棚野嘉兵衛へ、次のような手紙をしたためている。

「……天下の形勢は、近いうちに大変動をまぬがれないとおもいます。いま、日本をふくめて世界のありさまは、まさに戦国時代と申してよろしく、ロシアなどはことさらに強大な国のようで、わが国が攘夷などといいたてることは、まことにおろかなことで、海防を強化すると同時に外国との交際について知識を深めることはもっとも大切なことだと存じます。

このさい、朝廷と幕府との間も、ことさら緊密になり、ちからを合せて国事に当るべきなのに、薩摩・長州などの徒が、その間に割って入り、これを引きはなさんとしている様子には、つくづくあきれ果ててしまいます。

わが国が外国との交際にふみきることは、さけられぬことで、そうなれば朝廷も幕府もなく、政道御一新、上下一統、富国強兵に精を出すことが先ず第一になすべきことで、幕府も、いつまでもむかしのままのつもりでいては困ります。

しかし、わが長岡藩としてはちからも小さいことではあるし、天下の中心となってはたらくことはできぬまでも、藩の実力をやしない、天下の大勢をよくよく見きわめて進退をあやまらぬようにしなくてはなりますまい」

河井継之助という男の思念が端的にあらわれている手紙といえる。

政道御一新、上下一統……と、いいながらも、わが長岡藩としては……などと、一大名の家臣としての範疇からぬけきれなかった男、と彼を見ることもできようが、同じ時点において、薩摩・長州の勤王派の要人たちにしても、継之助同様に、

「政道御一新。上下一統」

のスローガンをかかげながら、尚も自藩勢力の伸張に狂奔していたことは否め得まい。

文久二年に、藩主・牧野忠恭が幕府から〔京都所司代〕を命ぜられて上洛したとき、継之助は、

「小藩をして所司代の要職につき、いたずらに紛乱の渦中に投ぜらるるは得策ではない」

とし、急ぎ上洛して藩主に建言をしている。

ここでまた藩論は二つに割れたが、翌年に牧野忠恭は職を辞し、次いで老中に任じた。これでは同じことなのである。

継之助の運動は、さらにつづけられ、間もなく忠恭は病患を理由に老中職を辞した。

継之助が郡奉行となって藩政の改革に活躍したのは、これから間もなくのことだ。

とにかく長岡藩をして、大勢を静観せしめると同時に、藩自体の実力をたくわえること。それなくしては、いざというときに何事も為らぬというのが継之助の信念であって、彼が着々と実績をあげるにしたがい、藩主の信頼が加わると同時に、ようやく、

「牧野家に河井継之助あり」

と、自他ともにみとめるところとなったのである。

むろん、兵備もととのえた。

オランダ商人から買い入れた最新式の銃器をもって、藩兵に洋式調練をほどこし、兵制改革につとめたし、当時、長岡藩が所有していた銃器の優秀さは、のちに継之助が実際にこれを証明してみせることになるのだが……。

はなしを前にもどそう。

鳥羽伏見の戦争で、旧幕軍が薩長を主軸とした勤王軍にやぶれるや、継之助は藩主と共に伊勢から海路を江戸へもどった。

ときに慶応四年二月。

河井継之助四十二歳。

京都の新政府は、あくまでも徳川の残存勢力を掃討せんとして江戸征討の軍を発した。

この王政復古をとなえる官軍が京都を発するころ、継之助は藩主と前後して長岡へ帰国している。

前将軍・慶喜は、すでに上野寛永寺内・大慈院へ入って謹慎恭順の意を表明し、旧幕府首脳のはたらきによって、江戸城は無血開城。ぶじに官軍の手へ引きわたされた。

京を発した官軍は、薩長二藩をはじめ、備前・紀州・亀山・鳥取・土佐・肥後などの諸藩を動員し、総勢五万といわれる。

これが、東海・中仙・北陸の三道にわかれ、江戸を目ざして進撃して来た。
前将軍は、これに恭順をしたけれども、江戸では上野山内にたてこもる彰義隊、会津藩はじめ東北諸藩の同盟、旧幕府海軍の抵抗などに対し、新政府軍も予断をゆるさぬ緊張をもって対峙することになった。
長岡藩は、この非常時に処すため、ついに河井継之助を、
「家老職・上席」
に任命した。
このころ、継之助は長岡城下の自邸にいるとき、妻のすが子がそばにいないと、ふきげんになったという。
この夫婦には、まだ子がない。
朝、目ざめると、いきなり継之助が、
「おすがや、おすがや」
わめきたてるようによびよせ、
「目がさめたとき、お身しゃんがそばにおらんといかん。おれが屋敷におるときは、いつも、お身しゃんがそばにおらんといかん」
しきりにいう。
すが子が苦笑し、

「むかしは……と申しましても、私が、この家へ嫁ぎましてより二十年の間、あなたさまというお方は一年のうちのほとんどを、この長岡へ住むこともなく、ひろい世間を見て来るのじゃと申され、江戸、上方、果ては西国から九州まで、いつもいつも外を飛んでまわっておられたではございませんか」

「なればこそ、いまここに、出来得るかぎり、お身しゃんと共にいたいのだ」

家老職となったのに、あまり城へは出仕せず、ひまさえあれば自邸にこもって寝そべっていた。

「たんと、おなまけなさいますこと」

すが子がいうと、

「いまのうちになまけておくことよ」

「これからあの、世の中はどう変ってゆくのでございましょうな？」

「先のことはわからぬなあ……」

であった。

(四)

これより先。

河井継之助が、家老職についた折に、藩主の面前で同じ家老職・牧野図書と論判をしたが、このとき継之助は、〔官軍〕と称して京を発した〔徳川征討軍〕について、次のようにいっている。

「官軍とは帝の軍隊をさすものでござる。薩長二藩をかしらにいただく軍隊が官軍ならば、わが長岡の藩兵も官軍でござろう。なぜといえば、共に日本の軍隊でありますれば……」

藩主・牧野忠訓も、すでに隠居をしている先代藩主の牧野忠恭も、「いまは、いたずらに頭うなだれ、尾を振って薩長に従うことはいと易いことではあるが、われらはわれらの誇りを失うことなく、来るべき新しき世にちからをつくしたい」

という意向であって、これには継之助も大賛成だ。

けれども、東北諸藩の同盟は、江戸からさらに東北平定にすすまんとする新政府軍を迎え撃つべく準備をすすめているし、その主力となった会津藩の先鋒は早くも越後へ入り、小出島へ進出し、伊勢・桑名の藩兵もこれをたすけて越後・柏崎へ集結をしている。

これらの諸藩が、

「長岡藩の言動は曖昧にすぎる。なぜ、われらに同盟をせぬのか。もしも、われらに不同意とあれば、長岡へ攻めこむがよろしいか」

と、威嚇して来た。

継之助はこれに対し、

「御勝手に」

はねつけている。

旧幕府の歩兵隊が新潟へやって来て掠奪をほしいままにしたときも、継之助は新潟へ駈けつけ、歩兵隊長・古屋作左衛門をよびつけ、きびしく叱りつけたものだ。

いっぽう政府軍（西軍）は、先ず黒田了介（薩摩）、山県狂介（長州）が戦地参謀となって兵をひきい、信州を平定した岩村精一郎（土佐）が軍監としてひきいる先鋒軍と越後・高田に合流し、長岡藩のうごきをきびしく見まもっている。

重臣たちの、

「いったい、どちらに味方するつもりなのか？」

との問いに、継之助は、

「御承知のごとく、江戸より西は西軍の平定するところとなり、彼らは新政府と称し、日に日に新しき政令を発しつつありますが、また一方、会津、仙台、米沢、庄内など奥羽の諸藩は同盟をむすんで直接に朝廷とのつながりをたもち、朝廷の臣としての立場をうったえようとしておるわけですが、むろん、これを薩長がゆるす筈はない。いま、薩長の命は、すなわち朝廷の命となる。奥羽諸藩のうったえなどは朝廷の耳へはとどきますまい。となれば、戦争は必定でござる。そのときこそ、わが長岡藩は両軍の関門となるべきです」

と、いい出した。

両軍の間にたち、これを和解させようというのだ。

あくまでも長岡藩は中立の〔たてまえ〕をとるが、この中立の立場をつらぬき通すためには、どうしても充分な軍備が必要であるというのが継之助の信念である。

だから、長岡を中心に諸方の守塁には外国わたりの銃砲をそなえ、継之助は一分の隙も見せない。

なるほど継之助の考えは立派なものではあるけれども、正理も正道も通らぬのが〔戦争〕の実態である。

「どうも河井氏の肚のうちがわからぬ」

藩論もわかれて騒然となったが、なによりも藩主の信頼があつい継之助が生得の頑強さをもって事をすすめるのであるから、反対派もこれにゆずるより仕様がない。

河井継之助は長岡藩・総督に任ぜられた日に藩士一同をよびあつめ、

「いまや天下の形勢をうかがうに、事態は容易ならざるものがござる。われら思うに……徳川家の行動の、あるいはその道をあやまらしむるものがあったやも知れぬが、朝廷方の仕様もまた、ことごとく当を得たものとは申せぬ。わが藩が現下の大勢に処するの道はただ一つ。まごころをこめて領民を安撫し、朝命にそむかざると共に、徳川家へ対しても祖先以来の義理を失なわぬことにある」

と、藩の立場をあきらかにした。

まさに正論といえよう。

同じ譜代の大名でありながら、いち早く新政府に尾を振った諸藩にくらべて、この河井継之助の主張は、あまりにも徳川家にこだわりすぎてい、いかにも彼が封建の世の人から脱却しきれていないようにおもわれるけれども、これは違う。

新時代。

新政府。

これらを推進すべき戦争のために編成された〔官軍〕にしても、革命権力そのものであり、薩長をはじめ、官軍首脳の考え方は、

「血をながし、徹底的に旧徳川の勢力を破砕し、わが権威を不動のものにしよう」という一点にしぼられている。

だからこそ……将軍自身が一夜のうちに政権を返上したという、どこの国にもなかった新しい事態に対しても、これを虚心坦懐にうけ入れることなく、却って旧幕府側を挑発して戦争へもちこんだのである。

ちなみにいっておこう。

朝廷を中心にした新政府による新時代が現代へつながる状態というものは、なにも徳川家を中央政局から追い退けたから可能になったのではない。

大きな新しい時代のながれというものは、そのようなものではあるまい。

たとえば……。

革命派が、旧将軍の、

「血をながさずに新しい時代を迎えよう」

というよびかけに応じ、彼の政権返上をうけいれ、

「では、ともにちからを合せて……」

と手をさしのべ、徳川勢力を薩長勢力に参加させ、新内閣の誕生を見たとしても、時代の推移には〔悪化〕の一点をものこされなかったろう。

継之助が、

「……朝廷方の仕様もまた、ことごとく当を得たものではない」

いいきったのは、このことである。

(五)

〔中立〕の防備をかためた長岡藩へ、背後からは会津・桑名の藩兵。前面からは〔官軍〕がせまり、いやでも河井継之助は自藩の運命を決せざるを得ぬ立場へ追いこまれたが、

「いよいよじゃな」

かねて、このことについては覚悟をきわめていたことであるから、五月二日に至って、越後・小千谷まで進出して来た官軍本営に向い、継之助は出頭した。

小千谷は、長岡の南方五里余。

ここへ進出した官軍の本営には、軍監・岩村精一郎をはじめ、淵辺直右衛門（薩）、杉山荘一、白井小助（長）などが幹部将校としている。

小千谷へ到着をした河井継之助は、わずかに藩士・二見虎三郎と従僕二名を従えたのみで、あとの供は駕籠かきの人足であった。

会見は、町外れの慈眼寺でおこなわれた。

継之助は、小千谷の町の旅宿で着替えをし、麻上下の礼装で、慈眼寺へ向い、二見虎三郎を次の間にのこし、単身で岩村軍監らと会見をした。

「さて……このたびの大変以来、今日まで、わが長岡藩の挙動については、さだめし御不審のこともあろうかと存ずるが……」

継之助が切り出すや、岩村軍監は憤然として、

「当然ではないか、当然ではないか！」

と、きめつけた。

ときに岩村精一郎は二十三歳。のちに男爵を授けられ、貴族院議員にもなったが、凡庸な人物である。この岩村が若さにまかせ、錦旗を背に負った勢いで継之助に対決したわけだ。

岩村は何よりも先ず、現下の状勢において、長岡藩の軍備の恐るべき充実ぶりを指摘した。

そもそも、あの朝廷への建言書以来、長岡藩は新政府からにらまれている。

ところへ、新政府から、
「出兵に応ぜよ。献金をせよ」
と命を下しても、長岡藩はこれに応じようともせぬ。
「このことはつまり、取りも直さず、官軍に刃向わんとする存念ではないか」
と、岩村が突込むと、継之助は、
「このたびの事変は、急激にして異常をきわめ……」
「何、異常だと……」
「いかにも、上から下まで、それぞれの立場というものが、たとえていえば一夜のうちに逆転をいたしたわけでござる。もとよりわが藩、わが主人においては朝廷に対したてまつり、いささかの異志も反逆もこれなく、ただ藩内の議論、おのずからわかれてさだまらず、いろいろとやむを得ざる事情もあり……」
「ふふん……戦うべきか、下るべきか、そろばんをはじいていたにしては手間がかかりすぎたようだな」
「いや、戦うことは不本意でござる」
「河井氏。貴公、いったい何を申したてに来たのだ。早くいい給え、早く」
「御承知のごとく、長岡は会津と国境を接し、前よりは西軍……」
「何、西軍とは何かッ。官軍である！」

「うしろよりは奥羽の諸藩からの出兵にはさまれ、騒乱ひとかたではござらぬ。ここのところを、よろしゅう御推察ねがいたい。ゆえに……ゆえにこそ、われらは騒乱の渦中におぼれることなく、先ず領内の人心をおさめ……」

「だから、どうせいといわれるのだ」

「長岡への進軍をおとどまり下されたい」

「だまんなさい。それならばなぜ、徳川追討の出兵命令に応じなかったのだ」

「昨日までのわが主人は前将軍の臣下でござった。一夜のうちに、これへ向って弓をひくことは、さすがになれませぬ。それが人のこころ、人というもののあり様と申すものでござろう」

「な、なにをばかな！」

「と申しても、われらが旧幕軍に味方しようというのではない。両者の間にたち、戦火をまじえることなく……」

「おぬし、仲介の役をつとめようというのか」

「この上、戦火の惨状を見るのは、むだでござろう。ばかばかしいことではありませぬかな」

「おいおい、河井氏。おぬし何を血迷うている」

「別に……」

「虫のよい、ばかな……なるほど田舎大名の御家老さまの申すことだわ」

勝ちほこっている若者の熱血はつよい。

このとき継之助と相対した者が、いま少し心得のある人物だったなら、状況おのずからちがっていたろう。

岩村には継之助の正論も、彼の価値も見ぬけてはいない。

のちに岩村は、このときの継之助について、

「このとき彼は、もとより歎願に来たりし者なれど、意気傲然、論詰の語をおび、気焔揚りおれり」

と、のべている。

弱々しく立場をうったえたのではなく、堂々と若輩の岩村に説ききかせたものであろう。

慈眼寺の本営から追いはらわれた河井継之助は、以来も執拗に歎願書を出し、

「これを総督府へ御取次がねがいたい」

と、たのみこんだが、きき入れられるものではない。

この夜は小千谷の旅宿に一泊し、継之助は二見虎三郎や従者を相手にし、なごやかに酒をのんだが、そのとき、

「二見よ。官軍の一部隊をあずかる長というからには、いま少しましな男かと思うたが……あの岩村という軍監は、まるで小便くさい子供だ。新政府も手不足なのだなあ」

苦笑と共にもらしたそうな。

(六)

中立者が、中立の意義と立場を説明しても、一部隊の隊長に阻止され、これが相手方の最高幹部の耳へもとどけられぬというのでは〔はなし〕にもならぬ。

これが革命軍の実態というもので、そもそも革命の本体は、勝敗の差が明確なものでなくてはならぬ。勝者の権力の土台は旧勢力の徹底的な破壊により、はじめてきずかれるものなのである。

かくて……。

長岡へせまる官軍を迎え、長岡藩は〔中立〕をまもるための戦闘へ入る。

「懸命にやっては見たが……やはり、だめであったよ」

長岡の自邸へ帰って、継之助はすが子に、

「戦というものは、いつの世にも、こうしてひきおこされるものなのだよ」

と、さびしげにいった。

長岡城下の老幼婦女子は家財をまとめ、ことごとく避難をした。

すでに、小千谷の近辺では官軍と会津藩兵との戦闘がひらかれている。

河井継之助は自邸を出て城へ向う朝、これを知らぬ母がねむっているうちに仕度をととのえて

玄関へ出た。父はすでに亡くなっている。
「すがよ。母上をたのむ」
「はい」
「お身しゃんも気の毒なものだでや」
「……」
「すがや。長いようで短かかったな」
「はい」
「さらばだ」
このとき、継之助に従って門を出かかる従僕の松蔵をよびとめ、
「松蔵。たのみがあります」
すが子が何かささやき、松蔵は泣きながら「承知つかまつりました」と、こたえた。
五月十一日。
長岡藩兵は、榎峠まで押し寄せて来た官軍を破り、次いで旭山の戦闘にも勝利をおさめた。
岩村精一郎は、
「畜生めが……河井がおるから長岡のやつども、強いのだ。こっちは大砲一門につき、一日に百五十発も撃っとるのに……」
淵辺が、

「岩村さん。あのとき河井を抑留しておくべきじゃったな」
「そのことよ。畜生、そのことよ」
五月十八日の夜から朝にかけて……。
官軍は淫雨をついて信濃川の激流をわたり、濃霧のうちに寺島へ上陸した。
そもそも会津・若松城を本拠とする東北諸藩を全滅させるためには、東は白河、北は長岡を先ず手中につかみ、この両道から会津へ攻めこむというのが総督府の作戦だけに、ぜひにも長岡をぬかねばならない。
越後方面へ来攻した官軍は二万から二万五千ほどといわれている。
これに対し、長岡藩は三十二小隊をもって編成した藩兵千五百五十余人。このほか年少者をもって組織した〔予備隊〕があった。
さらに、会津、桑名、米沢などの藩兵三千余人、旧幕府および水戸などの残党数百人。
合わせて五千そこそこの兵力で官軍を迎え撃った。
むろん、官軍は長岡攻撃に主力を投入し、すさまじい砲火をあびせかけつつ、猛然と肉迫し来った。
この場合、濃霧は官軍に幸いした。
会津藩兵なども城下へ入り応援してくれたけれども、ついに支えきれず、喊声をあげて城下へなだれこんだ官軍は諸方へ放火しつつ、長岡城へせまる。

河井継之助は城の大手口へ出て、
「おりゃ、ここで敵をふせぐ。みなは城下の橋を焼きすて、扼戦しろや！」
と、諸隊に命じ、みずから元込六穴のガットリング銃をつかみ、渡里町口から攻め込んで来る敵を射撃した。
「どうだ、うまく当るだろうが……ここはいい。おれが撃っとるから、お身しゃんらは早く向うを……」
このとき一発の敵弾、継之助の左肩を貫通したが、屈せずに射撃をつづけた。戦闘は混乱をきわめているが、ここまで押しつめられてはふせぎ切れない。
藩主・牧野忠訓はじめ、その一族を楠吉村の普済寺に退避させた。のちに藩主たちをまもる扈従組の一隊は八十里越えを経て、五月二十日に会津へ入っている。
さて。
官軍は火の海の城下町を突破し、ついに長岡城へ突入した。この城は守りもあさく出来たものだから、もちこたえるべくもないので、
「これまで」
河井継之助は城楼に火をはなち、
「全員退去」
を命じた。

継之助が芸妓をよび、よく遊んだ料理茶屋〔桝屋〕の女将おえいが、こう語りのこしている。

「お城が落ちるというので、大砲やら鉄砲やら、そりゃもう大変な物音で……私も悠久山（城下の東方一里）まで逃げてまいりますと、河井さまはじめ皆々さま方がならんでおいでたので、私が、河井さま、長岡は大事ないとおっしゃっておいでになりながら今日のありさまはどうしたことでございます、と……もう胸いっぱいになって申しあげますと、河井さんはお叱りもなく凝と手をおくみになって、いかにも残念だでや……と、こう申された御様子がいまもありありと眼にのこっております」

継之助は、開戦になっても城下にのこり、毎日千人もの弁当をこしらえてくれたこの女将をはじめ女たちに、

「これが一生の名残りだで」

といい、めいめいに餞別をあたえている。

(七)

長岡城へ入った官軍の、その後のうごきはにぶかった。

ここへ全力を投入したので、金穀・弾薬欠乏し、すぐさま会津へ向けて進撃というわけにはゆかなかったのである。

新政府も貧乏なのだから、諸方から徴発しては金をこしらえ、戦いをつづけているのだ。

いまは長岡藩も、会津・桑名の藩兵と合流していたが、河井継之助は諸将とはかり、加茂（南蒲原郡）を根拠地にして兵力の恢復をはかることにし、二十一日に諸隊をひきい、五十嵐川をわたって加茂へ着き、ここに本営をおいた。

加茂は、長岡の東北約十里の地点であった。

ここへ、諸方に散っていた兵たちもあつまって来て、

「長岡をうばい返す」

ための準備が次第にととのえられてゆく。

六月いっぱいは、小戦闘が両軍の間に反復した。

しかし、継之助の指揮によって、じりじりと長岡城へせまりつつあったが、六月二十二日に長岡の北方二里ほどの福井・大黒まで進み、大雨の中で激戦をくり返しつつ、ついに福井・百束・押切・四谷の線を確保した。

こうしてまたも小戦闘をくり返しつつ、七月二十四日に至る。

このころになると、官軍の後続部隊も海陸双方から越後へ入っている。

二十四日夜。

河井継之助は六百十余人の兵をひきい、百束村をぬけ、午後十時ごろ、八町潟へかかった。

八町潟は長岡の北東一里をへだてたところにある大沼沢であった。現代はすべて埋められ、そ

のおもかげもない。

連日の大雨で、沼は、いっぱいに水をたたえている。

土も道も雨にくずれて歩行困難をきわめたが、以前はよくこの大沼に魚釣りに来た鬼頭、森田、武井などの藩士が道案内をつとめ、通路を修理しつつ進んだ。

周囲には官軍の陣地が散在する中を、六百の全軍が息をひそめて通りぬけるのだ。

泥沼、泥田の中をひそかに、しかも急速をもってすすむ。非常な苦労であったろう。

このため、大黒・田井方面へは別動隊が出撃して官軍に挑戦をはじめた。

その銃声・喚声が彼方できこえる中をあくまでも潜行進軍し、ついに敵軍胸壁まで一町のところまで来た。ここで宮下村の全軍の集結を終える。

まだ官軍は気づかぬ。

「よし！」

継之助はうなずき、

「進め！　まっしぐらに城へ駆けこめい！」

突撃の命を下した。

六百の精鋭は吶喊（とっかん）の叫びをあげて敵陣へ突入した。

田井、橡尾の味方も、それと知って烽火（のろし）をあげる。

味方の諸陣地からは、これを合図に、一斉に砲門をひらいて砲撃を開始した。

官軍は不意をつかれた。

この夜、長州の奇兵隊五百が弾薬などを長岡へ輸送中であったが、戦火にまきこまれて狼狽し、ほとんど全滅したといわれる。

このころ、官軍は兵力を分散して総攻撃をおこなうつもりでいたらしい。

だから長岡城には五百にたらぬ兵力のみが残っていただけで、これへ奇襲をかけたのだから物の見事に成功をしたわけだ。

ここでまた、桝屋の女将・おえいの語りのこしを……。

「……私どもも、おっかなびっくりで御城下へ入って行きますと、長岡勢の二十人ばかりがおいでになり、その疲れきった御様子といったらおはなしにならぬほどで、お前たちを見たら、もうがっかりしてうごけぬと皆さま方が尻もちをついておしまいになりました。なにぶんにも長岡勢の取返しだというので、市中のよろこびは大したものでした。菓子屋でも魚屋でも酒屋でも、みんな山のように積んで贈りまして、生きわかれた親どもに二度めぐり会うたようなこころもちがいたしました」

と、ある。

長岡城を取り返しはしたが、ここまでが精一杯のところで、敗走する官軍へ追撃戦をかけるまでにはゆかなかった。

長岡藩のみか、会津、米沢の藩兵も実によく戦ったという。

官軍にとっては思いもかけぬことで、総指揮官の西園寺中納言公望も、参謀・山県狂介（のちの有朋）も寝衣のままで指揮をとったり逃走したり……のありさまであった。

だが、信州の諸藩をふくめた官軍は続々と兵力を増し、新潟方面へも海軍が上陸した。

河井継之助は長岡奪回の戦闘で左足に敵弾を受け、戸板に乗って指揮をおこなったが、これは、かなりの重傷であった。

「長岡を取り返したなら、一気に柏崎の敵本営を衝き、さらに小千谷から三国・飯山の両道へすすみ、敵を追いはらってくれよう」

と、継之助は考えていたのだが、自軍の疲労のはげしさを見ては、あきらめざるを得ない。

継之助の傷口は次第に化膿して、身うごきもならぬほどとなった。

官軍は息をつく間もあたえず、またも攻め寄せてくる。

七月二十九日。

長岡城は、ふたたび官軍の手に落ちた。

継之助は戸板に乗せられ、兵にまもられて見附から吉ケ平へ逃げのびた。

他の兵たちも、散り散りとなりはじめる。

吉ケ平からは、いわゆる〔八十里越え〕の道が会津へ通じている。

「会津へ逃げたところで、なんのよいことがあるものか。おれだけ置いて行け」

と、継之助はいいだしたが、部下に説きふせられ、会津へおもむくことになった。

彼につき従う下僕・松蔵が特別製の駕籠をこしらえ、ここに継之助を入れて運ぶことにした。
道中、継之助の傷は重くなるばかりである。
しかも、けわしい山路をゆられて行くのであるからたまったものではない。
八月五日。
会津領の只見村まで来て、容態が急変し、ここへ、数日をとどまることにした。
急報を受け、会津にいた旧幕臣・松本良順が只見村へ駆けつけてきた。
両人、旧知のごとく語り合った。
良順がみやげにした肉のタタキを継之助はよろこんで食べ、
「久しぶりで豪傑の顔を見た」
と、松本良順を評したという。
良順は、
「ここでは、どうにも手当がならぬ。ぜひにも会津まで来ていただきたい」
はげまし、手当をおこなって一足先きに会津へもどって行った。
「もう、どうせいかぬが……良順さんの折角のことばだから、一歩でも二歩でも会津へすすもうよ」
と、継之助はいい、八月十三日に塩沢村へ到着し、同村の医者・矢沢方へ投宿したが、このとき、彼は藩士・花輪求馬に、

「会津の若松城も遠からず敵の手に落ちよう。わが藩の者も、そのことをこころして会津に行くことだ」

さらに外山寅太へは、

「お前をもっと出世させてやろうとおもうていたが、それもかなわぬ……だが、これからの世の中は身分の上下もないようになり、人は、おのおの力量次第。おもしろくなるでや、世の中が……寅や。何でもこれからは商人が早道だぞ。おもいきって商人になりやい」

いい残した。

十五日夜。

河井継之助は、松蔵をよびよせ、

「ながながと厄介をかけたな。ありがたかったでや」

「もうすぐに会津のお城でござります」

「松や。おりや、明日の朝に死ぬるぞ」

「そ、そんな……」

山村の夜は虫の声にみちていた。

「松や。平形の納骨箱をつくれ」

「だ、旦那さま」

松蔵はいやがったが、継之助に叱られ、ついにやむなく主人の納骨の仕度をはじめた。

これを見て、継之助は大いによろこび、
「よし、よし」
しきりにうなずく。
こうなっては松蔵もこころを決め、
「旦那さま。おゆるしをねがいます」
「何だ」
「お髪の毛を切り取らせていただきとうございます」
「ふむ……」
じっと松蔵を見やった継之助が、にやりと笑って、
「そうかい、おすがにたのまれたのだな」
「はい」
「よいとも。切らんせ」
松蔵、たまりかねて号泣した。
翌日の昼ごろから、継之助は昏睡状態となり、午後八時ごろ、やすらかに息を引きとった。ときに四十二歳。
奥羽同盟の主力たる会津・若松城が官軍に城を明けわたしたのは、この年の九月二十四日であった。

壮烈なる孤忠

会津・若松二十八万石の最後の殿さま松平容保の肖像写真が、現代も数枚のこされている。

どの写真を見ても、文字通りの眉目秀麗な美男子そのものであって、彼が〔京都守護〕の役目に任じていたころ、陣羽織に籠手、臑当をつけ、陣太刀をよこたえた写真があるけれども、容保のやさしく美しい容姿が、そのいかめしい武装とは全く異質のものを感じさせるほどだ。

体軀も細い。少年のころから病身であったというから当然のことなのだ。

しかし、この細い肉体の底には、あの幕末の動乱に生きた勤王佐幕両派の人物中、誰にもおとらぬ理智のかがやきと不屈の〔さむらい精神〕がひそんでいたのである。

彼の少年時代における挿話は、あまりつたえられていない。

彼は、美濃（岐阜県）高須三万石の城主・松平義建の子に生まれ、銈之允とよばれた。

この高須の松平家は、いわゆる〔御三家〕の一つ、尾張家の分家になっている。

尾張家二代・大納言光友の次男・源四郎義行がその藩祖で、義建は十代目にあたるわけで、三万石の大名でも家柄はすばらしく、官位も高い。

この家は、いうまでもなく長子の義比がついだのだが、六番目の子に生まれた銈之允は、やがて会津・松平家へ養子に入ることになる。

銈之允が養子に入ったのは弘化三年（一八四六）のことで、年齢わずか十二歳であった。

六年後の嘉永五年になりて、養父・忠恭が死去し、銈之允はここに、松平肥後守容保として、名実ともに会津藩九代目の藩主となった。

ここで会津藩につき、いささかのべておかねばなるまい。

会津（福島県）若松の城は、蒲生・上杉氏を経て、徳川幕府によって天下統一が成るや、二代将軍・秀忠の第四子・保科正之が入り、これが会津・松平家の祖となったものである。

保科正之が、三代家光、四代家綱の徳川将軍をたすけ、幕府政治をゆるぎないものとするべく精力的な活躍を見せたことはよく知られている。

正之が、幕府閣僚たちと共に改訂した〔武家法度〕二十一ヵ条というものをよむと、これはむろん徳川の天下繁栄を願うためのものではあるけれども、行文には、おのずからなる〔きびしさ〕がみなぎっている。

つまり、幕府も大名も共に歩調をそろえ、

「世をおさめるものは、みずからをきびしくいましめねばならぬ」

という意気ごみが、あきらかに見てとれる。

正之亡きのち、以後二百年の間に、徳川幕府は変転する時流におぼれたり押し流されたりし

て、次第におとろえて行くのであるが、

「会津藩のみには、藩祖・正之以来の伝統というものがきびしく受けつがれ、それが、幕末に至り、最後の藩主・松平容保によって開花したのです」

と、会津人は誇る。

つまり、それほど、この最後の藩主の人生は、活動は、すばらしいものがあったからだ。だが、そのすばらしい開花は、まさに悲劇的な結末を見ることになった。

松平容保が幕府の政治に参与し、〔京都守護職〕という大任をあたえられたのは、文久二年（一八六二）閏八月一日のことだ。

ちょうど、容保は病気中でもあって、

「将軍家の命とあらば、何事にせよ、お受けするのが藩祖からの家訓でもあるし、つつしんでお受けするべきであるが、自分のような才もうすく、あまり躰も丈夫でないものが、このような大任に当り、もしも失敗のあったときは一身一家のあやまちではすまぬことになる。また、我藩は東北に僻在していて、家来たちも、おおむね京都の風習にくらく、ひいては、じゅうぶんなはたらきも出来かねよう」

と内命が下った時には、ただちに固辞した。

殿さまばかりではない、会津藩の家臣たちも、みな大反対であったといえよう。

何しろ、大変な時代となってきている。

十年前に、ペリー提督のひきいるアメリカ艦隊が江戸湾へ入港してからというものは、騒乱また騒乱の世相であった。江戸幕府が欧米諸国の威圧に負け、外国と通商・和親条約をむすんでからは、目のあたりに見る外国列強の文明――ことに軍事的装備のすばらしさ、おそろしさは、幕府のみか、諸大名たちをも軍備拡充に狂奔させたものである。

こうして、軍事的な力をもった大名、すなわち薩摩、長州、水戸、土佐などの雄藩に対し、もはや幕府は昔日の威風をもって、これを従属せしめるだけの軍事力も政治力も持ってはいない。

あの〔勤王運動〕というものが、

「夷狄を追い払え！」

という〔攘夷論〕をスローガンとして諸方に起こり、革命運動をおこなう勤王志士や浪士たちが続々と、天皇のいる京都へあつまり、血を血で洗う態の陰謀や暗殺が皇都を中心に渦巻きはじめた。

これを弾圧したのが、ときの大老・井伊直弼であり、井伊をたすけて〔開国〕の立場から幕政をたて直そうとしたのが、松平容保である。

井伊大老が、水戸浪士の襲撃をうけて死んだのは万延元年（一八六〇）だが、このとき、松平容保は二十六歳の若年ながら、事件後の幕府と水戸藩の確執を見事に調停し、

「中将には、これより、時折は登城して、遠慮なく年寄どもと相談をするように――」

聡明だが、十四代徳川将軍となってからわずかに二年、激動する時代、ゆらぐ幕政を心痛する姿が、それこそいたましいほどに見える十五歳の将軍・家茂から、親しく内命があった。

以来、この年少な将軍が会津藩主によせる信頼は絶大なものとなって行ったようだし、

「あの上様の御顔を見ると、いかなる難事にも身をもって当ろうという気持になってしもうてな」

と、容保自身も洩らしている。

とにかく、井伊大老の死後は、京都へ入った薩摩、長州、土佐などの勢力が先を争って朝廷とむすび合い、もう幕府のいうことなどに耳を貸そうともしなくなってきている。

「幕府を倒せ！」

「夷狄を追え！」

の叫びをあげ、勤王志士と称する浮浪の徒も、どさくさまぎれの混乱に乗じ、徒党を組んで市中を横行して、金品強奪、婦女暴行、佐幕派暗殺など、京都はもう目もあてられぬ状態となった。こんなときに、幕府から京都へ派遣されている所司代の酒井忠義などは、あわてふためいて二条城へ逃げこむというありさまである。

幕府は憂慮した。

〔京都守護職〕という役目を新たにもうけ、皇都の治安に当らせようとしたのも、こうしたわけ

からで、幕府閣僚ばかりか、将軍が、もっとも強く、

「会津中将を任ぜよ」

と、いい出してやまない。

ことに、この年の八月、薩摩藩の行列が武州・生麦村を通りかかったとき、行列の邪魔をしたという理由で通行中のイギリス人を斬殺した事件があり、

「薩摩藩は攘夷のさきがけをした」

と、朝廷では大いによろこび、薩摩藩をもって京都守護の役目にあてようといい出す始末であった。

一刻も猶予はならない。

幕府は、越前・福井三十二万石の藩主・松平慶永（当時、隠居中）をもって、会津を説得させた。

慶永もまた新設された〔政事総裁職〕についたばかりで、同じく〔将軍後見職〕となった一橋慶喜と共に、

「力を合せてもらいたい」

と、松平容保への勧誘は〔頻繁日夜に絶えず〕と、物の本に記されている。

結局、容保は引き受けることにした。

慶永の熱望もさることながら、

「お年若な将軍家のことを思えば起たざるを得なかった」

のであろう。

これをきいて、家来たちはおどろいた。

会津の国もとから、西郷頼母、田中土佐の二家老が和田倉門内の江戸藩邸へ駈けつけ、

「いまや大公儀のおとろえ方は一様のものではござりませぬ。まことにもって至難の局。ことに京都守護の御役目などとは、俗に申す薪を負って火を救おうとするようなものにて、おそらく労多くして功なしの結果と相なりましょう」

必死で押しとどめようとした。

むりもない。

井伊大老が勤王派の蠢動を弾圧し、さらに暗殺されてから、わずかに二、三年しかたっていないのに、今や、井伊家は十万石を削られて退転し、

「もっと、ひどい罰をあたえよ！」

などと、朝廷は幕府に命じてきているありさまである。

このような情勢のうちに、京都へ上って行き、朝廷や勤王大名と幕府との間にはさまれながら直接に難局をさばいて行かねばならぬ〔御役目〕なぞを殿さまが引き受けてしまっては、会津一十八万石の将来がどうなってしまうことか……。

家老たちの心痛も当然であったろう。

金もいる。

役料として五万石、その他の費用も出るわけだが、とても足りたものではない。事実、この役目についたために、会津藩の財政は全く底をついてしまったものだ。

このとき、容保は家老たちに、こういった。

「ようわかった。なれど聞くところによれば、はじめ、余が再三にわたって固辞したのを、一身の安全をはかるため、と、評判するものがあったとき く。そもそも会津藩には宗家（徳川将軍）と盛衰存亡を共にすべしという藩祖公の遺訓がある。ただ、余が不才のために、万一の失敗をおそれただけのことであって、いやしくも安きをむさぼるとあっては、お受けするより仕方もあるまい。どちらにせよ、天下国家のためにはたらくことじゃ。かくなっては、余もみなのものも、心を合わせ、共に京都の地を死場所といたそうではないか」

殿さまに、ここまで決心されたら、もう何もいうべきことはなかったようだ。

容保は京へおもむくに先立ち、田中土佐（家老）野村左兵衛（公用人）など心きいた数名の家臣を京都へやって下準備をさせると同時に、大庭恭平という家臣に特別の密命をあたえ、情勢をさぐらせた。

何しろ、そのころの京都のありさまというものはひどいもので、こんな話も残っている。

薩摩、長州などの勤王大名や、その藩士たちのうごきは別として、この天下の動乱に乗じて一旗あげようという自称勤王浪士の中には、会津藩の所在さえも知らず、

「かいず藩とは、どこの大名だ？」

と、いい出すやつどももいたそうな。

大庭恭平は、みずから、こういう連中と交際し、金や酒をふりまいて彼らの歓心を買うと共に、次第に彼らを指導するようになったという。

そして、この浮浪志士たちの中には、やがて会津藩の立場をよく了解し、容保が事破れて会津へ帰り、官軍を迎えて若松城へたてこもったとき、

「死にに来ましたよ」

ひょっこりとあらわれ、会津兵と共に戦って死んだものが数名いたときいている。

この年の十二月二十四日の朝、松平容保は藩兵をひきいて京都へ入った。

京都では、先に京都守衛を命じられて数々の失敗を演じている彦根藩や、二条城へ逃げこんだ所司代などを見ているため、市民さえも、

「田舎大名が、どんな間ぬけた姿を見せるか……」

馬鹿にしているものが多かったらしい。

ところが、まことに威風堂々たる行列であって、馬上に凛然たる殿さまをかこむ行列は一里にもおよび、殿をつとめる家老・横山常徳をとりまく儀従だけで五十人におよんだというから、会津藩が二百年の間に培った士風、その底力の全貌を遺憾なく発揮したものと思われる。

それでいて松平容保は京へ入るや、すぐさま、ときの関白・近衛忠熙をおとずれて天機をうか

がうなど、することなすことに少しの隙もない。

また近衛関白も、老熟な朝臣であって、勤王運動さかんな時流に巻きこまれ、熱に浮かされたような過激派の公卿たちとはくらべものにならぬ人物であった。

だから、容保の、

「ただいまの急務は、日本国内の人心一和が何よりの先決で、その人心一和は主として公（皇室）武（将軍）の一和であり、それが欠けましては、いかなる上策がありましょうとも、実行はむずかしいと存じまする。これに反し、人心一和すれば、いかなることもかなわぬことなし。容保、不肖ながら公武一和のため、死をもってこれに当る決心にござります」

との挨拶に、関白はふかくうなずき、後、御所へ参内して孝明天皇に、

「会津中将は、当今まれなる至誠の人物と見うけました」

と、つたえた。

松平容保が、はじめて孝明天皇に拝謁をしたのは、翌文久三年正月二日である。

天皇は、前に近衛関白から容保の人柄をきいておられたので、非常な期待をもたれて容保を謁見されたのである。

（まさに近衛が申した通りの人物である）

たちまちに好感を抱かれ、特に緋の御衣を下賜され、

「戦袍か直垂につくり直すがよい」

と、いわれた。

こうしたことは、かつてないことであった。

天皇が、御自分の着ておられるものを手ずから武士にたまわるという、この一事をもって、容保が、このはじめての謁見だけで、いかに天皇のふかい信頼を得たかが判然とする。

天皇と現将軍をつなぐ一つの楔は、天皇の御妹・和の宮が将軍夫人となることによって生まれたが、これは、幕府の強引な政策が実現したものであって、むろん、天皇はよろこばれていない。

しかし、いま松平容保は公武をむすぶ、もっとも大きな楔となり得たわけだ。

ときに容保、二十九歳。

容保が〔守護職〕として成すべきことは山積しており、そのどれもが急を要するものばかりであったが、何よりも先ず、皇都の治安をととのえねばならない。

同時に、天皇家の経費についても、旧習を廃し、物価の高騰に沿って充備することを幕府に建議した。

こんなことは、もっと何年も前にしておかねばならぬことなので、手ぬかりもよいところなのだ。つまりそれほど幕府の政治は新しい時代に無感覚なくせに無駄が多く、統一を欠いていたこ

とになる。

皇室への経費がまずしければ、いきおい公卿たちも薄禄であって、永い間、内職をして暮していた公卿たちも多いし、こうした鬱憤がつもりつもっていたところへ、攘夷論がおこり勤王運動が燃えひろがったのだから、公卿たちがこれに乗じ、

「幕府を倒せ！」

となるのも、当然なのである。

容保が入京してから、公卿たちもおとなしくなったようだが、何としても、すでに時機を失した感がある。

相変らず、暗殺の絶間はなく、後見職の一橋慶喜の旅宿へ生首が投げこまれたりした。

こういうわけだから、幕府に協力しようとする公卿たちもうかつな言動をしては命が危くなるということだ。

幕府も一応は、

「外国勢力を追い払え！」

という勅命をうけたまわってはいるが、だからといって、すでに条約をむすび日本国内に入って来ている欧米列強の威力に対して反抗することなど、もってのほかのことだ。

勤王派の中でも、すでに将来を見こし、外国との交際の必然性を知っている連中でさえ、

「とにかく幕府を倒すまでは攘夷の旗をかかげておかねばならぬ」

というので、幕府が朝廷と外国との板ばさみになる苦痛を利用するのだ。
こうした中にあっても、容保はたびたび躰をこわし、病床についている。
それでいて、することは実にてきぱきとしたもので、京都守護の責任は、
「何事も自分一身にある」
といいきり、むずかしい事件が起こるたびに、他へ責任を転嫁したり、逃げたりするようなことは一度もなかった。
孝明天皇の信頼はふかまるばかりで、容保が軽い病気にかかったりすると、それが回復するまでは、
「中将の身に万一のことあらば、今後の日本の行末にもかかわることになる」
居ても立ってもいられない様子をお見せになったという。
容保は、
（今だ！）
と、思った。
（今こそ、将軍家が京都に来られて親しく皇室をまもり、世情をととのえるべきである）
勤王派は、
「何月何日に外国勢力を追い払え」
と、攘夷の月日を決めろ、などと無謀なことをいい出す。ことに長州藩は公卿の三条実美（さねとみ）を押

したて、過激派の朝臣を結集して非常な勢いをしめしはじめてきている。

容保にしても、幕府が、あまりにも外国列強に対して弱腰なことを、かねてから苦々しく思っていたことは事実だ。

「横浜、長崎、箱館の三港のみを外国にひらき、その他の開港要求は拒絶し、後に機を見て外国に出て行ってもらおうではないか」

という、しごく当然な容保の言葉を実現させるためにも、将軍上洛は一日も早いがよい。

この年の三月、将軍・家茂が入京してきた。

天皇は、この義弟にあたる徳川将軍をはじめて見て、

「立派な、よき将軍である」

と、もらされた。

家茂は十三歳のときに紀州家から迎えられ、十四代将軍となった。これには、ときの大老・井伊直弼派の支持と、水戸や薩摩などの大藩の反対と……つまり、幕府内の派閥と勢力のあらそいの中に将軍となった家茂だが、その聡明で温厚な性格は、誰の目にもあきらかであるし、

「何とか世のさわぎがおさまらぬものか……」

と、家茂の純白で、ひたむきな態度には一点の駆け引きもない。

こうして、天皇――将軍――守護職による連帯感は、幕府側にとって非常に強力なものとなったわけであるが、長州藩を主力とする勤王過激派の陰謀や暴動は、

「こうなっては無理矢理にも天皇を長州へおつれ申し、いっきに倒幕の軍をおこそう」などという、おどろくべき計画さえすすめはじめる。

孝明天皇も、

「長州のやることを信ずることはできぬ」

といわれ、あきらかに公武合体して難局にあたろうという決意をかためられた。

そして……。

ついに薩摩藩とむすんだ幕府が長州の勢力を京都から追いはらってしまうことになる。

そこまではよいのだが、激動し奔流する革命の過去にあっては、〔持続の美徳〕も〔改良への忍耐〕も無縁のものであった。

さらに、三年後の慶応二年には、二度目の入京をした家茂（二十一歳）が急死し、同年十二月には孝明天皇（三十六歳）も崩御された。

松平容保が意図し、促進し、すべてをかけた公（天皇）と武（将軍）の協力は、ここに破れた。

天皇の死が、勤王派による暗殺だとの評判がひろまったほど、すさまじい時代であった。

薩摩藩が旧敵の長州と手をむすんだ。

家茂の後、十五代将軍位についたのは徳川慶喜だが、松平容保とこの徳川最後の将軍との間は、あまり、しっくりとはゆかなかったようだ。

慶喜は〔将軍後見職〕のころから、一命をかけても主張をつらぬき通すという強さがない。いわゆる〔朝令暮改〕の、目まぐるしく変る世のうごきに沿って、慶喜自身の心もあわただしく変るのである。

徳川慶喜を賢明な将軍と見る人びとなら、この彼の変転ぶりを〔新しい政治家〕として拍手をすることだろう。

そうした眼で見るのなら、松平容保は〔古い政治家〕ということになる。

ついに、

「政権を朝廷に返し、徳川家も一大名として新政府に奉公すべし」

と、なった。

しかし、

「ぜひにも徳川家を賊軍として徹底的に叩きつぶし、新しい時代と政権を生み出さねばならぬ」

という薩長を主軸とする勤王革命派の追求によって、幕府勢力は鳥羽伏見における惨憺たる敗戦を最後に、皇都を追い払われ、江戸へ逃げ帰った。

松平容保も将軍と共に江戸へもどり、慶応四年二月、会津へ帰って、将軍同様に、朝廷へ対し恭順の意を表明した。

容保の世子・松平喜徳が、米沢藩主・上杉斉憲へ送った親書には、会津藩の意が、簡潔ながら、あますところなくあらわれている。

「父・肥後守は戊年（文久二年）以来、公武合体に力をつくし、先帝（孝明天皇）の寵眷をかたじけのうし、病気の際には御親禱までなし給わりしに、去る一月三日の戦いは現在彼（薩長軍）より兵端をひらき、あまつさえ朝敵の汚名を受く。ねがわくば雪冤の労を懇請す」

というもので、事実を卒直にのべたものである。

つまり、朝廷へのとりなしを米沢藩にたのんだのだが、本来ならば、このことをもっともよく承知しているのは徳川将軍なのだ。

ところが、元将軍・慶喜は江戸城を捨てて、上野寛永寺へ入り、ひたすら恭順の意を表しており、会津藩のとりなしをするどころのさわぎではないのだ。

諸国大名は続々と官軍に投じ、米沢、会津をはじめ津軽、山形、秋田など東北の諸藩も、同盟して官軍との交渉にあたることになった。

しかし、官軍はきくものではない。

薩摩も長州も、京都における会津藩の実力をまざまざと見せつけられている。

会津の謹慎、恭順の心などには耳もかたむけず、三月中旬になると、薩長を主力とする官軍が仙台へ入って来た。

「仙台藩は会津討伐の先鋒をつとめよ」

と、いうのだ。

仙台も厭だが、仕方がない。

藩主・伊達慶邦は四月十一日に兵をひきいて白石城へ入り、会津の国境へせまった。

このとき、東北の地へ乗りこんで来た薩摩・長州両藩の軍は、官軍総督府の威名をふりかざし、横暴をきわめた。

これに対して諸藩の反抗も激発し、ついに官軍参謀・世良修蔵の暗殺事件となる。

こうして、下部の組織が互いに牽制し合い、争闘し合うものだから、かんじんの松平容保や伊達慶邦の真意というものが、官軍上層部の、たとえば西郷隆盛、板垣退助のような人物の耳へもとどきにくいこととなり、世良の暗殺によって東北平定の官軍総督・九条道孝や参謀・大山格之助などの、

「なんとか、会津と仙台の両中将を京都にでも引きとり、東北のさわぎがおさまるのを待たせよう」

という心も、そのまま容保のもとへはとどかぬことになったし、とどいたにしても、これを信頼するだけの根拠は会津藩に失われていたろう。

この間の事情を、いちいちのべていては切りがないことになる。

互いに互いの実態を知らず、疑惑をふかめ合って、ついに戦火を見るに至ることは、現代でもベトナム戦争ひとつを見てもわかることであって、この点、人間のすることには昔も今も変りがないのである。

松平容保は、ついに抗戦の決意をかためざるを得なかった。

会津抗戦ときいて、江戸を脱走した幕臣や、諸藩脱走の士が続々と会津へあつまり、若松城下では、

「都見たくば此処までござれ、今に会津が江戸となる」

などという唄が流行したそうだ。

このときにあたり、会津藩が藩士一同に対して布告した内容を記しておこう。

少し長くなるが、維新戦争における会津の立場というものを明確につたえているからだ。

「……嘉永六年以来、外国軍艦航海して猖獗をほしいままにし、物価の高騰、日に益し月にはなはだしく、ついに人心混乱するに至る。その原因をたずぬれば、これみな幕府の失体よりおこる。

天皇ふかくこれを憂悶し給い、ゆえに何となく公武の間、一和せざるの勢いあり。

幕府、その非をさとり、旧弊をあらため遵奉の典をおこし、衆に選て、我公（容保）をもって京都守護の職に任じ給う。（中略）我公の上京するや、精忠をもってはたらき給うにより、天皇ふかく依頼し給い、将軍（家茂）の愛寵また厚し。

以来、六年の間、誠忠ついに変らず、天皇叡感のあまり幾度となく宸翰を下したまわり、我公かつて病するとき、かたじけなくも、みずから内侍所において祈願し給うにいたる。その寵遇、実に無比類というべし。

（中略）元来、長州は先年より外は尊王攘夷に託して実は不軌の志をいだき、皇室をさそい、幕

府をあざむき、その罪枚挙すべからず。甲子七月、ついに大兵をあげて皇居を襲い、銃丸は御所の屋根におよぶ。その逆乱の罪、誅してなおあまりあり。

天皇はお怒りになり、将軍またこれを悪むといえども、ついに寛典にしたがい、官位を脱剝し領地をけずるも、長州は尚その命をきかず。

しかるに天皇（孝明）崩御、将軍（家茂）薨去し、国家多難のときに逢い、すべからく兵を解くを知り、姦邪、そのすきに乗じて、もったいなくも幼主（明治天皇）の明をくらましたてまつり、事に託して長州の罪をゆるし官位旧に復し、先帝の勅勘をこうむる公卿を用い、陪臣をして参与せしめ、将軍、我公など、みな其職を免じ、正邪地を易え、忠姦ところを換うるに至る。これ先帝（孝明）の意にあらざるのみならず、また今上（明治）の意にあらざるは明白なり。嗚呼、一杯の土いまだ乾かざるに、今上をして父の道をあらためしむること、大悪不道の至りというべし。

（中略）我公多年の誠忠はむなしく水の泡となり、残念というもおろかなることならずや。禁庭に対し弓を引くことは決してなすべからずといえども、姦邪の徒、もしも綸旨を矯めて兵を加うることあらば関東と力を合せ義兵をあげて君側の姦悪をのぞかざることを得ず」

およそ、こうしたものだが、この布告を藩士たちに暗誦せしめたのである。

この布告は、依然として旧幕府を中心にした旧弊思想にいろどられているという者もいる。だが、新時代が来て、旧幕府政権にとって替ったのは、薩長を主体とする藩閥にすぎなかった

ではないか、と、反論する者もいる。

どちらにしても時代の大きな流れは、必然〔近代日本〕の歩みをうながしたことだろうと筆者は思う。

かくて会津藩は、二十余藩よりなる東軍の主軸となり、官軍を迎え撃つことになった。

越後の諸藩とも手をむすんだ。

やがて、越後の関門、長岡藩がやぶれ、新発田藩が官軍に降伏し、平、相馬、三春、二本松の諸藩もあるいは破れ、あるいは下った。

八月下旬になると、官軍は怒濤のように会津・若松へ攻めかけて来た。

会津藩の抗戦については、それだけで一冊の書物になるほどの悲痛な挿話にみちている。

老人も、小供も、女性も戦った。

藩祖・保科正之以来の伝統が悲惨な開花をしたというのも、このことだ。

将軍と大名、大名と家臣という旧幕体制の中で、上下一致した〔義〕の発揮がなされたわけで、おそらく現代人の眼から見れば、ばかばかしいことであろう。

ついに若松城が包囲された。

官軍参謀・板垣退助は、米沢藩をもって松平容保に帰順をすすめた。

米沢藩いわく。

「われわれは、薩長の私兵に抗戦するために起こったのであるが、いまや薩長の私兵と考えてい

たものは全くの官軍にして、仁和寺宮は、すでに錦旗をすすめて東寺に入り給うときく。われら、もとより王師に対抗すべき存念なし、ゆえに同盟を脱して官軍に降りしなり。貴藩、この意を諒とし、開城せられんことをのぞむ。尚、君公（容保）御父子の御存命はもちろん、減禄処分にとどまるべし」

この書状を見て、容保は苦笑し、

「くだくだと説をなさずとも、もはや力つきたゆえ戦をやめようではないかと、申してくれたほうが、まだしも気が休まる」

とつぶやいたという。

戦記に、こうある。

「……城兵死するもの相つぎ、糧食は竭き、弾丸無し。このとき、ようやく初冬の候、北風冷雨肌を刺し、婦女子は飢えんとす。士卒は瘡痍に苦しみ、城外の領民は、みな山野をさまよい、家を焼かれ財をうばわれ、尚いまだ城下の戦止まざるをもって帰ることを得ず……」

ゆえに容保も決意せざるを得なかった。

「これだけやれば、もはやよかろう。今より帰順し聖断をあおげば死すとも恥にはなるまい」

ひとえに容保の抗戦は、

「先帝の信頼をうけて職を奉じていたものが、なぜ今上天皇の軍によって賊の汚名を着なくてはならないのか……」

この一事にある。

これは、いうまでもなく年少の明治天皇の知るところではなく、薩長二藩に対する反抗であり、正義へのつとめでもあった。

旧暦九月十九日、容保は、手代木直右衛門、秋月悌次郎ほか一名を塩川へやり、米沢藩を頼って降伏の意をつたえた。

それでもなお、官軍は、

「敵は詭計をもって我兵気をゆるやかにせしめ、機に乗じて突撃せんとしておるのだ」

などといい、なおも砲撃をつづけた。

これまでの会津の猛戦、知るべしである。

二十三日、午前十時。

松平容保は白の降旗を城の大手門前にかかげた。

当時、白布はすでに繃帯に使用しつくしていたので、ようやく白の小布片を何十枚も縫い合せ、三旒の白旗を得たという。

かくて、両軍の砲撃が、ようやく止んだ。

正午になると、官軍から軍監として中村半次郎（桐野利秋）ほかが兵をひきい、大手門外にもうけられた城受け渡しの式場へ入って来た。

このときの官軍の態度は、軍監の指揮よろしきをもって整然たるものがあり、式を終えた容保

父子が輿に乗せられて官軍陣営へ連れ去られるときも、恥をうけるようなことはなかった。

容保父子は、薩摩・土佐の小隊にまもられ、滝沢村・妙国寺へ入った。

沿道において官軍の罵倒をうけたが、容保は顔色ひとつ変えずに沈黙していた。

このときまで、若松城内にこもっていた会津勢は、老幼婦女子をふくめ、五千二百余人。小銃弾薬は二万二千発を残していた。

二十四日、城は官軍に接収せられた。

ここに、藩祖以来二百二十余年にわたった会津藩はほろびたのである。

松平容保は江戸へ送られると、鳥取藩邸へあずけられたが、監視は厳重をきわめた。のち紀州邸へ移ってから待遇もよくなり、庭内の散歩もゆるされたらしい。

二年後、容保は死一等を減ぜられ、反逆の首謀者三名を出すべしと命ぜられた。

「首謀者は躬でござる」

と、容保はいったが、きき入れるものではない。

結局、家老の席順により、田中土佐、神保内蔵助、萱野権兵衛が首謀者とされたが、生き残っているのは萱野のみであった。萱野は平然としてこれを受けた。

松平容保は、其後、日光東照宮の宮司に奉職したりしたが、廃官となるや会津に帰り、若松市の聯隊前の長屋に住み、零落のままに身をまかせ、明治三十八年に七十七歳の生涯を終えた。

新選組敗走記

「新選組」の成りたちについて、くだくだしく書きのべる必要もあるまい。また、徳川十五代将軍の慶喜の政権返上から、京坂の地における幕府勢力の江戸への敗走について書くことも、この稿には必要ないことと思われる。

伏見鳥羽の戦争のとき、新選組の総勢・百六十余名という。

これが、江戸へついたときには、四十四名となっていた。

ざっと、次のようなものである。

局　長　近藤勇
副　長　土方歳三
副長助勤　永倉新八、原田佐之助、尾形俊太郎、斎藤一、沖田総司
調　役　大石鍬次郎、川村隼人
会計方　中村玄道、他五名

伍　長　島田魁、他八名
平隊士　西岡万助、野村利三郎、他十八名

一同は、大名小路の鳥居丹後守屋敷を宿舎として、これに入った。
近藤のみは、旧臘、刺客からうけた鉄砲傷を治療するため、神田和泉橋にあった幕府の医学所へ、入院をした。
ときに、一月二十日であった。
これより七日後の一月二十七日――。
京都朝廷では、徳川征討軍の編成が発表された。
総督・有栖川宮熾仁親王、参謀長・西郷吉之助以下総勢五万人余といわれる。
四国・中国・九州の大名たちの多くは、この征討軍――すなわち〔官軍〕に加わり、軍列は三道に別れて江戸へ発した。
これが二月十六日だ。
これより四日前の二月十二日の早朝に、前将軍・徳川慶喜は、江戸城を出て、上野寛永寺内・大慈院へ移った。
官軍に対して、恭順したわけである。
本来なら、これでカタがついたということだ。

慶喜は、幕臣・勝安房守の恭順政策にすべてをゆだねたわけだが、幕臣の中にはおさまらぬものが、ずいぶんといる。

幕府に忠誠を誓って働きつづけてきた会津藩主・松平容保は、領国へ帰って、東北地方の諸大名たちによびかけ〔奥羽列藩同盟〕というものをむすび、官軍を迎え撃つことになった。

江戸では、上野山内にこもった彰義隊の反抗があって、慶喜が水戸へ落ちたあとは、江戸から東北、さらに北海道へかけて、旧幕府の勢力が敗走して行くことになる。

慶喜が、まだ寛永寺に引きこもっていた三月一日に、新選組は〔甲陽鎮撫隊〕とあらため、甲府へ向って江戸を発した。

「戦いは、これからだよ」

と、近藤は意気天をつくばかりで、

「甲府の城を我々で守り、ここへ将軍家を移しまいらせようと思う」

などと言った。

このとき、近藤は〔若年寄格〕土方は〔寄合席格〕という、まるで、かつての大名のような身分を幕府からあたえられている。

幕府といっても、将軍は、すでに政権を返上しているのだ。本来なら、こんな馬鹿げたことは

ないのだが、幕臣の中でも、返上したのは慶喜が勝手にしたことで、

「官軍を迎え撃つ」

という主戦論もつよい。

勝安房が、こうした混乱をどうにかまとめて江戸城明け渡しにもってゆくまでの経路には、まるで蜂の巣を突ついたような騒ぎもおきたものだ。

それにしても、甲州へ進発した新選組は、あわれである。

夢にまで見た幕臣としての立身出世――しかも大名なみの出世を、近藤は意気揚々とうけとめ、胸を張って出陣したのだ。

形は違うが、今度の大戦の〔終戦進級〕の悲喜劇に一寸似ているではないか。筆者も、降伏がきまったのに〔海軍一等兵曹〕へ進級させてやると告げられたときには、あきれて物も言えなかったものだ。

「近藤たちが江戸にいては、おれのすることの邪魔になる。まるで爆裂弾を抱えているようなものだからな」

と、勝安房は、山岡鉄太郎に言った。

勝は、一兵の血も流さず、江戸の町を戦火に包ませることなく、官軍に接収せしめようとしている。

京洛の地において、勤王運動撲滅のため鬼神のような働きをした新選組を江戸におくことは危

険きわまりないことだ。

「大勢はいかんともしがたい。彼らも東山道を下る官軍に打ち破られてしまうだろうが、与えるものだけは与えてやれ」

というので、軍用金五千両、大砲二門、小銃五百挺を、勝が出してやった。

三月四日――。

甲州・勝沼についた新選組は、早くも甲府城が官軍の手に落ちていることを知った。

このとき、新選組は江戸で新たに募集した新隊士を加え総勢百二十一人であった。もっとも進軍の途中で脱走したものも大分いたらしい。

「これでは、とてもダメだ。城を乗取られた上何十倍もの敵に刃向うというのは無茶すぎる」

と言い出す隊士も出てくる始末で、さすがの近藤も弱った。

「ともかく騙しておけ。会津の侍四百名が明朝には救援に来る筈だと言っておけ」

近藤は、永倉・原田の両士をよんで言い、すぐさま、土方歳三に、

「神奈川の菜葉隊の応援を乞うて来てくれんか」

と、たのんだ。菜葉隊は幕臣部隊である。土方は、すぐに騎馬で勝沼を出発した。

近藤勇は大砲二門を据え、近くの農民たちから薪を供出させて、山の中腹や街道筋に篝火をたき、こっちもこれだけの大部隊がいるのだぞ、というところを見せたものだ。

しかし駄目であった。

戦ってみると三千対百では話にならない。
一日にして敗れ、またも江戸へ逃げ帰った。

江戸・本所二ツ目にある大久保主膳正という旗本の屋敷が、新選組残党の宿所である。
このとき、永倉・原田以下わずかに十名。
甲州の戦いで逃げ出すときは、別れ別れに敵中を突破してきたので、まだ近藤は顔を見せていない。
甲州から神奈川へ飛んだ土方歳三も、まだあらわれない。
「こうなれば仕方がない、会津へ行こう。会津藩と共に戦うのだ」
と、永倉が言い出し、一同、これに賛成した。
新選組は、永い間〔会津藩御預り〕という名目で、京都における決死の働きは、ほとんど〔京都守護職〕をつとめていた会津藩と歩調をそろえてやってきたものだ。
ここで、永倉は〔幕府典医頭〕をつとめていた松本良順を今戸八幡近くの屋敷にたずねて、軍用金三百両を借りうけた。
そのうちに、甲州から逃げて来た隊士も、ぽつぽつ集まり、総勢二十四名、いずれも、
「会津へ行って戦いたい」

と言う。

「近藤が医学所へ帰って来たよ」

松本良順が知らせてくれたので、同志は勢揃えして、医学所におもむいた。

「こういうわけですから、近藤さんも我々と行を共にされてはいかがですか」

永倉が言うと、近藤勇は、

「みなは、新選組の局長が誰であるかを忘れたのか。おぬしたちが勝手にきめ、局長のわしにはかるなどとは筋違いだが……しかし、これからはすべて、わしの采配に従うのなら同意してもよい」

などと威張っている。

永倉新八も原田佐之助も、顔をしかめた。

近藤はよい人間なのだが、永倉に言わせると、

「成り上り者だよ」

と言うことになる。

むかし、牛込の近藤道場で、永倉も原田も勇と共に寝起きして、剣術の稽古に夢中だったものだ。

いえば、古い同志ということなのである。

一剣をもって天下の風雲に乗じ働きたいというので、永倉たちも近藤と共に、幕府が募集した

〈浪士隊〉に加わり、京へのぼった。

この浪士隊が新選組となったのだ。

その新選組の局長に近藤勇を押したてたのも、永倉や原田、土方など昔からの剣術仲間の力ぞえがあったからだと、永倉たちは思っている。

ところが、新選組の威勢が京都にひそむ勤王志士たちの恐怖するところとなり、次第に羽振りがよくなるにつれて、どうも近藤勇の言動、すこぶる怪しくなってきた。

朝、屯所へ出た永倉たちが、挨拶の頭を下げると、

「うむ……」

近藤の頭はこれにこたえて下るどころか、ぐぐっと反り返ってしまうのだ。

(お前らは、おれの家来なんだぞ)

というところが、あきらかに見える。

これで、いろいろともめ事も起きたものだが、いま、これだけの敗残の身の上となっても、まだ近藤が威張りくさっているので、

「これでは、いくら話しても無駄である。我々は、あんたの家来になるつもりはない」

ついに決裂をした。

「勝手にさっしゃい」

青ざめつつも、近藤は傲然たるものであった。

「何だ、くそ。武州の百姓上りがいい気になりやァがって――」

と、伊予・松山の若党あがりだという原田佐之助なぞは、医学所を出ると、しきりにつばを吐きちらし、近藤をののしった。

こうなれば、同じ武州多摩の生れで、子供のときから弟のように目をかけてやってきた副長の土方歳三のみが近藤のたよりである。

二人は、下総・流山へおもむき、ここで同志をあつめた。

同じように江戸を脱走した幕臣やら浮浪人なども交えて百二、三十人は集まったろうか。

こんなことでは、結局、どうにもならない。たちまち官軍にかこまれ、近藤は流山の本営を出て、みずから官軍に捕えられた。

このときの近藤の態度は、いささかも悪びれず、

「錦旗に刃向うことはできませぬ。なれど、官軍とは、そもそも朝廷の兵か、それとも薩長の兵か――拙者にはわかり申さぬ」

と、官軍参謀・香川敬三に向って堂々と言ったという。

幕府方も薩長二藩に負けず、勤王の精神をもっている。つまるところは、この戦いは〔政権争奪〕の戦いにすぎぬ。それなのに、どうしてそちらが〔官軍〕で、こちらが〔賊軍〕なのか――というのである。

香川も笑って、近藤を板橋の官軍本営へ送るについては、よく世話をした。

四月二十五日――。

近藤勇は板橋の刑場へ引き出されて首を斬られた。

近藤、ときに三十五歳。

近藤と土方は、どこで別れたのか、よくわからぬ。

流山へついてから、二人の間に議論があって、近藤が捕えられるより先に、土方は流山を出て、会津へ向ったともいわれている。このときの二人のそばには、後年生き残った新選組古参の隊士が一人もついていなかったので、くわしい資料は残されていない。

さて――。

近藤・土方と別れた永倉新八と原田佐之助は〔精鋭隊〕というものを組織した。

前に新選組にいたこともある連中や諸藩の脱走者、旗本など約六十名ほどになった。

隊長は芳賀宜道（はがぎどう）といって、これは、もと永倉と同じ松前藩の浪人で市川宇八郎といい、幕臣・芳賀家を継いだ男である。

永倉とは若いころからの仲よしで、二人して武者修行に出かけ、下総かどこかの博奕うちを相手に、大喧嘩をやったこともあった。

副長は、永倉と原田だ。

和田倉門の会津屋敷跡へ屯営をおいた。
すると、幕府の歩兵三百を預かっている米田圭一郎という幕臣が、
「わしの方と一緒にならぬか」
とやって来た。
もとより拒むところではない。
そうこうするうち、四月十日に江戸城は、無血開城となり、官軍の手中に帰してしまう。
「おのれ！」
激怒したが、どうにもならない。
「上野の山の彰義隊に加わるのもいいが、二千かそこらの人数では、とても太刀打ちは出来ない。やはり会津だ。もともと、おれたちは会津御預りの新選組生き残りなんだから、会津へ行って死ねば本望だ」
と、永倉が言い出した。江戸にいる幕臣たちも、どんどん会津へ脱走して行く。
精鋭隊も十一日の朝、江戸を発した。
この途中、原田佐之助が一行と別れた。
京都へ残してきた妻子への愛着にひかされ辞をもうけて江戸へ引返したが、京へもどることも出来ず、ついに彰義隊へ加わり、五月十五日の上野戦争に戦死をとげたといわれる。
が、しかし、原田佐之助は生き残っていたようだ。

明治三十九年十二月六日の夜。

愛媛県・松山市の〔伊予・農業銀行〕につとめる大原丑太郎氏の自宅（市外、温泉郷・石井村）へおとずれた老人があった。

この老人こそ、原田で、大原氏は原田の実弟にあたる。

名のられて、大原老人も、びっくりした。

「兄さんは、死んだのじゃなかったので？」

「何、死んだことにしたのだ。何しろ、京都で、あれだけ勤王方の首をはねたわしじゃもの。見つかったら、いくつ首があってもたりはせぬわい」

このとき、原田佐之助は六十三歳。

老人とは思えぬ堂々たる体軀を上等の洋服とマントに包んでいたという。

「上野の戦争のどさくさまぎれに逃げたのじゃが……何せ、官軍でいっぱいの東海道を上って京都へ行き、女房子供に会うというわけにもいかなくてなあ」

越後の、どこかの港から満州へ逃げ、そこで馬賊をやっているというのだ。

「日清日露の戦争には、おれも、これで日本軍のために、ひどく骨を折って、ひそかに働いたものさ。天皇陛下のためにのう。これでまあ、罪ほろぼしをしたというわけじゃ」

一夜、語りあかし、翌朝には「帰る」と言い出した。

「どこへ!?」

と大原老人が訊くと、

「どこへ？　……満州よりほかに、わしの帰るところがあるかいな」

こう言って、原田は洋傘をさし鞄をさげ、ひとり松山を去った。

以後は、消息不明である。

このときの原田佐之助訪問を、後に、大原老人は、原田の妻・まさ女の遠縁にあたる渡部某に会ったとき、語ってきかせたそうだ。

話を〔精鋭隊〕へ戻そう。

精鋭隊は、岩井を経て、小山の官軍を破り十九日に鹿沼宿（栃木県）へついた。

そこへ、幕兵をひきいた幕臣・大鳥圭介が会津藩・秋月悌次郎の一隊と合流してあらわれ、明朝、宇都宮をやっつけるという。

「よろしい。こっちも一緒に――」

ということになり、三隊合流して、宇都宮城へ攻めかけた。

このときの永倉新八の奮戦、目ざましいものがあったと伝えられる。宇都宮の城兵は、すでに官軍に降伏していたが、猛烈な攻撃に会って、ひとたまりもなく逃げ出し、三千両の軍用金まで奪われてしまった。

永倉は、このうち二千両を大鳥圭介にわたし、千両を〔精鋭隊〕の軍用金にあてた。

永倉たちは、幕田ケ原へ陣どり、壬生（栃木県）に逃げた宇都宮兵を追撃しようとしたが、壬

生の城には官軍も入っている。

戦ったが、駄目だ。

「逃げろ」

というので、宇都宮から日光街道へ出て、今市へ退いた。

この今市を中心にして、攻めて来る官軍を迎え撃ち、精鋭隊は大いに戦ったものだ。

この方面へ来た官軍は、鍋島藩と土佐藩が主隊となった部隊である。

この戦いで、会津の博徒たち二十名ほどが今市と高徳のあたりにひそんでいて、やって来る鍋島部隊の隊長・鍋島嘉平の首を斬ってしまったということもあった。

とにかく、勝った。

官軍は、兵糧や火砲・弾薬を捨てて敗走した。

このとき、日光は官軍の手に落ちている。

徳川家康を祀った東照宮を官軍の手にゆだねておくことはできぬということになり、精鋭隊は、一度、会津へ行き、会津藩から援兵をもらって、日光襲撃をやろうということになった。

隊士たちを残しておき、永倉新八と芳賀宜道が馬を飛ばし、会津城下へ急いだ。

城下へ入ろうとしたが、官軍が若松城をかこんで、ひしひしとつめかけているので、どうにもならない。

これが、永倉と芳賀の運命の別れ道ということになった。

二人は、結局、江戸へ戻って来た。

引くも進むも、精鋭隊は、ばらばらになってしまったし、官軍は、会津をはじめ、東北諸藩の同盟を、政治的にも軍事的にも断ち切ってしまい、二人とも身のおきどころもなくなったからである。

九月二十三日、ついに、会津・若松城は官軍の手に帰した。これで東北も片づいたが、今度は北海道である。

八月十九日の夜。

〔東京〕とあらためられた江戸・品川の海から、旧幕府の軍艦八隻が、二千余の兵を乗せて、脱走した。

これをひきいるは、旧幕府・海軍総裁・榎本釜次郎（武揚）である。〔新政府〕の言うことは、どうしてもきけぬというわけであった。

この海軍は、途中房総半島沖で暴風雨に会い、各艦離散し、坐礁破壊する艦もあって二隻を失った。

十一月十一日、北海道・箱館（函館）へ到着した。

この途中、奥州を転戦していた新選組の土方歳三・野村利三郎らをはじめ、あの大鳥圭介も、

仙台湾へ入った榎本艦隊へ加わり、総勢二千五百余名となった。榎本らは、北海道を占領し、新政府をたてたものである。

幕臣として当然のことであったろう。

徳川慶喜は、我から進んで〔政権〕を朝廷に返上したのである。

このときには戦争が起きていたわけではない。だから将軍位を捨て、幕府を解体した徳川家は、薩摩や長州と同じ一個の大名として〔新政府〕に参加できるのが本当なのである。大義名分は見事にたっている。

なればこそ、慶喜も決意をして政権の座から下りたのだ。しかるに、勤王派は、あくまでも徳川の息の根をとめてしまおうとした。

これも当然といえようか——。

何しろ、戦国時代の再現となったわけであるから、新たに〔政権〕の座につくものは前の政権をつかんでいたものを徹底的に討ちほろぼしてしまわなくては安心出来ない。

口では〔勤王〕をとなえていても、実体はむかしと少しも変りがない。辛うじて西郷吉之助と勝安房守が力を合わせ、江戸を無血開城したことのみが、近代国家として第一歩をふみ出した、この〔明治維新〕という革命にふさわしいものであったといえよう。

北海道も、翌明治二年五月十八日——官軍の手に帰した。

降伏がきまってから、土方歳三は同志数名と共に官軍陣へ斬り込み、戦死をとげた。

このころ、永倉新八は、江戸の松前藩屋敷に潜伏をしていた。芳賀宜道は死んだ。もと幕臣で官軍の手先になって脱走した幕臣を捕えたりしていた藤野亦八郎というものと争い、藤野の部下に斬殺されたのである。藤野は、芳賀の妻の兄であったが、

「どうぞ、夫の敵を討って下さいまし」

と、芳賀の妻女が新八に言うのだ。

「よし」

永倉もうけ合ったが、外へ出ることも出来ない。官軍の探索がきびしい上に、永倉の新選組における剣名は天下に知られたものである。見つかったら最後だ。

「江戸においては危い。福山へ逃げろ」

と、松前藩家老の下国東七郎がすすめてくれたので、明治三年の春、永倉は、ひそかに江戸をぬけ出し、福山へ逃げた。

このころには、新政府は令を発し、

〔私心をもって人を殺すことはならぬ〕

などといっているが、だからといって気がゆるせるわけのものではない。

福山は、北海道の福山だ。松前藩の城下町だ。ここで、永倉は、藩医杉村松柏の娘・米子と結婚し、杉村善衛と名をあらためた。

明治十五年永倉は樺戸監獄の剣術師範となった。

もう、大手をふって歩ける新時代が来たのである。

十九年、辞職。

のち、東京へも来て剣術の道場をひらいたりしたが、結局は北海道へもどり、小樽市へ住みつき、大正四年一月五日、七十六歳の長寿をたもち、永眠した。

永倉新八は、自由になってから諸方を歩きまわり、近藤や土方の墓石を板橋刑場跡に建てたり、京都へおもむき、新選組時代に島原の芸者・小常に生ませた娘の磯子にめぐりあったりした。

永倉などは、新選組生き残りのうちでも、もっとも幸福な生涯を終えた人物だといってよいだろう。

生き残った隊士たちも、まだいるが、書きのべる余裕がない。

筆者は今年初夏、北海道へ遊んだ折に、永倉新八自筆の『英名録』というものを見ることができた。これは、永倉が明治になってから、諸方の剣道家と試合をした折、相手の人々に署名をしてもらった帳面である。

長さ二十センチ、巾十五センチほどの、小さいが部厚いもので、第一ページに、次のように記されてある。

神道無念流・岡田十松門人

旧会津藩御預・新選組副長助勤

永倉新八事　杉村義衛

「おれは、朝廷に弓をひいた賊軍なんかじゃァないのだ。おれは、京都の治安を守るため一剣をもって天朝のために働いたものなのだ」

という永倉の誇りが、この文字の中から、ひしひしと感じとれるような気がする。

明治元年の逆賊

小栗上野介忠順は、剛太郎とよばれていた幼年時代をかえり見て、

「父母も、また親類たちも、わしのいのちが三十……いや二十まで保てば上出来とおもうていたらしい。病気の絶え間もなく、痩せこけて老人のように萎びかけた青白い顔色で、癇癪ばかりたてていて、いや実に、小面憎い子供であったそうな」

などと、いっている。

だが、のちに疱瘡を患らい、激しい発熱のため死にかけたが、奇蹟的にたすかった。

そのかわり、病患の痕が、みにくい痘痕となり顔いちめんにのこった。

そして、この病気快癒をきっかけに、小栗忠順はめきめきと丈夫になり、以来、病気らしい病気をしたことがなかったといわれる。

「なれど、いかに食しても、躰に肉が乗らず、ために武術の稽古には層倍の骨が折れたものじゃ」

と、これも小栗の述懐である。

後年に彼が幕府代表の一人として、日米通商条約批准のため、アメリカへわたり、正使・副使などと共に米国高官をまじえて撮影した写真がいまも残っているが……。

額の大きく張り出た、いわゆる才槌頭をからげるようにし、うすい眉の下のくぼんだ両眼を凝と写真機に向けている小栗忠順の陰影のふかい風貌の中に、彼の才幹と〔負けぎらい〕の性格が、くっきりとにじみ出しているかのようにおもわれる。

こういう個性の強烈な人間の顔というものが時代と時代の変り目に呼吸することになると、どうしても只事ではすまぬ生涯を送ることになる。

栄光を得るか、悲劇の人となるか……。

小栗忠順の場合、それが後者にあたることはいうをまたない。

文政十年（一八二七）二月十二日。

小栗忠順は、江戸・駿河台の屋敷に生まれた。

同じ年に、薩摩の鹿児島城下で西郷隆盛が誕生している。

現代より、約百四十年ほど前のことだ。

父の小栗又一忠高は、御小姓組にあって二千五百石の大身旗本で、俗にいう〔おれきれき〕の中でも、小栗家はそれと知られた〔名家〕といってよい。

母は、先代・小栗忠清の長女でくに子という。

だから忠高は、幕臣・中川忠英の四男に生まれ、小栗家へ養子に入った人物なのである。

小栗家は、清和天皇の第六皇子・貞純親皇から出たことになってい、のちに源義国を経て三河の国へうつり、酒井邑に住したが、やがて近くの松平邑の豪族・松平信重に迎えられ、その邑長となった。

さらに数代を経て……。

小栗家の初代とされる人物は、松平信吉ということになろう。

信吉は、三河・岩津の城主として、筒針城主・小栗正重のむすめを妻とし、一子・忠吉をもうけた。

この忠吉、なにかのわけあって少年のころから母の実家の小栗家に生長し、小栗姓をつぎ、成人してから三河一帯の豪族の中でも世に知られた松平清康につかえた。

松平清康は、徳川家康の祖父にあたる。ゆえに、小栗家と徳川家との間には、まだ家康が誕生する前から深いつながりがあったわけで、譜代の中でも、まさに生えぬきの徳川の家来であった小栗家だから、これを旗本名門中の名門とよんでさしつかえない。

さて……。

四代目の小栗忠政となって、家康につかえ、主の家康が三河の一豪族から天下をつかみ取るまでの苦労を共にすることになる。

忠政は歴戦のたびに先鋒をつとめ、その剛勇無双は又となないものであり、又も一番の手柄をたてた、という意味をふくめ、徳川家康が、

「そちに、又一の名をあたえよう」

といった。

以来小栗家は、この名誉ある〔又一〕の名を代々継承することになる。

これだけの〔名門〕になると、下手な大名より羽振りもよく、にらみもきくし、いわゆる将軍股肱の臣というわけだが、小栗家十二代目の当主になるべく、上野介忠順が生まれたとき、徳川幕府は、ようやくに衰亡のきざしを見せはじめてきた。

当時、もっぱらロシアが日本の北方をおびやかしつづけている。

幕府も手をやき、千島・カラフト方面の防備をかため、北海道を中心基地として、ロシアの南進を必死に食いとめようとしていた。

幼年のころは病弱だった小栗忠順だが、

「このごろは何事にも、たゆみない出精いたしおるようじゃ。あばた面とひきかえにしても、剛太郎が丈夫になってくれたのは、何よりよろこばしい」

と、父の忠高が眼をほそめている。

少年の小栗忠順は、剣術を当代の名人・男谷信友にまなび、漢学を安積艮斎に、砲術、医術にまで手をのばすというエネルギッシュな勉強ぶりであって、

「あの痩せこけた躰で、よくもつづくものだ」

親類や知人たちが驚嘆したといわれている。

小栗忠順は、のちに妻となった道子の実家である建部家へ、よくあそびにやって来たが、建部の小者たちが、彼を見ると、

「また、じゃんこ（あばた）の若さまが来たぞ」

と、いった。

そのころ、小栗は十三、四歳の少年であったが、すでに喫煙の味をおぼえており、建部家の客間へ通るや、悠然として煙草入れを出し、銀の煙管をぬきとって大人びた様子で口にくわえ、煙草を吸いはじめる。

許嫁の道子は、当時、二歳か三歳の幼女で、この未来の妻をひざにのせ、あそび相手になってやりながら、小栗が煙管をひねくりまわしている姿をのぞき見て、

「とても少年とはおもえぬ。様子が、ぴたりと板についているわい。剛太郎殿は、いまにきっと、ひとかどの男になろう」

建部の父が瞠目したものだ。

このころから、日本は海外の動向に眼をひらかれはじめる。

洋学がさかんになり海防のことが切迫して来た。幕府が、進歩主義者のうごきに弾圧を加える。

天保の大飢饉というものがほとんど全国的に、長期にわたってつづきにつづく。

大坂で、大塩平八郎が乱を起したり、諸国に窮民が蜂起したり、民情騒然。国を閉ざして外国との交易をゆるさず、只もう〔米〕を主体にした国の経済と民政は、混乱の極に達する。

幕府は、これらの不安定な国情の中で、疲労の度を急速に早めていった。

こうした中に、十七歳になった小栗忠順は将軍・家慶に目見得をゆるされ、小栗の当主たるべきことを認知せられた。

以来、忠順の幕臣としての地位は順調にたもたれ、しかるべく昇進の階段をのぼって行くことになるのだが、彼が政局の檜舞台へ登場するまでには、尚、十五年の歳月を待たねばならない。

嘉永六年（一八五三）六月。

ペリー提督ひきいるアメリカ軍艦四隻が江戸湾へ来航、日本へ開港・交易をせまり、ここに〔鎖国〕の夢は打ち破られることになる。

〔鎖国〕と徳川政権の存続とは、二百数十年にわたり、密接な関係を有しつつ歩調をそろえて来た。

中国・オランダ以外の外国との交易および日本人の海外渡航をきびしく禁じてきた幕府の意図は種々、複雑な経緯と理由とを内蔵しているが、何よりも幕府は海外文明の渡来が諸国大名に影

響するのをおそれた。日本の国以外に別の世界があり、そこには別の文明、政体がある。この実情を諸大名や国民に知らしめることは、必然、幕府政治への批判をまねくことになろう。

さらに……。

海外との交易を諸大名にゆるせば、いうまでもなく大名たちの財力はゆたかなものになるであろうし、そうなれば一種の独裁政権たる幕府の、もっともおそれている〔事態〕が発生しかねない。

だから、アメリカ艦隊が、おそるべき武力と、科学文明を基盤とした威圧をもって開港・交易をせまったとき、幕府の困惑と狼狽は絶頂に達した。

しかし、とても抵抗できるものではない。

幕府は、ついに外国との通商条約へふみきったが、これを契機にして、皮肉なことに、〔尊王攘夷〕のスローガンのもとに、日本には、激烈な革命運動の火の手があがることになった。

彦根三十五万石の藩主・井伊直弼が大老に就任して幕政を一手に牛耳り、内外の事態収拾を強引におこなおうとし、京都を中心に展開されつつあった勤王派を弾圧したのが〔安政の大獄〕である。

本稿で、このあたりへふれている余裕はない。

先へすすもう。

小栗上野介忠順の才幹に、先ず眼をつけたのが井伊大老であった。

安政六年（一八五九）九月十三日……。

小栗は、江戸城内・芙蓉の間へ呼び出され、老中列座の上で、井伊から、

「米国との通商条約締結のため、彼国へ差しつかわさる」と、命ぜられた。

正使は新見豊前守。副使は村垣淡路守で、小栗忠順は目付役として諸般監察の任務を果すことになったわけだ。

ときに、小栗は三十三歳のはたらきざかりであり、井伊は特に、小栗の権限を大きなものとしてくれ、

「この際、アメリカ国の実態を出来得るかぎり、視察して来てもらいたい」

井伊大老は、別に小栗ひとりを呼んで密談し、機密費として相当な金を小栗にあたえたといわれる。

このとき、小栗忠順は、上州・群馬郡・権田村の名主・佐藤藤七を江戸へ呼びよせ、

「わしと共にアメリカへ行かぬか、どうじゃ」

と、問うた。

権田村一帯は、小栗家の領地であって、

「藤七は、わしが領地の束ねをなすものである。外国の文明を見ておくことは無駄でない。わしも、いまに上州のわが領地を実験の場処として、いろいろなことをしてみたい」

これが、小栗の意向であった。

おどろいた佐藤藤七も、これをきいて非常に感動をし、
「ぜひにもおつれ下さいますよう」
その場で承知をした。
この佐藤藤七、後年に小栗忠順へ対し、厭な一役を演ずることになる。

年が明けて安政七年（一八六〇）一月十八日。
小栗は、正使以下六十余名の人々と共に、築地沖に停泊中の米艦・ポーハタン号へ乗組み、アメリカへ出発した。後年、維新動乱の最後的な場面に、小栗と対決する勝海舟が、日本艦・咸臨丸に乗りこみ、使節一行に随行している。
一行は二月中旬にハワイへ到着し、ホノルルにおいてハワイ国王に謁見。三月九日にサンフランシスコへ入港した。
この数日前、日本では……。
大老・井伊直弼が、桜田門外に水戸浪士の襲撃をうけ、暗殺されているのだが、むろん使節一行はこれを知らぬ。
使節一行は、サンフランシスコで大歓迎をうけた。
意外に友好的なアメリカ側の空気を見とどけて、使節たちも、

「開港を恐れすぎていたようだ」

と、思いはじめた。

ワシントンに於て、米国大統領・ブキャナンとの間に通商条約の調印をすませた一行は、その後、米国各地の視察旅行へ出発した。

四月二十三日。

一行はフィラデルフィヤに到着し、ここで米国新聞により、はじめて桜田門外の異変を知った。

「まさか……？」

一行も、小栗も半信半疑で、

「大老の行列を、たとえ浪士どもが襲ったとしても、大老の駕籠わきへ近づくことはなるまい」

幕府は、井伊大老の死を秘密にしていたので、新聞の記事には大老遭難のことのみがのせられ、死亡したとは書いていない。

小栗は、大老の死をほとんど予期していなかった。

ところが……。

アメリカから帰朝の途次、一行の船が香港碇泊中に、折から、日本の長崎にいたトンクル・キュシュスという外国人が香港へ帰りつき、彼の口から、大老暗殺の事実であることを一行は知らされたのである。

小栗忠順は、これをきいて激昂しつつ、従者に、こうもらしている。

「なんというばかげたことが起きたものか……いまこのとき、日本人同士が殺し合うてどうなるのだ、一時も早く外国の文明に追いつくためには、皆々が御公儀をたすけ、ちからを合せて事に当らねばならぬというに……」

この「御公儀をたすけて……」という一語に、あくまでも徳川将軍の忠実な臣下であろうとする小栗の〔血〕が如実にしめされている。

ここが、勝海舟とちがうところなのだ。

勝海舟は、同じ幕臣でも俗に〔御家人〕とよばれた、わずかに四十石どりの貧乏な家に生まれ、小栗のように先祖伝来の名家の〔血〕を受けついではいない。

勝の父・小吉の生家である男谷家にしても、金貸しで産をなした海舟の曽祖父が金で〔御家人株〕を買ったものである。

だから、勝海舟という人物には、名門の家柄にしみつき、つきまとっている徳川の忠臣という観念が非常にうすく、小栗にくらべると何事にも自由な思想と行動力が発揚されることになる。

腐臭ただよう幕府の官僚政治が、勝のような男の実力を思いきってつかいこなすことは到底のぞみ得ぬことである。

そして、勝自身も、こうした幕府の衰弱に愛想をつかしてしまうことになる。

見得と権力のための複雑な慣例と派閥との争いとが、内外ともに国家の難局へ当面した幕府の

政治生命をおとろえさせてゆくのだ。

小栗忠順は、帰朝以後、井伊大老という強力なバック・アップを失ったため、その役職も目まぐるしいばかりの変転を見せることになる。

万延元年に、三十四歳で外国奉行に任じたが、すぐに解任となり、以後の約八年間に、小栗は、小姓組出頭・勘定奉行勝手方・勘定奉行（兼）歩兵奉行。

さらに陸軍奉行から再び勘定奉行勝手方へもどされ、かと思うと、突然軍艦奉行をつとめさせられたりしている。

これは約二年間をつとめたが、次にはまた勘定奉行勝手方へまわされている。

勘定奉行は、いまでいう大蔵大臣のことである。

幕府財政が危急を告げると、すぐに小栗の手腕が必要となったらしい。それが、彼のあわただしい任免表からはっきりと看取されるではないか。

慶応二年（一八六六）八月。

小栗は四十歳で、勘定奉行（兼）海軍奉行に就任した。

これが彼の最後の役職となったわけだが、このときほど、小栗が手腕をふるった時期はなかったろうと思われる。

小栗忠順の自説を曲げぬ硬骨の勤務ぶりは、幕府首脳部が変るたびに、憎まれたり遠ざけられたりした。

だからといって、小栗の才能を埋もれさせてしまうには、あまりにも当時の幕府に人材がなく、急変がおこり、政治体制がみだれるたびに、またも、

「小栗を……」

と、いうことになるのであった。

小栗が、いかに幕府にとってかけがえのない男であったか知れよう。

小栗はアメリカでの見聞により、

「一時も早く、わが海軍を育て、強化せねばならぬ」

と、断じた。

横須賀に海軍工廠を開設したのも彼であったし、砲兵器の製造、船舶の建造などについても、

「わしは、いつ御役を辞めさせられるやも知れぬのだから……」

といい、役職に在る期間を最も有効に、敏速に利用してはたらきぬいたものである。

小栗が、日本最初の近代的な陸海軍をつくりあげた人物として高く買われているのもこのためなのだが、まず、当時の幕府高官としては、めまぐるしく変転する政局の中で彼は立派な仕事をやってのけた人物といってよかろうと思う。

勘定奉行をしていたときのことであるが……。

あるとき、江戸城中において、将軍や老中列座の席上で、小栗が来年度の予算と今年度の国費精算の書類を提出し、これを読みあげることになった。

これは、当時の慣例である。

しかし、小栗は、

「それがし、目下多忙をきわめおりますれば、書類を読みあぐるひまがありませぬ」

と、いいはなった。

老中のだれかが「それは慣例をやぶることになる」と、文句をつけるや、小栗は苦笑をもらしつつ、

「皆々様が、この書類をお読み下さればよいのでござる。このように、こみ入った書類を、いちいち声を出して読みあぐるなどというは悪習にすぎませぬ。そもそも時間のむだというもので、たとえ、それがしが読みあげたところで、皆々様のあたまの中へは入りかねましょう」

書類をおき、さっさと退出してしまった。

幕府要人たちが小栗をきらうのは、こうした事例がいくらもあったからで、しかし尚、いざとなると、

「やはり小栗に出てもらおう」

と、いうことになる。そこは生えぬきの名家の当主という〔家柄〕が、小栗にあったからであろう。

小栗には賄賂もきかない。

権勢も小栗に対しては効力がない。

小栗に目をかけられ、三井組の番頭から、明治時代の財界の大立物となった三野村利左衛門が、こういっている。

「この明治の世に、小栗さまが生きておられたなら、日本の財政のために、どれほどすばらしいはたらきをなされたろうか……思ってみただけでも目にうかぶようだ」

さらに福地源一郎（もと幕臣）も往年をかえり見て、

「あの当時、幕府があれだけの財源をどうして確保していたのか、いま考えてもふしぎでならぬ。小栗上野介の財政家としての手腕がなかったら、昔幕府はもっと早く、しかも内側からつぶれてしまっていたにちがいない」

たとえ、小栗びいきの眼で語っているにせよ、小栗の活躍ぶりはみとめないわけにはゆくまい。

さて……。

一時は、幕府も勤王派雄藩であった薩摩藩とむすび、勤王革命運動の大震源地たる長州藩を叩き、公武合体の歩をすすめはじめたが、やがて薩摩は変転して長州と握手し、ここに革命派待望の、

「薩長聯合」

が成立した。

徳川十五代将軍・慶喜は、時勢のいかんともしがたいのを察知し、みずから政権を朝廷に返上したが、勤王派は勅旨を仰ぎ、幕府征討軍を編成して江戸へ進軍をはじめる。

幕臣でありながら、薩長の勤王派にも多くの知己をもつ勝海舟が、いよいよ檜舞台へ登場することになった。

このとき、三野村利左衛門は両替商・三井家の大番頭であったが、小栗上野介忠順を駿河台邸へ訪問し、

「アメリカへお逃げ下さい。そのための手続き、お仕度の費用など、いのちにかえましても、私がととのえてごらんに入れます」

と、すすめた。

三野村は出羽の生まれで、小栗家へ奉公するうち、忠順にみとめられて学問を仕こまれ、三井組へ入ることを得ただけに、小栗忠順へは深い恩義を感じており、口先だけではなく、本当に船や金の用意をととのえる決意であった。

小栗は、

「逃げる理由がない」

と、一笑に附した。

三野村の不安と心配は、小栗忠順が最後まで勤王派へ抗戦の意志を捨てなかったことに在っ

た。官軍が江戸へ入って来たら、小栗だけは只事ではすまぬ、という予感がある。

小栗忠順の、幕府と将軍へ対する〔忠誠〕の性質とは、どのようなものであったろうか……。

かつて小栗は、勝海舟にこういったことがある。

「新しい時代を迎えるためには、日本の諸国を郡県の制度にあらためねばなるまい」

外国の政治・社会の制度を見て帰った小栗の、当時としては思いきった進歩的なことばである。

すると、勝は、

「そのお考えを実行にうつされるなれば、先ず幕府みずからが、その領国を天皇へ返上し、範をたれるべきでありましょう」

冷ややかに、こたえている。

小栗の主張する郡県制度は、あくまでも、徳川政権下にあるそれなのである。

小栗は、さらにいう。

「政権のあり方に変りはない。たとえ、徳川が政権を捨てても、これに代る政治勢力が抬頭することは火を見るよりもあきらかではないか。それならば、なぜ徳川にちからを貸し、無益な流血をこれ以上、見ることなく、一日も早く日本の政局を安定にみちびくべきではないのか」

奔流のような時勢の変転に、保守派が無感覚なのは、いつの時代でもそうなのだ。

ことに、慶応三年十月。

最後の将軍・徳川慶喜が、時勢のいかんともなしがたいのを察知し（そこには複雑をきわめた内情があったにせよ……）政治の大権を朝廷へ奉還したのち、薩長を主力とする勤王派は、

「よくもいさぎよくなされた。われわれと共に新しい国づくりをいたしましょう」

と、協力の意を表するとおもいのほか、あくまでも徳川家の社稷を叩きつぶすべく、鳥羽伏見の戦争へ事態を持ちこみ、次いで朝廷を牛耳り「徳川征討」の勅令をもとりつけてしまった。

小栗にいわせれば、ふんだり、蹴ったりである。

だから小栗は、官軍がいよいよ江戸城へせまりつつあるというとき、最後まで抗戦の決意をもち、将軍や幕閣の人々を説きふせようとした。

「海軍、陸軍ともに幕府は敵以上のちからをもっております。皆々方が共にちからを合せて敵に立ち向うならば、決して負けはとりませぬ。箱根の山々に迎え撃ち、海上から砲撃を加えれば、いかに薩長といえども手の出しようがござるまい」

これより先、小栗がフランスから軍費と軍艦を借りて、薩長勢力を破砕せんとした意図も、この彼の幕府と将軍への〔忠誠〕と表裏をなすものといえよう。

勝はむしろ、腐敗しきった幕府に見切りをつけ、薩長を主軸とする新勢力の抬頭に期待をかけていたといってよい。

そして幕府は、かつて重く用いなかった勝海舟に終戦処理をまかせざるを得ないことになる。

かくて勝は、この徳川幕府最後の幕に登場し、江戸無血開城の立役者となり、歴史の上に輝や

かしい栄光をになうことになる。

それにひきかえ、小栗上野介忠順は、どうか……。

四十余年にわたる小栗のすべては、江戸幕府と共に消滅し去った。

幕府の主宰者たる将軍が、ひたすら朝廷と〔官軍〕に恭順の意を表し、城も家来も捨てて、上野・寛永寺へみずから謹慎してしまったのでは、

「もはや、これまで」

小栗は、すべてをあきらめた。

幕臣・渋沢誠一郎などが、小栗を〔彰義隊〕へさそいこみ、江戸における旧幕側の最後の抵抗の主体に押したてようとしたが、

「勝てぬ戦さの采配はとらぬ」

と、只一言。小栗はこれをはねつけてしまった。

そして……。

小栗忠順は、老母や妻の道子、養子の又一をともない、家来・小者をふくめた二十名と共に駿河台の屋敷を引きはらい、上州・権田村の領地へおもむいたのである。

家財数十箱、砲一門、小銃二十挺、弾薬若干が一行の荷物であった。

権田村は、現・群馬県高崎市の西北約七里のところ。榛名山西麓の山村である。

村の東善寺境内に、小栗忠順の胸像がある。故・朝倉文夫氏の制作になるものだが、あまりに

も温厚な美男子に出来あがっており、小栗の風貌をつたえていないようにおもえる。

小栗は、この東善寺へ旅装を解いた。

本堂に隣接した二間つづきの部屋は、小栗が母や妻子と住み暮した場所で、いまも尚、当時のおもかげをつたえているようだ。

ときに、小栗上野介忠順は四十二歳。

忠順の母・くに子は六十歳。

妻・道子、三十歳。

息・又一、二十一歳。

小栗一行が東善寺へ到着したのは、慶応四年三月一日の七ツ（午後四時ごろ）であったと、彼の日記に書かれている。

お役人たちが、すぐさま東善寺へ機嫌うかがいにやって来た。

東善寺は街道をのぼって台地の上にあり、権田の村の全容をのぞむことができる現在の寺の建物は当時のものではないが、

「むかしのままの構造を損なわずに、火災焼失のあとの再建をおこなったのです」

と、住職はいう。

ところで……。

小栗到着の翌日には、早くも不穏な空気が権田村にただよいはじめた。

小栗の日記に、こうある。

二日（戊）天気能
一、終日、在宿
一、三ノ倉に二博徒ども多人数、相集まり、最寄の村々に廻文をまわし、不同意の者を焼払候など、種々申しふらし趣にこれあり、右につき、当村へは更に沙多もこれなきにつき、村役人とも心配の趣、申しきこえ候につき、それぞれ手配いたしおき、もっとも、なるべくは穏便に対談いたすべきむね、村役人へ申しわたしおき候。

徳川将軍が政権を返上したため、旧制度の威力が一度に失なわれたのだ。
官軍は江戸にせまり、旧幕臣は野に下った。
このような混乱期には〔法〕も〔道徳〕も消滅する。暴徒は、このときとばかり町や村を襲い、暴行・掠奪のかぎりをつくす。
このときも、博徒の集団が権田村近くの三ノ倉まで侵入し、いうことをきかなければ村を焼き払うと、村人たちを脅しはじめたのだ。
だが小栗は、
「穏便に話合うよう……」

と、虫をこらえている。いまの自分には〔幕臣〕としての背景が消えたことを承知しているからであった。権田の領地さえも果して、いつまで我物としていられるか、どうか……？

しかし小栗は、

「このまま、寺へ住みつくこともなるまい。近いうちに、この権田へ屋敷を建てよう」

と、妻に語っている。

その家に住み、領地の子弟をみずから教育し、人材を育成することに、わが〔余生〕をかけようというつもりなのだ。

それでいて、尚、

「このまま、彼ら（薩長など官軍）が天下をおさめ得るとはおもえぬ。必ずや、彼らの間で政権の座を争うにちがいない」

そのときこそは、再び起つ……という意志も、小栗の胸底にひそんでいたようである。

三月四日の朝になると……。

またも暴徒が権田村へあばれこんで来た。

その数二千余。

暴徒にしては、あまりにも多量にまとまりすぎている。

「よし。かくなっては彼らに応ずるより仕様もあるまい」

小栗は、江戸から持参した銃器などを村民にあたえ、みずからこれを指揮して、暴徒に立ち向

った。

百名ほどの村民が小栗と共に、村をまもろうとして起った。

五手に別れた村民のうち、二手を小栗が指揮し、諸方へ放火しつつ迫る暴徒を迎え撃った。

百対二千の争闘であった。

さすがに、小栗の指揮ぶりは堂に入ったもので、暴徒どもは、その日のうちに村から逃げ去った。

三月十一日の日記に、

「……観音山開発の儀、村方黒鍬に申しつけ、四百坪を平地にいたし、代金三十両にて出来るつもりなり」

と、ある。

小栗忠順は、権田の領地へ、いよいよ屋敷をかまえるべく、その整地に着手しはじめた。

以後、小栗は新邸建築の一事に熱中しはじめる。何かしていなくてはたまらぬ気持であったのだろう。

小栗は、あくまでも強気であったが、だからといって、何も官軍を迎え撃とうというのではない。

どこまでも、幕臣・小栗上野介としての面目をつらぬこうという意志が小栗〔日記〕にあらわれている。

……妻の道子は、折しも妊娠中であった。

三月二十日。

名主の佐藤藤七に金二百両を貸しあたえた。小栗はこの男を大いに買って、アメリカへまで連れて行ったのだが、案外のくわせ者であったらしい。

何かうまい儲け口でもあったのか、敗残の身の、いまは心さびしい旧主をくどき、大金を引き出したもののようにおもわれる。

また、一も二もなく藤七を信頼している小栗の心情は、あわれにもいたましい。

四月に入ると……。

東海道から江戸へ入城した官軍とは別に、東山道を進軍しつつあった官軍が信州を平定し、やがて上州へ進み、高崎へ本部を設けた。

高崎をはじめ、安中・小幡などの諸藩も官軍に帰順し、その管理下へおさめられたわけである。

四月十一日に官軍が江戸城を接収するのと同時に、前将軍・徳川慶喜は、水戸へ退去した。官軍はこれより、旧幕府の責任者の処分にとりかかる。いまでいう〔戦犯〕を取り裁こうというわけだ。

旧幕残存勢力たる〔彰義隊〕が上野の山へたてこもっていることだし、東北の諸藩は官軍迎撃の体制をかためた。いつ戦端がひらかれるか知れたものではない。いわば戦時における戦犯の処分であるから、何事にも個々の責任者が独断をもって処置をしてしまう。

小栗びいきの人々にいわせると、

「権田村へ押しかけた暴徒どもは、すべて官軍の謀略にあやつられていた」

と、いうことになる。

この最中に、江戸を逃げて、会津の若松城へ馳けつけ、一戦をこころみたいといい、権田村へあらわれた旧知の幕臣へ、小栗は金二十両を餞別としてあたえたりしている。

けれども、小栗は依然、権田村をうごこうともせぬ。

高崎の官軍本部では、暴徒を相手に、小栗が武器をもって応戦、これを撃退した事実を知り、

「何をするか、知れたものではない」

「大砲も鉄砲もあるというぞ」

「けしからん。錦の御旗をおそれざる逆賊め！」

まるで、権田村が小栗の手で要塞化してしまったような口ぶりになり、

「討て！」

「小栗のような男は一時も早く始末をしてしまわぬといかん！」

さわぎはじめた。

一方、小栗忠順はせっせと新邸の普請場へ通いつめ、指図に当っている。

そしてまた旧知の幕臣に金をねだられ、金五両をあたえた。こやつ桜井衛守といい、前に会津へたてこもるなどといって二十両も小栗からせしめた男だ。まだ、ぐずぐずしていて小栗をせびっている。

あまりにも人がよすぎる小栗忠順、完全になめられている。気も弱くなっていたのであろう。

かくて、四月二十九日。

高崎の官軍は、高崎・安中・小幡の三藩に、「小栗を高崎の本部へ出頭させよ」と、命を下した。

三藩の重役が協議の上、宮崎八三郎、星野武三郎、山田角右衛門の三名を代表にえらび、八百ほどの藩兵に武装させて権田村へさし向けたのである。

翌月も、旧暦の閏で、同じ四月であった。

その閏・四月一日。

三藩の代表たちは、東善寺へあらわれ、小栗に、官軍の命令書の写しを見せた。

「……小栗上野介、近日、権田村に陣屋をかまえ、砲台をきずき、容易ならざる企てあるおもむき諸方の注進あり。ふかく探索を加え候ところ、逆謀判然、上は天朝に対したてまつり、下は主人・慶喜恭順の降伏に相もとり候につき、逮捕の儀を、その藩々に申しつけ候……」

と、まことに大げさをきわめたもので、これを一読するや、小栗忠順は笑い出し、

「世のうわさというものはおそろしいものじゃ。ごらんなされ、お手前方。小栗はこのような小さな寺の一室にいて、官軍に手向いなどの出来ようわけもござらぬ。大砲は一門ござるが、これはアメリカみやげの品で、砲丸もありませぬよ。わずかに鉄砲が二十ほどござるが、これは御承知のごとく、先日のごとき暴徒にそなえるため……と申すのも、われら、家族・家来をふくめ、二十名にも足らぬゆえ」

小栗のことばに嘘はない。

三藩代表も間に入って困りぬいた。

それを見て、小栗は、

「よろしい。それがしが官軍の申すようなふるまいをしたのなれば、この場において捕えられるのが当然。なれど、それでは却って、われらの真意をうたがわれましょう。では、かようにいたそう。この寺にある武器のすべてを官軍へ引きわたし、それがしのせがれ、又一を官軍本営へおつれ願おう。人質ではない。それがしに他意なきことを証明いたすためにござる」

「それは、願ってもないこと」

三藩代表も大いによろこんだ。

こうまでするのなら、官軍も小栗に逆意ないことをみとめざるを得まいとおもった。小栗も同様に考えたのである。武士の道理にかなった仕方といえよう。

又一も父のことばにしたがい、いさぎよく高崎の官軍本営へ出頭した。

小栗は、自分が公明ならば相手も同じ反応をしめすであろうし、しめすべきだと考えている。養子とはいえ、小栗家の後つぎである又一を出頭せしめた以上、いやしくも〔官軍〕を称する人びとが不条理をおこなう筈はない。官軍とても諸藩の武士たちのあつまりなのだ。なれば武士の世界の条理が通じない筈はない。これが、小栗忠順の信念なのである。

（だが……!?）

又一を高崎へ出してやった後で、小栗は急に不安におそわれはじめた。万一ということもある。それで彼は、母と妊娠中の妻を権田村からひそかに逃がした。

さらに小栗自身も、東善寺を出て、亀沢の農家・大井秋次郎方へ引き移っている。

と……。その夜ふけに、あの名主の佐藤藤七が顔面蒼白となって、大井方へ小栗をたずねて来た。

「殿様が東善寺へおもどりなさりませぬと、村のもの一同が官軍に罰せられまする」

と、泣きついたものである。そう言えと彼は官軍に命ぜられたのだ。藤七は、ここに至って、ついに恩人を売ったことになる。借りた二百両の大金を彼は返さずにすむことになった。

ここに至って、小栗は、すべてをあきらめたらしい。

四月五日。

小栗は、官軍と三藩の兵によって捕えられ、三ノ倉の官軍・陣所へひかれて行った。三名の家来が共に捕えられている。

官軍は一言の訊問もしない。したがって、小栗は一言の弁明も出来ない。
翌朝になると、たちまちに三ノ倉の烏川のほとりへ、小栗ほか三名が引き出された。
家来たちは、
「このような無体が、どこの国にありましょうや。残念でござります」
口惜しがったが、
「しずかにせよ」
小栗上野介忠順は、少しもさわがず〔申しわたし〕すらもない死刑に対して、
「かような場合には、いかなる正義もおこなわれるものではない。みれんがないようにいたそう」
家来たちに言い、
「お前たちは、わしがすすめたとき、早う逃げてくれればよかった……すまぬな」
さびしげに笑いかけた。
三人の家来の処刑が終ったあと、官軍の軍監・原なにがしという二十そこそこの若者が威張りくさって、
「何ぞ、いい残すことがあれば言え」
こういうと、小栗はあわれむがごとき微笑をもってこたえ、
「官軍も人手不足と見ゆる」

と、つぶやいた。

斬られた小栗忠順の首は〔さらしもの〕となり、そばに立てられた木札には、

〔右の者、朝廷に対したてまつり、大逆をくわだて候こと明白につき、天誅をこうむらしめしものなり――東山道先鋒総督府〕

と、記された。

翌々日。

高崎の町を引きまわしにかけられた上、小栗の嗣子・又一も斬首されている。

義母と会津へ逃げた小栗の妻・道子は、のちに一女を生み、小栗家の血統を存続させた。

この年の九月八日に改元のことあって、年号は明治元年となる。

解説

尾崎秀樹

池波正太郎は昭和三十年代から平成二年五月に亡くなるまで、三十年にわたって多くの作品を手がけ、時代小説の分野で幅ひろい活躍をしめした。彼は戦国期から幕末までの時代を背景に、多数の長・短篇を書いたが、中でも「鬼平犯科帳」の長谷川平蔵や、「仕掛人」の藤枝梅安、「剣客商売」の秋山小兵衛父子などのヒーロー像を生み出したことで、読者の人気を集めた。

ところで彼が書いた諸作品で、歴史上の人物をあつかったケースは少なくないが、史実をもとに虚構化したものも多く、特定の人物にしぼってその伝記を書くといった作品は意外に見あたらない。早い時期に桐野利秋を主人公にした長篇「人斬り半次郎」があり、それを執筆したおりの印象をもとに、西郷隆盛にたいして親密感を抱きつづけていた池波正太郎が、「西郷隆盛」をまとめたのなど、その一例であろう。

日本史の中に登場する諸人物について、その生き方に関心をしめし、小説にとり上げたものは多かったと思われるが、それらは短篇としてまとめられた場合が多い。平成二年に刊行された「武士（おとこ）の紋章」は、黒田如水、真田幸村、滝川三四郎など、戦国から幕末の動乱期に活躍した八

人をあつかった短篇集だが、その収録作などはそれにあてはまるようだ。

ほかに短篇集としては、昭和四十四年頃に「剣客群像」や「仇討ち群像」を刊行しており、ここでも短篇でさまざまな人物像を描いていた。また昭和三十五年から四十三年にかけて、雑誌に発表した七篇を一冊にまとめた新潮文庫「あばれ狼」が、昭和六十四年三月に刊行されたが、ここに収められた短篇は、博徒の股旅ものである「さいころ虫」「盗賊の宿」、表題作の「あばれ狼」それに「角兵衛狂乱図」「幻影の城」「男の城」など「真田太平記」の脇役たちをあつかった作品と、二種類に分けられる。いずれも彼の作品のある種の傾向を反映しており、彼が話題となった長篇や連作のシリーズを書くかたわら、短篇の素材も拾いあげ、その文学世界に彩りを添えたり、補なったりしていることがわかる。

さらに彼の短篇もけっして一様ではなく、それまでに手がけた諸作品のテーマや素材を反映させながら、自由な発想でまとめており、彼の文学をもうひとつ拡げる役割も果している。

彼のエッセイ集「食卓の情景」に、「梅雨の湯豆腐」という一文があり、彼自身の長篇と短篇を書く場合の姿勢の違いを述べていた。

「もっとも辛いのは五、六十枚の短篇小説であって、これは短い日数のうちに一つの主題を完結させねばならないから、まったく油断も隙もあったものではない。私などは五十枚のものだったら五日間、一日十枚を書くつもりで日数をとっておかぬと、安心ができない。連載小説の場合は、一つの長いストーリーを一年なり一年半かけて、準備をし、さらに、それと同じ月日をかけ

て書きすすめてゆくわけだから、当然、登場人物の性格も発酵しているわけだ。

そうした作業を、短篇ではわずかな日数と枚数で仕上げねばならぬ。まことに苦しいのだけれども、短篇小説を書くことからはなれてしまうと、私の場合は長篇を書くときの自信がもてない。

短篇を書いて構成力を養っておかぬと、どうも安心ができないのだ」

連載といっても一話ごとのシリーズで構成される作品の場合だと、一篇ずつの短篇をまとめるのと同じ努力が必要とされるわけであり、おそらくこれは、彼が「鬼平犯科帳」や「仕掛人・藤枝梅安」を書きついでいた時期の述懐だったと思われる。それはともかく、たしかに短篇には、短い枚数の中に凝縮して主題をとらえるといった効果もあり、それだけに作者が長篇とは別の意味で、その構成に工夫をこらしているのが理解される。そしてそれが短篇の魅力ともなっているのだ。

池波正太郎の作品をいくつか読みくらべてみると、短篇の中にあつかわれていた挿話が、形を変えて長篇にも書かれているといったケースが見られる。短篇と長篇の間のそうした有機的なつながりを知るのも読者の興味だが、とりわけ、一度とりあげたある人物についての話が、その後の長篇の中により大きくあつかわれているといった時など、それが作者の気持の中で発酵してゆく過程をも推察されるのだ。本書には彼の初期短篇が収められているが、それらの中にもそうした発見があるのではなかろうか。

七篇の収録作は、いずれも昭和三十六年から四十六年にかけて「歴史読本」に発表されたもので、主として江戸期から幕末頃までの武士の生き方をあつかっている。

「忠臣蔵」は「消防士浅野内匠頭の見参」と、「台所に隠れていた吉良上野介」の二作をあわせてまとめた作品である。かねてこの事件に関心をもち、大石内蔵助を主人公とした長篇「おれの足音」のほか、関係する諸人物をいろいろに描いてきた作者が、その一部を披露してみせたものといえよう。

ここでは浅野内匠頭の異常な性格にふれて、前半では内匠頭も吉良上野介もそれぞれ異なる二面をもっていたと指摘している。また後半では討入り当夜の模様を、上杉家からの付人で、赤穂浪士の襲撃に生き残り、後に上杉家へ戻った山吉新八という人物の語った記録をもとに、再現しているのが興味深い。

「奇人・北斎」は、「自由奔放の天才画家・葛飾北斎」を改題しているが、原題の内容のとおり北斎の生き方を語り、何より自分自身に対して痛快であった男として、その名をあげている。

北斎の出生についての事実ははっきりしていないが、自分ではそんなことは一切念頭になかったようだ。十八歳のときに勝川春章の内弟子となり、春朗の号を与えられたが、彼の画才をねたむ一門の人々からうとまれたこともあって、師匠のもとから離れて一匹狼の生活を送る。そのとき石にかじりついても、うまい絵が描けるようにならなくては、浮かび上る道はないとさとった彼は、後、金や名声や人気の誘惑を徹底的にはねつけ、一心に絵筆にしがみついて、捨身の人生

を過すのだ。

彼は娘のお栄と二人きりで、江戸中の裏長屋を渡り歩き、気が向けば寝、気が向けば飲み食いし、父娘で紙と絵具に埋れながら、黙々と描く。そんな彼らの暮しぶりを描きながら、死ぬまで絵への執念を燃やしつづけた北斎の姿を、みごとに浮かび上らせている。

表題作の「若き獅子」は、幕末の長州で、維新の実現に大きな役割を果し、若くして去った高杉晋作をあつかった作品だ。その結末の部分で作者は高杉について、「彼は、早熟であった。才能は少年時にすばらしく開花し、二十歳をすぎて老成し、だからこそ、死の前の三ヵ月の奮闘は、ことごとく的を射たのである」と書いている。これはその人物論の要約としてまさに適切といえよう。

「悲運の英雄」は、越後長岡藩の家老であった河井継之助をとりあげ、藩主の信頼もあつく英才として注目された彼が、戊辰戦争の渦中で、命を落さなければならなかった経過を述べている。高杉晋作といい、河井継之助といい、その才を発揮しながら、まだそれを充分に生かすことなく、中途で死んだ人物について、作者の筆にも感情がこもっているようだ。

「壮烈なる孤忠」は、会津・若松二十八万石の最後の殿さまだった、松平容保について述べた作品だ。藩祖・保科正之以来の伝統をきびしく受けつぎ、その家訓を守って、幕末に京都守護職の大任を引き受けることになった松平容保と同藩の人々は、状況の変転にともない、ついには官軍の標的とされ、それを迎え撃つ立場にたたされる。会津開城に到るその経過をたどりながら、松

平容保の孤忠に悲壮な思いを抱いて、作者はこの一作をまとめたのではないか。

「新選組敗走記」は、江戸へ逃げ帰って以後の新選組の隊士たちの動きについて語っている。甲州鎮撫隊と名を改めた新選組は、近藤や土方らをはじめ、江戸で新たに募集した新隊士を加え、甲州の勝沼まで来たが、一日で敗れ、またも江戸へ逃げ帰る。

下総・流山で同志を集めたものの、たちまち囲まれると、近藤は自ら出頭して官軍の本営に送られ、斬られた。そのあと土方は会津へ向い、永倉新八と原田左之助は精鋭隊を組織したが、江戸城が無血開城すると、それぞれの道をたどり、幕臣の大鳥圭介、秋月悌次郎の一隊と合流して、宇都宮その他で戦いながら会津へ向ったが、若松城へ入れずにいるうちに城は落ちた。土方は北海道で新政府をつくろうとした榎本の軍に加わり、降伏後、戦死した。最後に生き残った永倉新八が、明治になってから北海道で、諸方の剣道家と試合したおりの英名録を、池波正太郎が目にするくだりで終っている。

「明治元年の逆賊」は、徳川幕府の終り頃に幕臣として活躍し、その終焉を見送って上州の権田村の領地へ引きこもって処刑された小栗上野介忠順を、明治に入ってからの逆賊としてとらえたところに、作者の視点が感じられる作品である。この短篇集には「若き獅子」を総タイトルとし、以下五篇の幕末ものを並べたあとに、それらをしめくくる形で「明治元年の逆賊」がおかれているのだ。

初出誌・歴史読本

「忠臣蔵」

〝消防士浅野内匠頭の見参〟（１９６１年９月）

〝台所に隠れていた吉良上野介〟（１９６１年３月）

右の二つを合せ、著作権継承者の了解を得て「忠臣蔵」と改題

奇人・北斎（１９６１年１月）

〝自由奔放の天才画家・葛飾北斎〟を改題

若き獅子（１９６５年11月）

悲運の英雄（１９６８年１月）

壮烈なる孤忠（１９６６年10月）

新選組敗走記（１９６１年11月）

明治元年の逆賊（１９６８年７月）

☆本書は、オリジナル文庫です。なお、「若き獅子」、「壮烈なる孤忠」「新選組敗走記」は、『動乱の男たち』（１９７７年２月株式会社ゆまにてより刊行。現在絶版）に収録されたことがあります。

若き獅子
池波正太郎
© Toyoko Ikenami 1994

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1994年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185541-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫 最新刊

池波正太郎	若き獅子	高杉晋作、河井継之助、松平容保、葛飾北斎等、激動の時代が生んだ偉才たちを描く短編集。
瀬戸内晴美（寂聴）	かの子撩乱その後	大輪の花岡本かの子を咲かせた周囲の人々の肖像。不滅の名著「かの子撩乱」に続く姉妹編。
小嵐九八郎	流浪期	陣野兵馬、十五歳。故郷から家出上京中の列車内で男になった兵馬の女を求める流浪期。
有爲エンジェル	踊ろう、マヤ	七歳の誕生日の直前に轢死したマヤは英国人の父と日本人の母の間で死後も踊り続けた。
S&A・ゴロン 井上一夫訳	アンジェリク123	あらゆる人々を魅了したみどりの瞳の美女。ベストセラー愛の歴史ロマン、待望の文庫化。
もりたなるお	銃殺〈運命の二・二六事件〉	同志である二・二六蹶起将校へ処刑の銃口を向けるのか！　射撃名手、宮林中尉の悲劇。
矢口高雄	ボクの手塚治虫	手塚マンガに驚き憧れつづけた少年の日々を感動ゆたかに描く自伝的エッセイ・マンガ。
戸塚真弓	パリ住み方の記	快適なアパルトマンを探すには。お引っ越し騒動の体験を交えて紹介するパリ住宅事情。
植田まさし	らくてんパパ1〈清廉潔白編〉	コミック界のアイドル、らくてんパパがあちらこちらで大奮闘。笑撃の植田ギャグ炸裂。
読売新聞大阪社会部	逆転無罪〈少年はなぜ罪に陥れられたか〉	婦女暴行殺人犯にデッチあげられた少年たちの〝無実の叫び〟を追い、冤罪を明かすルポ。
高橋克彦	1999年〈対談集〉	今、激動の世紀末真っ只中を生きるわれわれに五人の鬼才たちが贈る衝撃のメッセージ。
		400円　440円　400円　500円　640円　520円　各800円　380円　560円　400円　380円

表示価格はすべて税込み定価です

講談社文庫 ❋ 最新刊

内田康夫	平城山（ならやま）を越えた女	幻の秘仏をキイワードに殺された若い女性。謎を追う浅見光彦の前に意外な人物が浮ぶ。
佐野　洋	2（トゥー）（エス）（S＋T（ティー））の物語	女子大生と元鳶職のマンション泥棒の絶妙コンビが大活躍する二人三脚青春ミステリー。
阿部牧郎	深夜の顔	オフィスラブ相手の美人OL全裸殺人の謎を企画室長が突き止める。長編官能ミステリー。
笹沢左保	夜明け	元敏腕刑事、現タクシードライバー夜明日出夫が乗せた美女のアリバイを崩す探偵物語。
酒見賢一	ピュタゴラスの旅	魂の解放と調和を求める哲学小説からミステリーまで、新鮮で多様な発想の初の短編集。
永　六輔	真紅（しんく）の琥珀（こはく）（トラン）	横浜中華街を舞台に、日本と世界の権謀術数を描く長編パロディ小説。ただし猛毒注意！
東郷　隆	定吉七は丁稚の番号 〈定吉七番シリーズ〉	大阪商工会議所秘密情報部員、定吉七番が大活躍の西高東低痛快ドタバタ・アクション。
中町　信	蟹の町	社内の下北ツアーで恐怖の惨劇。互いに犯人を探るうち意外な展開が。本格推理の力作。
内海隆一郎	下北の殺人者	人びとの情感あふれる物語で注目の作家の処女作。幻想の町に繰り広げられる初期小説。
勝目　梓	邪淫記	マンション屋上で若い女をレイプし、首、乳房、性器を切りとった猟奇殺人犯の日記帳。
		400円　440円　500円　440円　580円　380円　400円　400円　520円　560円

表示価格はすべて税込み定価です

芥川龍之介　羅生門・偸盗・地獄変・往生絵巻
有吉佐和子　和宮様御留
有吉佐和子　母子変容全二冊
阿川弘之　断然欠席
阿川弘之　大ぼけ小ぼけ
阿刀田　高　冷蔵庫より愛をこめて
阿刀田　高　江戸禁断らいぶらりい
阿刀田　高　ナポレオン狂
阿刀田　高　食べられた男
阿刀田　高　ブラック・ジョーク大全
阿刀田　高　壜詰の恋
阿刀田　高　マッチ箱の人生
阿刀田　高　最期のメッセージ
阿刀田　高　ガラスの肖像
阿刀田　高　危険信号
阿刀田　高　猫の事件
阿刀田　高　風物語
阿刀田　高　迷い道
阿刀田　高　真夜中の料理人
阿刀田　高　時のカフェテラス
阿刀田　高　妖しいクレヨン箱
阿刀田　高　霧のレクイエム
阿刀田　高　Vの悲劇
阿刀田　高　猫を数えて
青木雨彦　男のためいき女の寝息
青木雨彦　平家物語の知恵
青木雨彦　ことわざ雨彦流
荒巻義雄　「新説邪馬台国の謎」殺人事件
荒巻義雄　「能登モーゼ伝説」殺人事件
安房直子　ハンカチの上の花畑
安房直子　南の島の魔法の話
安房直子　だれにも見えないベランダ
安房直子　夢の果て
あまんきみこ　ふしぎなオルゴール
相沢忠洋　「岩宿」の発見
鮎川哲也　戌神はなにを見たか
鮎川哲也　りら荘事件
鮎川哲也　死者を笞打て
安西篤子　千姫微笑
安西篤子　武家女夫録
赤川次郎　真夜中のための組曲
赤川次郎　東西南北殺人事件
赤川次郎　起承転結殺人事件
赤川次郎　三姉妹探偵団1～7
赤川次郎　沈める鐘の殺人
赤川次郎　冠婚葬祭殺人事件
赤川次郎　人畜無害殺人事件
赤川次郎　棚から落ちて来た天使
赤川次郎　純情可憐殺人事件
赤川次郎　静かな町の夕暮に
赤川次郎　ぼくが恋した吸血鬼
赤川次郎　秘書室に空席なし
赤川次郎　結婚記念殺人事件
赤川次郎　微熱
赤川次郎　二人だけの競奏曲
赤川次郎　泡坂妻夫花火と銃声
泡坂妻夫　毒薬の輪舞

新井素子　グリーン・レクイエム
新井素子　緑幻想〈グリーン・レクイエムII〉
新井素子　二分割幽霊綺譚
新井素子　あなたにここにいて欲しい
新井素子　新井素子の未知との遭遇
安土　敏　小説スーパーマーケット　全二冊
安土　敏　企業家サラリーマン
朝日新聞経済部　銀行〈その実像と虚像〉
阿久　悠　飢餓旅行
阿佐田哲也　ばいにんぶるーす
阿佐田哲也　先天性極楽伝
阿佐田哲也　ヤバ市ヤバ町雀鬼伝　1-2
浅野健一　犯罪報道の犯罪
浅野健一　新・犯罪報道の犯罪
安能務訳　封神演義　全三冊
安能　務　春秋戦国志　全三冊
安能　務　中華帝国志　全三冊
阿部牧郎　誘惑調査室
阿部牧郎　誘惑教室
阿部牧郎　誘惑魔
阿部牧郎　誘惑夫人
阿部牧郎　誘惑街の女たち
阿部牧郎　それぞれの終楽章
阿部牧郎　不倫の戦士たち
阿部牧郎　篠懸の遠い道
阿部牧郎　ビル街の裸族
阿部牧郎　危険な秋
阿部牧郎　誘惑地帯
嵐山光三郎　素人庖丁記
嵐山光三郎　素人庖丁記〈カツ丼の道篇〉
安部譲二　塀の中のプレイ・ボール
安部譲二　ぼくのムショ修業
安部譲二　ジェット・ストリーム
安部譲二　泣きぼくろ
安部譲二　俺達は天使じゃない
安西水丸　青インクの東京地図
新井千裕　復活祭のためのレクイエム
新井千裕　忘れ蝶のメモリー
相部和男　こんな親が問題児をつくる〈一万人の非行相談から〉
綾辻行人　十角館の殺人
綾辻行人　水車館の殺人
綾辻行人　迷路館の殺人
綾辻行人　人形館の殺人
阿井渉介　北列車連殺行
阿井渉介　湖列車連殺行
阿井渉介　雪列車連殺行
我孫子武丸　8の殺人
我孫子武丸　0の殺人
我孫子武丸　メビウスの殺人
赤羽　堯　死を讃え森に潜め
赤瀬川原平　少年とグルメ
阿部陽一　フェニックスの弔鐘
有栖川有栖　マジックミラー
明石散人　佐々木幹雄　東洲斎写楽はもういない
赤羽建美　メトロ・クルージング
五木寛之　恋歌
五木寛之　ソフィアの秋

五木寛之　こがね虫たちの夜
五木寛之　海を見ていたジョニー
五木寛之　地図のない旅
五木寛之　さらばモスクワ愚連隊
五木寛之　狼のブルース
五木寛之　ヒットラーの遺産
五木寛之　海峡物語
五木寛之　風花のひと
五木寛之　鳥の歌　全二冊
五木寛之　燃える秋
五木寛之　みみずくの大サーカス〈流されゆく日々'76〉
五木寛之　雨の日の珈琲屋で〈流されゆく日々'77〉
五木寛之　真夜中の望遠鏡〈流されゆく日々'78〉
五木寛之　ホトカ青春航路〈流されゆく日々'79〉
五木寛之　海の見える街にて〈流されゆく日々'80〉
五木寛之　改訂新版　青春の門　全六冊
五木寛之　旅の終りに
五木寛之　野火子
五木寛之　旅の幻燈
五木寛之　メルセデスの伝説
五木寛之　男が女をみつめる時
五木寛之　疾れ！逆ハンぐれん隊
五木寛之　爆走！逆ハンぐれん隊
五木寛之　危うし！逆ハンぐれん隊
五木寛之　珍道中！逆ハンぐれん隊
五木寛之　挑戦！逆ハンぐれん隊
五木寛之　怒れ！逆ハンぐれん隊
五木寛之　さらば！逆ハンぐれん隊
井上ひさし　モッキンポット師の後始末
井上ひさし　モッキンポット師ふたたび
井上ひさし　いとしのブリジット・ボルドー
井上ひさし　ブラウン監獄の四季
井上ひさし　歌麿の世界
井上ひさし　他人の血
井上ひさし　喜劇役者たち
井上ひさし　ナイン
井上ひさし　たそがれやくざブルース
井上ひさし　闇に咲く花
井上ひさし　四千万歩の男　全五冊
生島治郎　兇悪の拳銃
生島治郎　死ぬときは独り
生島治郎　総統奪取
生島治郎　幕末ガンマン
池波正太郎　忍びの女　全二冊
池波正太郎　近藤勇白書
池波正太郎　殺しの四人（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　梅安蟻地獄（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　梅安最合傘（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　梅安針供養（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　梅安乱れ雲（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　梅安影法師（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　梅安冬時雨（仕掛人・藤枝梅安）
池波正太郎　まぼろしの城
池波正太郎　私の歳月
池波正太郎　新私の歳月
池波正太郎　殺しの掟
池波正太郎　よい匂いのする一夜

池波正太郎　緑のオリンピア
池波正太郎　梅安料理ごよみ
池波正太郎　田園の微風
池波正太郎　抜討ち半九郎
池波正太郎　剣法一羽流
井上　靖　わが母の記
井上　靖　楊貴妃伝
井上　靖　本覚坊遺文
伊藤桂一　静かなノモンハン
伊藤桂一　秘剣やませみ
石川英輔　大江戸神仙伝
石川英輔　大江戸仙境録
石川英輔　大江戸遊仙記
石川英輔　未来妙法蓮華経
石川英輔　大江戸えねるぎー事情
石牟礼道子　苦海浄土〈わが水俣病〉
今西祐行　肥後の石工
今西祐行　ヒロシマの歌ほか
いわさきちひろ　ちひろのことば
いわさきちひろの絵と心
松本猛　ちひろへの手紙
松本猛　ちひろ・子どもの情景〈文庫ギャラリー〉
絵本美術館編　ちひろ・紫のメッセージ〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ　絵本美術館編
石野径一郎　ひめゆりの塔
今西錦司　生物の世界
入江泰吉　大和路のこころ
井沢元彦　猿丸幻視行
井沢元彦　六歌仙暗殺考
井沢元彦　修道士の首
井沢元彦　ダビデの星の暗号
井沢元彦　五つの首
井沢元彦　義経幻殺録
井沢元彦　欲の無い犯罪者
井沢元彦　義経はここにいる
李　御寧（イ・オリョン）　「縮み」志向の日本人
一ノ瀬泰造　地雷を踏んだら一ノ瀬泰造
石森章太郎　トキワ荘の青春〈ぼくの漫画修行時代〉
伊藤雅俊　商いの心くばり
泉　麻人　丸の内アフター5
泉　麻人　オフィス街の達人
泉　麻人　東京23区動物探検
伊井直行　草のかんむり
伊井直行　さして重要でない一日
今井正明　カイゼン
生田直親　雪のコンチェルト
今井　博　モスクワの市民生活
岩川　隆　どうしやうもない私〈わが山頭火伝〉
一志治夫　たった一度のポールポジション
いしいひさいち　わたしはネコである
飯沢匡　黒柳徹子　つば広の帽子をかぶって〈いわさきちひろ伝〉
飯村隆彦　YOKOONO〈オノ・ヨーコ人と作品〉
伊集院静　三年坂
伊集院静　乳房
伊集院静　遠い昨日
伊集院静　長友啓典　ともかく静かに
井崎博之　エノケンと呼ばれた男
内橋克人　匠の時代 1～12

内橋克人「手法革命」の時代
内橋克人「退き際」の研究
内橋克人ガンを告げる瞬間（とき）
内田康夫死者の木霊
内田康夫シーラカンス殺人事件
内田康夫パソコン探偵の名推理
内田康夫「横山大観」殺人事件
内田康夫漂泊の楽人
内田康夫江田島殺人事件
内田康夫琵琶湖周航殺人歌
内田康夫夏泊殺人岬
生方幸夫銀行VS.証券〈腐敗の構造と新展開〉
歌野晶午長い家の殺人
歌野晶午白い家の殺人
歌野晶午動く家の殺人
with編集部編　男子禁制OL物語〈丸ごと本音激白集〉
with編集部編　男子禁制OL物語2〈もう許さないの巻〉
内館牧子ひらり　全四冊
内館牧子出逢った頃の君でいて

宇神幸男神宿る手
遠藤周作海と毒薬
遠藤周作白い人・黄色い人（ほか二編）
遠藤周作わたしが・棄てた・女
遠藤周作ユーモア小説集
遠藤周作第二ユーモア小説集
遠藤周作第三ユーモア小説集
遠藤周作怪奇小説集
遠藤周作第二怪奇小説集
遠藤周作ただいま浪人
遠藤周作どっこいショ
遠藤周作ぐうたら人間学
遠藤周作ぐうたら愛情学
遠藤周作ぐうたら好奇学
遠藤周作ぐうたら交友録
遠藤周作協奏曲
遠藤周作口笛をふく時
遠藤周作結婚
遠藤周作聖書のなかの女性たち

遠藤周作さらば、夏の光よ
遠藤周作最後の殉教者
遠藤周作何でもない話
遠藤周作悪霊の午後　全二冊
遠藤周作作家の日記
遠藤周作父親
遠藤周作わが恋（おも）う人は　全二冊
遠藤周作イエスに邂（あ）った女たち
遠藤周作妖女のごとく
遠藤周作反逆　全二冊
遠藤周作ひとりを愛し続ける本
永六輔無名人名語録
永六輔普通人名語録
永六輔一般人名語録
永六輔評論家ごっこ
江波戸哲夫小説大蔵省
江波戸哲夫左遷〈商社マンの決断〉！
江波戸哲夫乗っ取り指令
江波戸哲夫小説都市銀行

江波戸哲夫　政　商　誕　生
江坂　彰　団塊サラリーマンの生き方
海老沢泰久　さびしい恋人
海老沢泰久　孤立無援の名誉
大江健三郎　新しい人よ眼ざめよ
小田　実　何でも見てやろう
大森　実　アメリカとは何か100章
大森　実　ヒトラー〈人物現代史1〉
興津要編　古典落語　全六冊
大原富枝　婉という女・正妻
大谷羊太郎　殺意の演奏
落合恵子　奇妙な愛の物語
落合恵子　愛すれどひとり
落合恵子　女が別れを告げるとき
落合恵子　アローン・アゲイン
落合恵子　ここに愛がいる
落合恵子　素敵なヤツなのに
落合恵子　バーバラが歌っている
大岡　信　百人一首
大橋　歩　トマトジュース
大橋　歩　鉛筆の先っちょ
大橋　歩　生活のだいじ
大石邦子　この生命ある限り
岡倉天心　宮川寅雄訳　茶の本
沖　守弘　マザー・テレサ　あふれる愛
岡嶋二人　焦茶色のパステル
岡嶋二人　七年目の脅迫状
岡嶋二人　あした天気にしておくれ
岡嶋二人　開けっぱなしの密室
岡嶋二人　三度目ならばＡＢＣ
岡嶋二人　とってもカルディア
岡嶋二人　チョコレートゲーム
岡嶋二人　ちょっと探偵してみませんか
岡嶋二人　記録された殺人
岡嶋二人　ツァラトゥストラの翼
岡嶋二人　そして扉が閉ざされた
岡嶋二人　熱い砂〈リーダカール1000キロ〉
岡嶋二人　どんなに上手に隠れても
岡嶋二人　タイトルマッチ
大石芳野　女の国になったカンボジア
大石芳野　闘った人びと
太田蘭三　赤い雪崩
太田蘭三　破牢の人
太田蘭三　餓鬼岳の殺意
太田蘭三　南アルプス殺人峡谷
太田蘭三　木曽駒に幽霊茸を見た
太田蘭三　殺意の朝日連峰
太田蘭三　謀殺水脈
太田蘭三　寝姿山の告発
太田蘭三　密殺源流
大前研一　企業参謀　正続
大前研一　世界が見える日本が見える
大前研一　トライアド・パワー
大前研一　新・国富論
大前研一　平成維新
大沢在昌　野獣駆けろ
大沢在昌　氷の森

大沢在昌　死ぬより簡単
大沢在昌　相続人TOMOKO
逢坂　剛　コルドバの女豹
逢坂　剛　幻のマドリード通信
逢坂　剛　スペイン灼熱の午後
逢坂　剛　カディスの赤い星　全二冊
逢坂　剛　十字路に立つ女
小川和久　在日米軍
小川和久　原潜回廊
小川和久　仮想敵国ニッポン〈アメリカの対日戦略シナリオ〉
小川和久　情報フィールドノート2〈激動の世界を読む〉
御田重宝　戦艦「大和」の建造
御田重宝　シベリア抑留
御田重宝　特攻
沖藤典子　女が会社へ行きたくない朝
沖藤典子　転勤族の妻たち
オノ・ヨーコ　飯村隆彦編　ただの私（あたし）
大泉実成　説得　全ホボの証人と輸血拒否事件
尾上松緑　松緑芸話
折原　一　倒錯のロンド
折原　一　螺旋館の殺人
大下英治　小説東急王国
大下英治　梟商（きょうしょう）〈小佐野賢治の昭和戦国史〉
大橋巨泉　わがシングルへの道
大石英司　B-1爆撃機を追え
大木トオル　伝説のイエロー・ブルース
太田忠司　僕の殺人
海音寺潮五郎　孫子
海音寺潮五郎　列藩騒動録　全二冊
海音寺潮五郎　江戸城大奥列伝
梶山季之　李朝残影
加賀乙彦　頭医者留学記
川口松太郎　一休さんの道　全二冊
海渡英祐　伯林（ベルリン）―一八八八年
梶龍雄　透明な季節
金井美恵子　タマや
柏葉幸子　霧のむこうのふしぎな町
柏葉幸子　地下室からのふしぎな旅
柏葉幸子　天井うらのふしぎな友だち
柏葉幸子　エバリーン夫人のふしぎな肖像
加藤周一　雑種文化
勝目梓　その死を暴くな
勝目梓　牙の街
勝目梓　日蝕の街
勝目梓　女教師に捧げる鉄拳
勝目梓　私設断頭台
勝目梓　悪女軍団
勝目梓　夜のエージェント
勝目梓　闇が裂ける
勝目梓　殺し屋
勝目梓　肉狩り
勝目梓　不倫の報酬
勝目梓　蜜の報酬
勝目梓　引き裂かれた夏
勝目梓　炸裂
勝目梓　はみだし者
鎌田慧　自動車絶望工場

鎌田　慧　日本の兵器工場
鎌田　慧　教育工場の子どもたち
鎌田　慧　アジア絶望工場
鎌田　慧　ロボット絶望工場
鎌田　慧　国鉄処分
鎌田　慧　弘前大学教授夫殺人事件
鎌田　慧　「東大経済卒」の十八年
鎌田　慧　トヨタと日産〈自動車王国の暗闇〉
鎌田　慧　反骨〈鈴木東民の生涯〉
鎌田　慧　ルポ権力者その素顔
桂　米朝　米朝ばなし〈上方落語地図〉
覚張貴子　宮城由紀子　インテリアの本
上之郷利昭　西武王国
上之郷利昭　新・西武王国
上之郷利昭編　堤義明は語る
上之郷利昭　本田宗一郎の育てられ方
開高健編　それでも飲まずにいられない
門田泰明　美貌のメス
門田泰明　愛憎のメス
門田泰明　狂瀾のメス
門田泰明　人妻鬼
門田泰明　さらば黒豹〈特命武装検事・黒木豹介〉
門田泰明　黒豹殺し〈特命武装検事・黒木豹介〉
門田泰明　自分発見テスト〈エゴグラム診断法〉
桂　戴作　景山民夫転がる石のように
景山民夫　休暇の土地
川本三郎　ちょっとそこまで
笠井　潔　復讐の白き荒野
笠井　潔　サイキック戦争
河原敏明　美智子妃
河原敏明　昭和と平成の皇太子妃〈美智子皇后と雅子さま〉
河原敏明　美智子皇后
過労死弁護団全国連絡会議編　過労死！
加藤寛一郎　生還への飛行
加藤　仁　ティーリングルーム25時〈円〉の戦士の栄光と挫折
片岡義男　香水と誕生日
加東康一　岳史よ、生命あるかぎり
金田一春彦　安西愛子編　日本の唱歌全三冊
岸本英夫　死を見つめる心〈ガンとたたかった十年間〉
金達寿　日本の中の朝鮮文化1～10
北方謙三　君に訣別の時を
北方謙三　鎖
北方謙三　烈日
北方謙三　われらが時の輝き
北方謙三　魂の岸辺
北方謙三　夜の終り路
北方謙三　帰路
北方謙三　火焔樹
北方謙三　日付変更線
北方謙三　秋ホテル
菊地秀行　妖戦地帯1～3
菊地秀行　怪奇城
菊地秀行　キラーネーム
菊地秀行　魔人学園
衣笠祥雄　お父さんからきみたちへ〈明日を信じて〉
宜保愛子　霊能者として生まれて生きて
北出清五郎　相撲部屋のおかみさん

北川広二　日本全国旨い地酒を求めて
木村裕主　ムッソリーニを逮捕せよ
北原亞以子　深川澪通り木戸番小屋
黒岩重吾　太陽を這う
黒岩重吾　明日なき巡礼たち
黒岩重吾　潮の墓標
黒岩重吾　古代史への旅
黒岩重吾　古代浪漫紀行（邪馬台国から大和王権への道）
栗本薫　ぼくらの時代
栗本薫　ぼくらの気持
栗本薫　ぼくらの世界
栗本薫　絃の聖域　全二冊
栗本薫　優しい密室
栗本薫　女狐
栗本薫　鬼面の研究
栗本薫　幽霊時代
栗本薫　神州日月変　全二冊
栗本薫　伊集院大介の冒険
栗本薫　猫目石　全二冊
栗本薫　伊集院大介の私生活
栗本薫　天狼星Ⅰ～Ⅱ
栗本薫　双頭の蛇　全二冊
栗本薫　ハード・ラック・ウーマン
栗本薫　魔都恐怖仮面之巻
日下圭介　蝶たちは今……
黒井千次　星からの1通話
倉橋由美子　夢の通い路
桑田忠親　明智光秀
黒柳徹子　窓ぎわのトットちゃん
熊井明子　愛のポプリ
桑田佳祐　ロックの子
桑田佳祐　平成NG日記
久保博司　日本の警察
久保博司　日本の検察
胡桃沢耕史　旅券のない旅
胡桃沢耕史　黄塵を駆ける　全二冊
胡桃沢耕史　可愛い拳銃使い
胡桃沢耕史　女子高生は諜報員
栗林良光　大蔵省銀行局
栗林良光　大蔵省主計局
栗林良光　大蔵省主税局
栗林良光　大蔵省証券局
草野厚　証券恐慌
工藤美代子　女が複眼になるとき
W・クロマティ　R・ホワイティング　松井みどり訳　さらばサムライ野球
黒川博行　ドアの向こうに
黒川博行　アニーの冷たい朝
軍司貞則　翔べ、バルセロナへ（野球を五輪競技にした男たち）
栗本慎一郎　縄文式頭脳革命
栗本慎一郎　ニッポンの終焉
源氏鶏太　見事な娘
源氏鶏太　坊っちゃん社員
源氏鶏太　天下を取る
けらえいこ　おきらくミセスの婦人くらぶ～ハヤセクニコ
小峰元　アルキメデスは手を汚さない
小林久三　暗黒告知
駒田信二　中国妖姫伝

駒田信二　中国怪奇物語　全三冊
駒田信二訳　水滸伝　全八冊
小林道雄　日本警察　腐蝕の構造
小杉健治　死者の威嚇
小杉健治　影の核心
小杉健治　崖
後藤正治　遠いリング
後藤　修　中島常幸改造打法の秘密
高　信太郎　超日本むつかし話
小宮和行　東京ディズニーランド　驚異の経営マジック
佐藤さとる　そこなし森の話
佐藤さとる　赤んぼ大将
佐藤さとる　ぼくの机はぼくの国
佐藤さとる　わんぱく天国
佐藤さとる　コロボックル物語①～⑤
佐藤さとる　机の上の仙人
佐野　洋　銅婚式
佐野　洋　美しい死刑
佐野　洋　推理日記Ⅰ～Ⅳ
佐野　洋　深夜のためらい
佐野　洋　折々の殺人
佐野　洋　青い記憶
佐野　洋　生きていた灰　全二冊
佐野　洋　いつまでも昨日
佐野　洋　折々の犯罪
斎藤　栄　殺人の棋譜
斎藤　栄　新・殺人の棋譜
斎藤　栄　Nの悲劇
斎藤　栄　お伽噺殺人事件
斎藤　栄　少女まんが家殺人事件
斎藤　栄　鳥取砂丘殺人事件
斎藤　栄　日美子の誘拐集団
斎藤　栄　日美子の完全犯罪
斎藤　栄　湘南海岸殺人事件
斎藤　栄　ファウスト殺人事件
斎藤　栄　鎌倉さざんか寺殺人事件
斎藤　栄　オロフレ峠の殺意
斎藤　栄　淡紅の女の殺人
笹沢左保　アリバイの唄
早乙女　貢　沖田総司　全二冊
佐藤愛子　戦いすんで日が暮れて
佐藤愛子　花はくれない　〈小説　佐藤紅緑〉
佐藤愛子　私のなかの男たち
佐木隆三　復讐するは我にあり　全二冊
佐木隆三　裁判長　大岡淳三
佐木隆三　身分帳
咲村観　上杉謙信　全三冊
咲村観　秦の始皇帝
咲村観　源頼朝　全二冊
サトウハチロー　新装版詩集おかあさん　全二冊
斎藤惇夫　冒険者たち　〈ガンバと十五匹の仲間〉
斎藤惇夫　ガンバとカワウソの冒険
斎藤惇夫　グリックの冒険
西東　登　蟻の木の下で
佐賀　潜　華やかな死体
澤地久枝　焔印の女たち
佐々木丸美　雪の断章

佐々木丸美　忘れな草
佐々木丸美　花嫁人形
佐々木丸美　崖の館
佐々木丸美　水に描かれた館
佐々木丸美　夢館
佐々木丸美　風花の里
佐々木丸美　沙霧秘話
沢田サタ編　泥まみれの死
酒井美意子　ある華族の昭和史
佐高信　会社人類学入門
佐高信　日本官僚白書
佐高信　新版KKニッポン就職事情
佐高信　「非会社人間」のすすめ
佐高信　情報は人にあり
佐高信　銀行倒産〈ドキュメント金融恐慌〉
佐高信　逆命利君
佐藤綾子　自分育てのすすめ
佐藤綾子　マンハッタン母学生
佐藤綾子　愛なんかこわくない〈心を伝えるパフォーマンス〉
佐藤雅美　幕末「住友」参謀〈広瀬宰平の経営戦略〉
佐藤雅美　主殿の税〈田沼意次の経済改革〉
坂本藤良　坂本龍馬と海援隊
堺屋太一　超巨人明の太祖朱元璋
佐藤正午　恋を数えて
佐藤正午　恋売ります
坂本光一　白色の残像
坂本光一二　重の罠〈ダブルトラップ〉
斎藤純　テニス、そして殺人者のタンゴ
斎藤純　海へ、そして土曜日
笹倉明　悲郷
斎藤肇　魔法物語全二冊
斎藤肇　思い通りにエンドマーク
佐藤隆三　菊と鷲
斎藤澪　花まつり殺人事件
佐藤泰子　春夏秋冬色物語
佐々木譲　愚か者の盟約
司馬遼太郎　歳月
司馬遼太郎　王城の護衛者
司馬遼太郎　俄〈浪華遊侠伝〉
司馬遼太郎　北斗の人
司馬遼太郎　妖怪
司馬遼太郎　尻啖え孫市
司馬遼太郎　播磨灘物語全四冊
司馬遼太郎　おれは権現
司馬遼太郎　真説宮本武蔵
司馬遼太郎　風の武士全二冊
司馬遼太郎　戦雲の夢
司馬遼太郎　軍師二人
司馬遼太郎　大坂侍
司馬遼太郎　最後の伊賀者
司馬遼太郎　箱根の坂全二冊
司馬遼太郎　アームストロング砲
海音寺潮五郎　日本歴史を点検する
司馬遼太郎　歴史の交差路にて〈日本・中国・朝鮮〉
金達寿　陳舜臣
柴田錬三郎　三国志〈英雄ここにあり〉全三冊
柴田錬三郎　岡っ引どぶ正続
柴田錬三郎　秘剣揚羽蝶

柴田錬三郎　血　汐　笛
柴田錬三郎　お江戸日本橋（全二冊）
柴田錬三郎　顔十郎罷り通る（全二冊）
柴田錬三郎　主水血笑録
柴田錬三郎　われら梁山泊の好漢（全四冊）
柴田錬三郎　剣と旗と城（全二冊）
柴田錬三郎　木乃伊（ミイラ）孤独館（ひとりやかた）
柴田錬三郎　血太郎孤独雲
柴田錬三郎　鈴姫異変
柴田錬三郎　明治一代男
柴田錬三郎　江戸八百八町物語
城山三郎　今日は再び来らず
城山三郎　梅は匂い人はこころ
城山三郎　外食王の飢え
城山三郎　本田宗一郎との一〇〇時間（燃えるだけ燃えよ）
城山三郎　屈託なく生きる
城山三郎　友情　力あり
城山三郎　日米互いに何を学ぶか
E・ヴォーゲル
白石一郎　火　炎　城
白石一郎　鷹ノ羽の城
白石一郎　銭　の　城
白石一郎　びいどろの城
白石一郎　庖丁ざむらい（十時半睡事件帖）
白石一郎　観音妖女（十時半睡事件帖）
白石一郎　刀（十時半睡事件帖）
白石一郎　戦国を斬る
新章文子　危険な関係
志茂田景樹　黄色い牙
志水辰夫　飢えて狼
志水辰夫　裂けて海峡
志水辰夫　散る花もあり
志水辰夫　背いて故郷
志水辰夫　オンリィ・イエスタディ
志水辰夫　帰りなん、いざ
芝木好子　牡丹（ぼたん）の庭
芝木好子　湯葉・隅田川・丸の内八号館
芝木好子　築地川・葛飾の女
芝木好子　紫　の　山
芝木好子　京　の　小　袖
芝木好子　下　町　の　空
芝木好子　春　の　散　歩
芝木好子　群　青　の　湖
塩沢　茂　イトーヨーカ堂長会議
神　一行　大蔵官僚（超エリート集団の人脈と野望）
神　一行　闇（新特権階級の系譜）
島田荘司　占星術殺人事件
島田荘司　殺人ダイヤルを捜せ
島田荘司　火　刑　都　市
島田荘司　網走発遙かなり
島田荘司　御手洗潔の挨拶
島田荘司　異邦の騎士
島田荘司　死者が飲む水
島田荘司　斜め屋敷の犯罪
島田荘司　ポルシェ911の誘惑
島田荘司　御手洗潔のダンス
島田荘司　本格ミステリー宣言
品川嘉也　右脳ビジネス

品川嘉也「奥の細道」の知恵
塩田　潮　霞が関が震えた日
塩月弥栄子　女四十代からの生き方にはコツがある
清水義範　グローイング・ダウン
清水義範　蕎麦ときしめん
清水義範　国語入試問題必勝法
清水義範　永遠のジャック&ベティ
清水義範　深夜の弁明
清水義範「青春小説」
清水義範　ビビンバ
椎名　誠　フグと低気圧
椎名　誠　犬の系譜
椎名　誠　熱風大陸〈ターウィンの海をめざして〉
椎名　誠　ねじのかいてん
島田雅彦　偽作家のリアル・ライフ
宍倉正弘　手錠〈ある警察官の犯罪〉
東海林さだお　サラリーマン専科　全五冊
下田治美　ぼくんち熱血母主家庭〈痛快子育て記〉
下田治美　ぼくんち熱血2DK
下田治美　おにぎりの具は真珠の指輪
杉本苑子　今昔物語ふぁんたじあ　全三冊
杉本苑子　玉川兄弟　全二冊
杉本苑子　長勝院の萩　全二冊
杉本苑子　孤愁の岸　全二冊
杉本苑子　江戸芙蓉堂医館
杉本苑子　元禄歳時記　全二冊
杉本苑子　虚空を風が吹く
杉本苑子　傾く滝
杉本苑子　絵島疑獄　全二冊
杉本苑子　胸に棲む鬼
杉本苑子　滝沢馬琴　全二冊
杉本苑子　引越し大名の笑い
杉本苑子　聞き語りにっぽん女性「愛」史
杉本苑子　埠頭の風
杉本苑子　秋蘭という女
杉本苑子　新とはずがたり
鈴木健二　気くばりのすすめ
鈴木健二　記憶力のすすめ
鈴木健二　役に立つ日本史物語
鈴木達也　山口組壊滅せず
杉田　望　半導体戦争〈フォーラムXの陰謀〉
杉元伶一　就職戦線異状なし
杉山邦博　土俵の鬼三代
杉山隆男　世界を変えた50日
瀬戸内晴美　かの子撩乱
瀬戸内晴美　蘭を焼く
瀬戸内晴美　祇園女御　全二冊
瀬戸内晴美　京まんだら　全二冊
瀬戸内晴美　彼女の夫たち　全二冊
瀬戸内晴美　純愛　全二冊
瀬戸内晴美　恋愛学校
瀬戸内晴美　燃えながら
瀬戸内晴美　嵯峨野より
瀬戸内晴美　幸福
瀬戸内寂聴　ブッダと女の物語
瀬戸内晴美　草宴
瀬戸内晴美　こころ　全二冊

瀬戸内晴美　花　怨
瀬戸内晴美　愛の時代　全二冊
瀬戸内晴美　輪　舞
瀬戸内晴美　蜜　と　毒
瀬戸内寂聴　伝教大師巡礼
瀬戸内晴美　ブルーダイヤモンド
瀬戸内寂聴　寂庵説法
瀬戸内寂聴　美と愛の旅
瀬戸内晴美　再　会
瀬戸内寂聴　いのち華やぐ
瀬戸内寂聴　寂庵だより
瀬戸内寂聴　愛と別れ
瀬戸内寂聴　新寂庵説法〈愛なくば〉
瀬戸内晴美　家族物語　全二冊
瀬戸内寂聴　生　死　長　夜
瀬戸内寂聴　寂聴愛のたより
瀬戸内晴美編　火と燃えた女流文学〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　新時代のパイオニアたち〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　国際結婚の黎明〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　恋と芸術への情念〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　自立した女の栄光〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　反逆の女のロマン〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　明治女性の知的情熱〈人物近代女性史〉
瀬戸内晴美編　人類愛に捧げた生涯〈人物近代女性史〉
瀬戸内寂聴　寂聴の仏教入門
久保田展弘　千田夏光　従軍慰安婦
関　広延　誰も書かなかった沖縄
関川夏央　「フォト・ルポ」七つの海で泳ぎたい。
関川夏央　「名探偵」に名前はいらない
曽野綾子　幸福という名の不幸　全二冊
曽野綾子　無　名　碑　全二冊
曽野綾子　地を潤すもの
曽野綾子　絶望からの出発
曽野綾子　私を変えた聖書の言葉
曽野綾子　雪に埋もれていた物語
曽野綾子　この悲しみの世に
曽野綾子　ギリシアの神々
田辺聖子　も　と　夫
田辺聖子　無常ソング
田辺聖子　女が愛に生きるとき
田辺聖子　女の食卓
田辺聖子　うたかた
田辺聖子　妾宅・本宅
田辺聖子　古川柳おちぼひろい
田辺聖子　私的生活
田辺聖子　世間知らず
田辺聖子　愛の幻滅
田辺聖子　中年ちゃらんぽらん
田辺聖子　日毎の美女
田辺聖子　男の城
田辺聖子　蝶花嬉遊図
田辺聖子　おんな商売
田辺聖子　苺をつぶしながら
田辺聖子　手づくり夢絵本
田辺聖子　ときがたりデカメロン
田辺聖子　おせいさんの団子鼻
田辺聖子　夢の菓子をたべて

田辺聖子　宮本武蔵をくどく法
田辺聖子　川柳でんでん太鼓
田辺聖子　どんぐりのリボン
田辺聖子　春情蛸の足
田辺聖子　ほのかに白粉の匂い
田辺聖子　私本・イソップ物語
田辺聖子　蜻蛉日記をご一緒に
田辺聖子　不倫は家庭の常備薬
田辺聖子　ぽちぽち草子
田辺聖子　『源氏物語』の男たち
立原正秋　春のいそぎ
立原正秋　雪のなか
立原正秋　夢のあと
立原正秋　剣と花　全二冊
立原正秋　永い夜
立原正秋　その年の冬
立原正秋　空蟬
谷川俊太郎訳　和田誠絵　マザー・グース　全四冊
谷川俊太郎　ペ

高橋三千綱　朝はひとりが一番いい
高橋三千綱　挑戦の世代
立花隆　田中角栄研究全記録　全二冊
立花隆　中核VS革マル　全二冊
立花隆　日本共産党の研究　全二冊
立花隆　文明の逆説
立花隆　青春漂流
立花隆　同時代を撃つ　I〜III　〈情報ウオッチング〉
田中光二　アッシュ―大宇宙の狼
立原えりか　でかでか人とびびび人
立原えりか　小さな花物語
立原えりか　朝ごとの花束
立原えりか　タマネギ色のなみだ
立原えりか　月あかりの中庭
立原えりか　木馬がのった白い船
立原えりか　蝶を編む人
立原えりか　赤い糸の電話
立原えりか　わたしとおどってよ　白くまさん
滝口康彦　拝領妻始末

滝口康彦　猿ケ辻風聞
田原総一朗　総理を操った男たち
田原総一朗　「円」を操った男たち
田原総一朗　パソコンウォーズ最前線
田原総一朗　メディア・ウォーズ　〈テレビ仕掛人たちの興亡〉
武田泰淳　司馬遷―史記の世界
高杉良　虚構の城
高杉良　大逆転！
高杉良　バンダルの塔
高杉良　懲戒解雇
高杉良　労働貴族
高杉良　広報室沈黙す　全二冊
高杉良　会社蘇生
高杉良　炎の経営者　全二冊
高杉良　小説日本興業銀行　全五冊
高杉良　小説巨大証券（ガリバー）
高杉良　社長の器
高杉良　祖国へ、熱き心を　〈東京にオリンピックを呼んだ男〉
高杉良　大合併　〈小説第一勧業銀行〉

高杉　良　その人事に異議あり
多岐川　恭　濡れた心
高田好胤　親の姿子の心
武田鉄矢　ふられ虫の唄
武田鉄矢　ふられ虫がゆく！
高柳芳夫　プラハからの道化たち
谷　恒生　戦国の風
玉村豊男　男と女のレストラン
高橋源一郎　さようなら、ギャングたち
高橋源一郎　ジェイムス・ジョイスを読んだ猫
高橋克彦　写楽殺人事件
高橋克彦　浮世絵鑑賞事典
高橋克彦　倫敦（ロンドン）暗殺塔
高橋克彦　悪魔のトリル
高橋克彦　総門谷
高橋克彦　総門谷R　阿黒篇
高橋克彦　北斎殺人事件
高橋克彦　歌麿殺贋事件
高橋克彦　広重殺人事件
高橋克彦　バンドネオンの約（ジャガー）
高橋克彦　蒼（あお）夜叉（やしゃ）
高橋克彦　浮世絵ミステリーゾーン
高橋克彦　北斎の罪
大洋漁業広報室編　お魚おもしろ雑学事典
高橋治　秘伝
高橋治　夜光貝岬
高橋治　うず潮のひと
高橋治　さすらい波太郎〈房州沖純情〉
高橋治　さすらい波太郎
高橋治　さすらい波太郎〈相模湾慕情〉
高橋治　さすらい波太郎〈再会遠州灘〉
高橋治　人間ばあてい
多島斗志之　密約幻書
高橋章子　どっかおかしい
高橋章子　アッコです、ドモ。
高橋章子　忘年会全記録
高橋義夫　黄塵日記
高樹のぶ子　虹の交響
高橋文利　新ビジネスエリートの理論武装
田中芳樹　創竜伝1～2
滝谷節雄　鯨のなんでも博物誌
高田文夫　正しい団塊の世代白書
玉木英治　クレジット破産
陳舜臣　阿片戦争全三冊
陳舜臣　新西遊記全三冊
陳舜臣　枯草の根
陳舜臣　旋風に告げよ全二冊
陳舜臣　風よ雲よ全二冊
陳舜臣　英雄ありて
陳舜臣　妖のある話
陳舜臣　太平天国全四冊
陳舜臣　中国五千年全二冊
陳舜臣　相思青花全二冊
陳舜臣　中国の歴史全七冊
陳舜臣　敦煌の旅
陳舜臣　シルクロードの旅
陳舜臣　北京の旅

1993年12月15日現在

ISBN4-06-185541-7

C0193 P380E (0)



9784061855410



1910193003803

文武に秀でた奔放な性格、脱藩をくり返しても許され主家に頼りにされた鬼才高杉晋作、幕末徳川の忠臣、稀有の財政家小栗上野介、不屈のさむらい精神を発揮した至誠の人松平容保、貧苦を刺激に絵筆に燃えた葛飾北斎……彼等を必要とした時代が生んだ、かけがえのない男たちの波瀾の生涯を描く、初期短編集。

若き獅子
池波正太郎
定価380円
(本体369円)

い
4
22